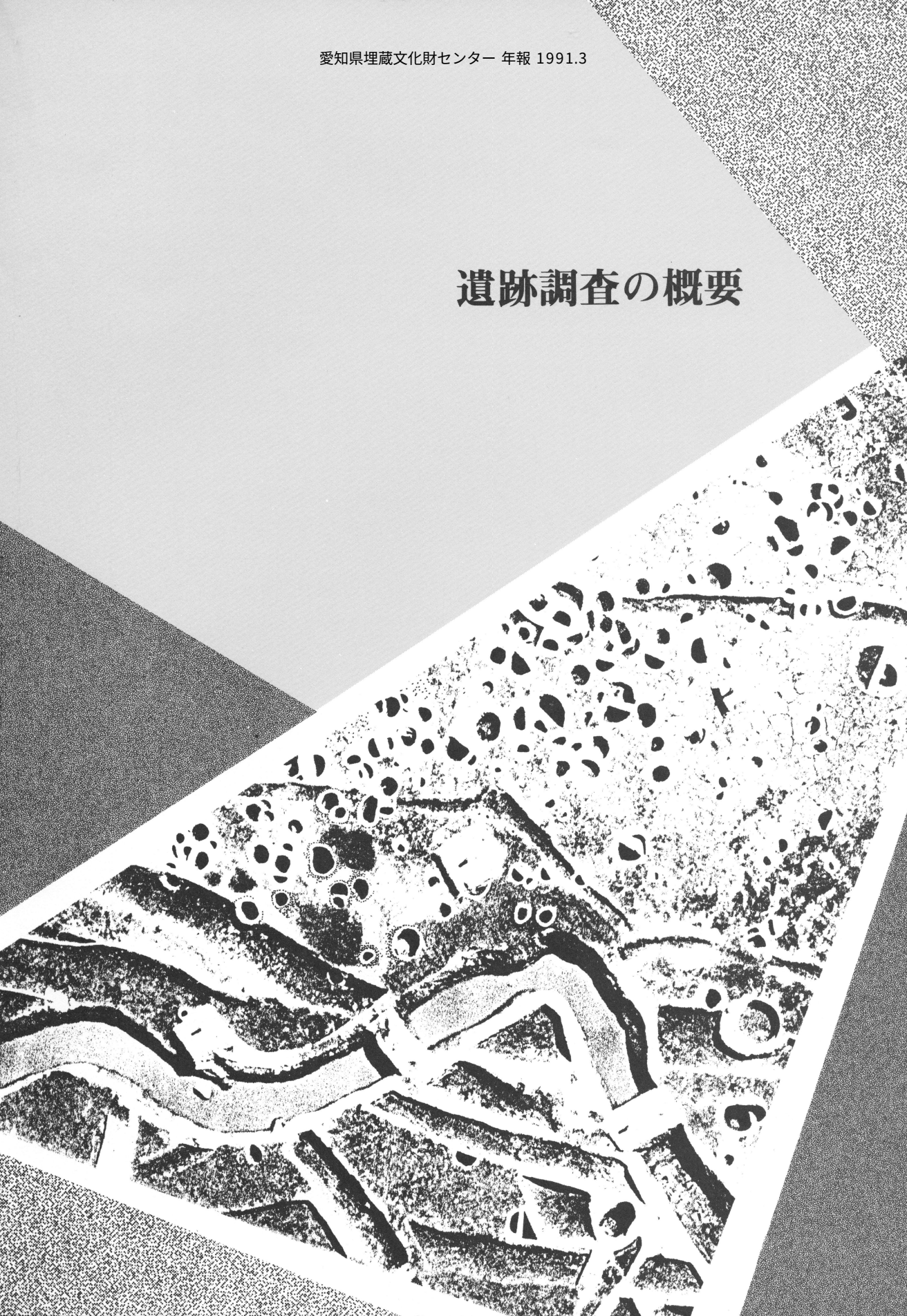
愛知県埋蔵文化財センター 年報 1991.3

遺跡調査の概要



調査の理由と工程

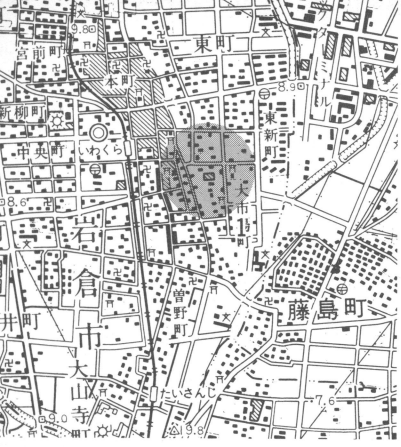
1．発掘調査

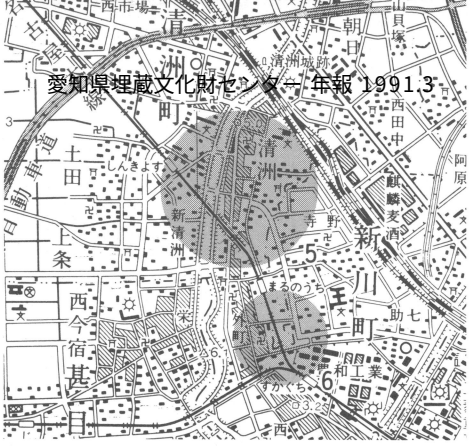
調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積(m²)		調査の期間	調査担当者
建設省	名古屋環状2号線	松河戸遺跡		636	90.11～90.12	真鍋・岡本
日本道路公団	(962m²)	勝川遺跡	A	326	90.8～90.9	真鍋・岡本
建設省	国道23号	岡島遺跡	A	4,500	90.9～90.12	山田・大橋・池本・尾野
	バイパス	(9,000m²)	B	4,500	91.1～91.3	山田・大橋・池本・鈴木
		広坪遺跡	試掘	214	90.6	福岡・北村
	(9,214m²)	不馬入遺跡				
	潮見バイパス	境川遺跡		600	90.4～90.6	山田・樋上
	名古屋家庭簡易裁判	名古屋城三の丸		2,800	90.10～91.3	日比・赤塚・鷲見・小塚・金子
(12,684m²)	所・合同庁舎建設	遺跡				
日本道路公団	東海北陸自動車道	西上免遺跡		1,000	91.2～91.3	日比・赤塚
愛知県土木部	瑞浪・大野瀬線	上万場遺跡	A	2,250	90.4～90.7	池本・尾野
(道路建設)		(4,500m²)	B	2,250	90.7～90.10	池本・尾野
	蒲郡・碧南線	東光寺遺跡	A	2,500	90.4～90.6	福岡・酒井・川井
		(5,000m²)	B	2,500	90.7～90.9	福岡・大橋・川井
	東三河環状線	淡洲神社北遺跡	A	2,000	90.5～90.7	山田・大橋・松田
			B	1,000	90.5～90.7	山田・大橋・松田
		(5,000m²)	C	2,000	90.4～90.5	山田・大橋・松田
	加納・東保見線	根川遺跡		300	90.6～90.8	山田・北村
	(2,492m²)	伊保遺跡		2,192	90.12～90.3	真鍋・岡本
	中畑橋橋梁整備	清水遺跡	A	380	91.1～91.2	山田・尾野
		(880m²)	B	500	91.2～91.3	山田・尾野
	西尾・吉良線	黄金堤		100	90.10～90.11	大橋・北村
	新川・清洲線	清洲城下町遺跡	G	180	90.11～90.12	城ヶ谷・鈴木
	新川・甚目寺線	外町遺跡	試掘	100	90.10	城ヶ谷・遠藤
(河川課)	五条川改修	清洲城下町遺跡	A	750	90.7～90.8	城ヶ谷・遠藤・鈴木・加藤
			B	400	90.9～90.12	城ヶ谷・鈴木
			C	1,150	90.9～90.12	遠藤・加藤
			D	1,640	90.9～90.12	城ヶ谷・鈴木・加藤

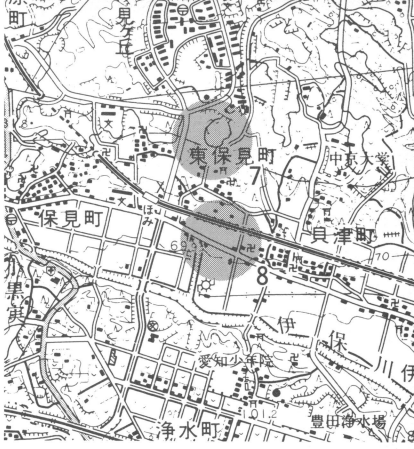
調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積(㎡)		調査の期間	調査担当者
		(5,600㎡)	F	1,660	91.1~91.3	城ヶ谷・遠藤・加藤
(都市施設)	清洲・新川線	清洲城下町遺跡	H	160	90.11~90.12	城ヶ谷・鈴木
	(210㎡)		I	50	91.1	遠藤・加藤
	勝川土地区画整理	勝川遺跡	B・C	329	90.6~90.8	真鍋・岡本
	萩原・多気線	岩倉城遺跡	A	1,500		
			B	750	90.10~91.2	日比・服部・小塚
(27,062㎡)	(3,000㎡)		C	750		
愛知県民生部	老人ホーム建設	松久保遺跡		3,750	90.10~91.3	山田・松田
愛知県衛生部	尾張病院改築	山中遺跡	A~H	3,500	90.4~90.10	日比・赤塚・鷲見・小塚・
					91.2~91.3	服部・金子・伊藤
愛知県警察	豊橋警察署改築	吉田城跡		600	90.10~90.11	遠藤・川井

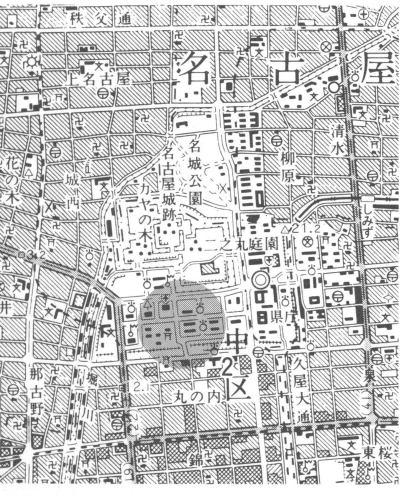
2．報告書

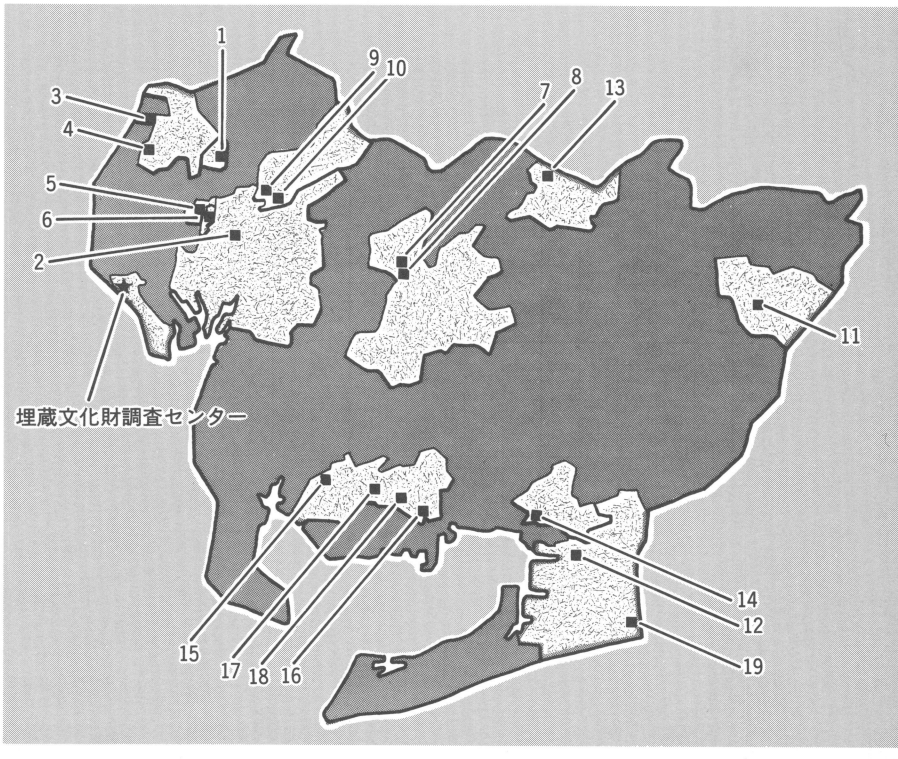
調査委託者	調査の理由	遺跡名	調査面積	調査年度
建設省	名古屋環状2号線	大渕遺跡	10,464㎡	昭和58~昭和60年度
日本道路公団		池下古墳	3,054㎡	昭和63~平成元年度
		清洲城下町遺跡(整理)	17,230㎡	昭和59~昭和61年度
		朝日西遺跡(整理)	13,919㎡	昭和58~昭和60年度
		勝川遺跡(整理)	5,934㎡	昭和62~平成2年度
		朝日遺跡	49,624㎡	昭和56・昭和60~平成元年度
建設省	潮見バイパス	境川遺跡	600㎡	平成2年度
住宅都市整備公団	水野特定土地区画整理	小田妻古窯跡(整理)	2,000㎡	平成元年度
愛知県土木部	勝川土地区画整理	勝川遺跡(整理)	6,108㎡	昭和59~平成2年度
	国道247号線	松崎遺跡	2,000㎡	昭和63年度
	東三河環状線	麻生田大橋遺跡	4,800㎡	昭和63~平成元年度
		森岡遺跡	1,000㎡	平成元年度
		淡洲神社北遺跡	5,000㎡	平成2年度
	中畑橋橋梁整備	清水遺跡	2,220㎡	平成元年度
	西尾・吉良線	黄金堤	100㎡	平成2年度
愛知県農地林務部	水質障害対策	土田遺跡	1,300㎡	平成元年度

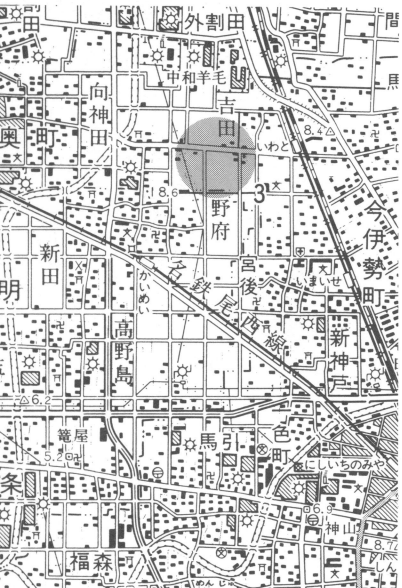




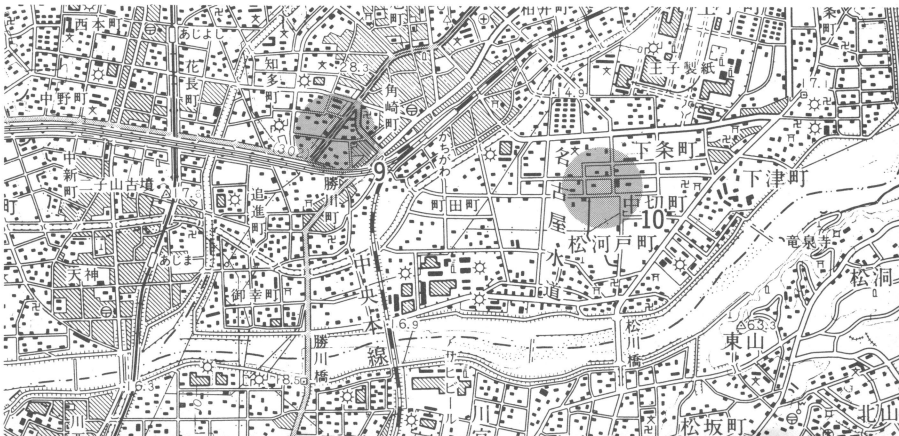


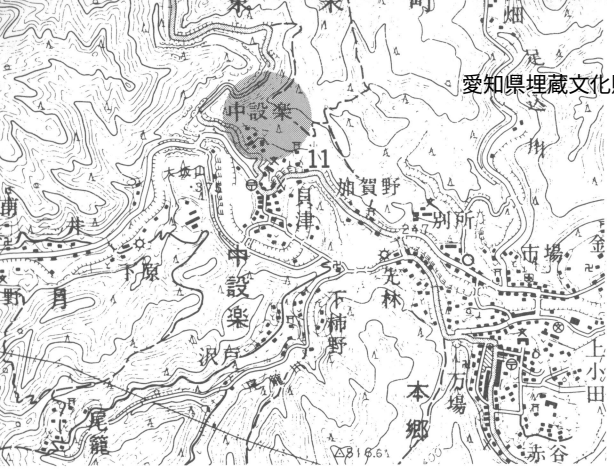


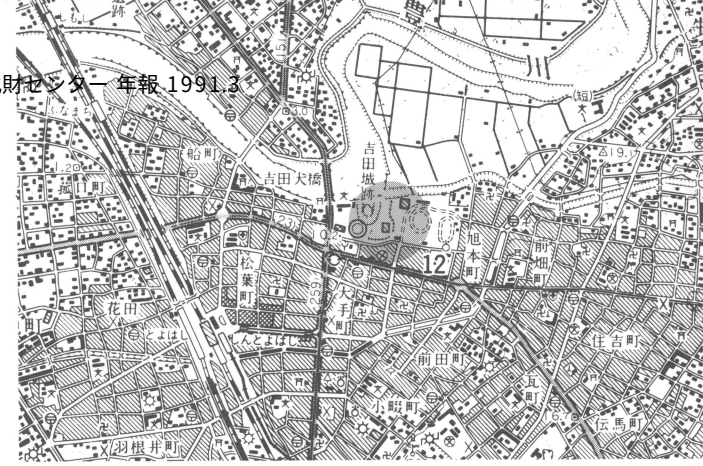




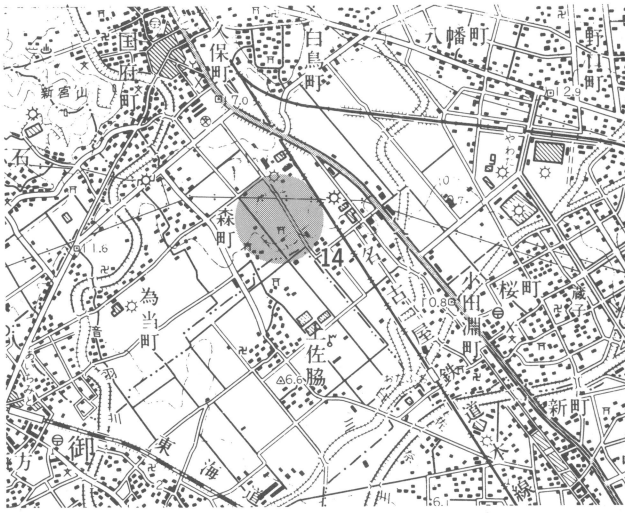
1 岩倉城遺跡
2 名古屋城三の丸遺跡
3 西上免遺跡
4 山中遺跡
5 清洲城下町遺跡
6 外町遺跡範囲確認調査
7 根川遺跡
8 伊保遺跡
9 勝川遺跡
10 松河戸遺跡
11 松久保遺跡
12 吉田城遺跡
13 上万場遺跡
14 淡洲神社北遺跡
15 清水遺跡
16 東光寺遺跡
17 岡島遺跡
18 国道23号バイパス試堀調査
19 境川遺跡

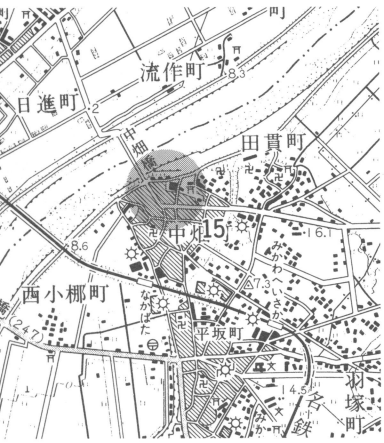


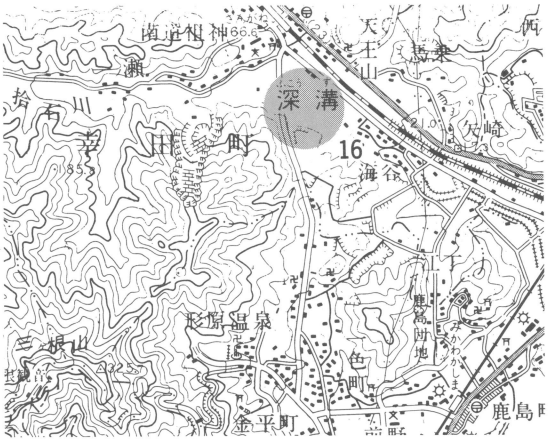

中設楽
11
貝津
加賀野
別所
市場
金
中設楽
下原
月
野
下柿野
元林
沢戸
七小田
本郷
万場
寛籠
赤谷


吉田城
吉田大橋
12
旭本町
花田
松葉町
前田町
住吉町
小鍛冶町
瓦町
伝馬町
羽根井

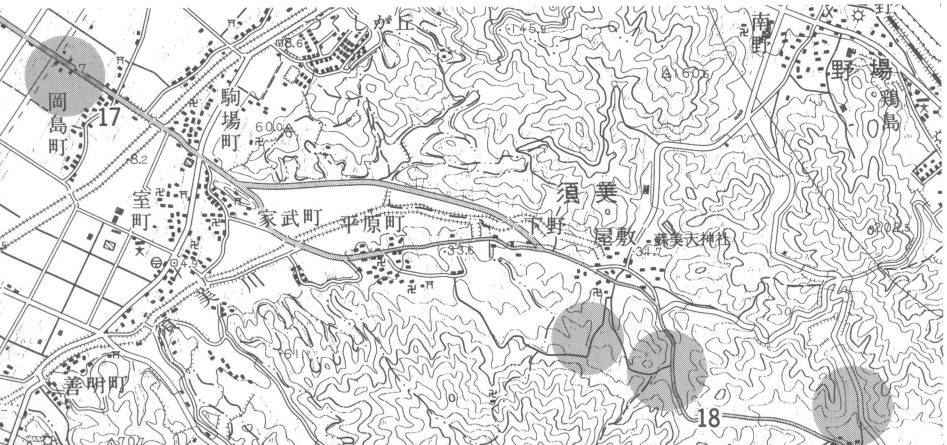

若里
須淵
浅谷
寺野
13
川渡
大篠
矢作第二ダム
下中切
不動
時瀬
下切
築和合
矢作
寺山


国府町
八幡町
白鳥町
森町
14
為当町
桜町
小田渕町
佐脇
新町
御
東海


流作町
日進町
田貫町
中畑
15
中切
西小柳町
平坂町
羽塚町


南平地
神
天王山
馬乗
深溝
16
岩田町
矢崎
海
彩虹温泉
三根山
色町
鹿島
金平町


新幹線
日東電気
豊清町
原町
里山
白須賀
境
19
長
西長谷
東細谷町


岡島町
17
駒場町
室町
家武町
平原町
須美
下野
屋敷
森美夫神社
善明町
18

清洲城下町遺跡

調査の概要

清洲城下町遺跡は濃尾平野の中央部を南流する五条川中流域の自然堤防帯に展開する古代から近世にかけての遺跡である。



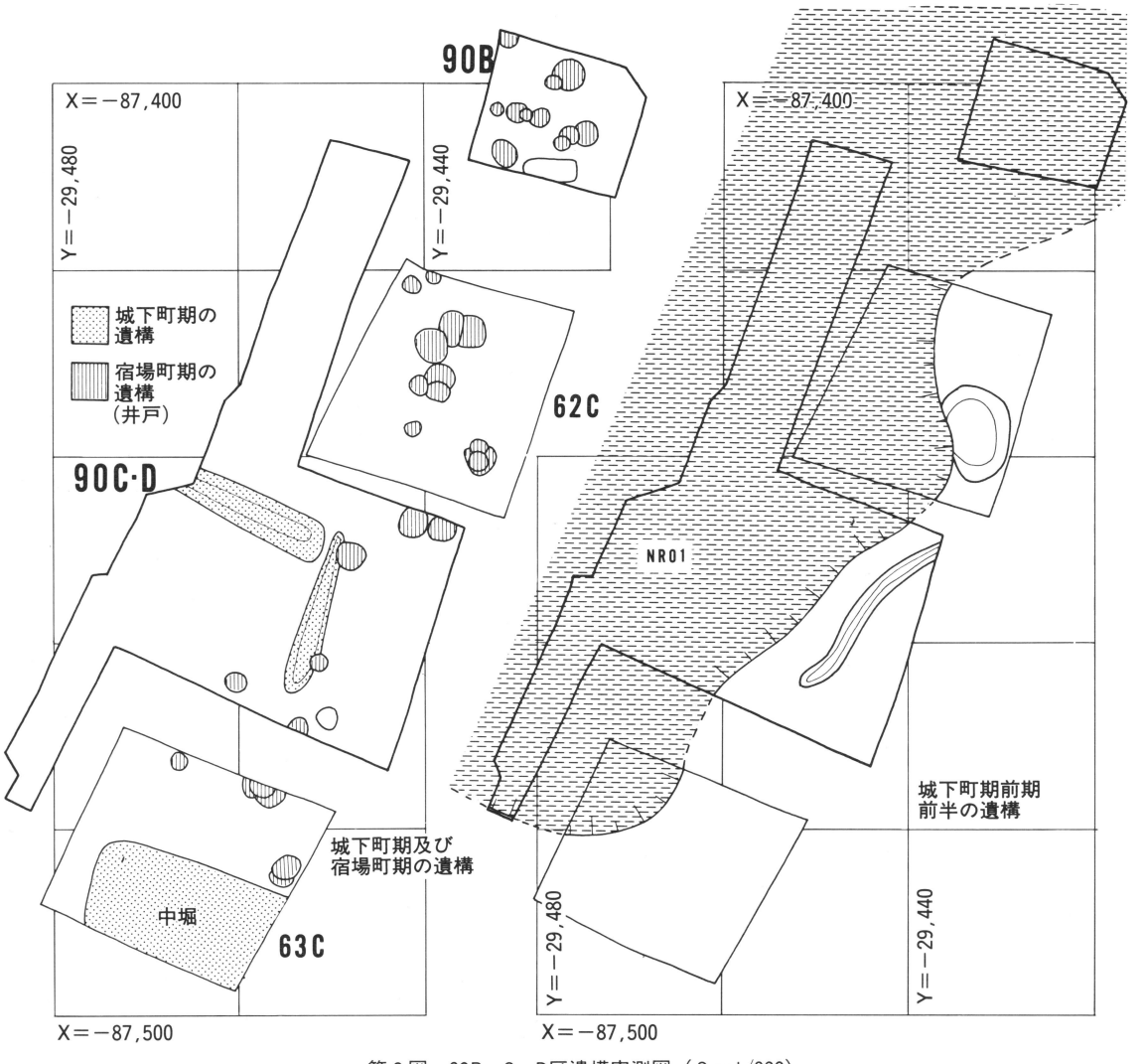
第Ⅰ図　調査区位置図（1/10000）

発掘調査は昭和56年度に名古屋環状２号線にともなう事前調査が開始されて以来、毎年、五条川改修関連調査、県道清洲新川線関連調査などが継続して実施されている。今年度は五条川改修関連調査（Ａ～Ｆ）5,600㎡、県道新川清洲線関連調査（Ｇ）180㎡、県道清洲新川線関連調査（Ｈ・Ｉ）210㎡、合計5,990㎡を実施した。

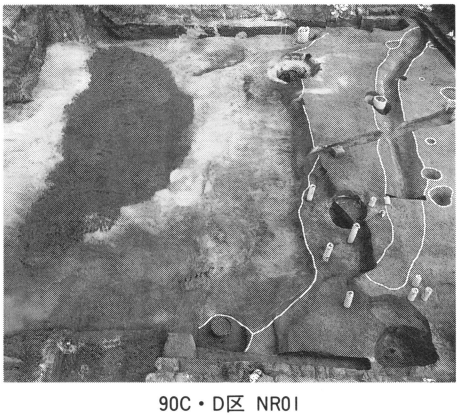
なかでも五条川改修関連調査は昭和61年度に調査が開始されてからすでに５年の年月が経過し、調査面積は全体で２万㎡以上に達している。今年度はいよいよ現堤防下の調査に入り、旧五条川と美濃街道の関係などが注目された。調査は渇水期を待って９月より実施したが、今年度は異常気象のため台風が３回も直撃すると言う事態がおき、作業は難航した。しかし、結果としては旧五条川（支流も含めて）の跡とその流れの一端がせき止められてできた「河跡沼」を確認することができた。「河跡沼」からは人骨や漆器など多様な遺物が紀年銘木簡とともに出土し、当時の生活を復元するのに貴重な資料をえた。

県道清洲新川、新川清洲線の調査では当初の予想どおり古墳時代から平安時代の竪穴住居など古代の遺構を確認することができた。

（城ヶ谷和広）



第２図　90B・C・D区遺構実測図（S＝1/800）



90C・D区 NR01



90A区　SE05井戸枠検出状況

調査の概要

五条川河川改修関連

今年度の調査はA区とB・C・D区が非常に距離が離れており、様相がずいぶん異なっていたので、それぞれ調査区ごとに概要を記述することとする。

A区　ここでは、奈良・平安時代、中世、城下町期の3時期の遺構、遺物を確認した。奈良、平安時代では、竪穴住居2棟を確認した。ここからは、K－14窯式の灰釉陶器が出土した。この時期の遺構、遺物はこれまで確認されておらず、当該期の集落の存在を示唆させる資料となる。

中世では、井戸2基、溝2条、ピット群を確認した。SE05は、井戸枠の上段に横板3枚をセットにして方形に組み合わせ、その下には竹材を隙間無く方形に並べたものである。また、井戸の最下層からは、12世紀後半から13世紀前半に位置付けられる椀と底部外面に墨書を施した皿がセットになって出土した。どちらも使用された痕跡は認められず、廃絶儀礼に用いられたものと考えられる。

城下町期では、前期に比定できる屋敷を囲むと考えられる溝2条、井戸3基を確認した。

B・C・D区　ここでは、城下町期と宿場町期の遺構、遺物を検出した。

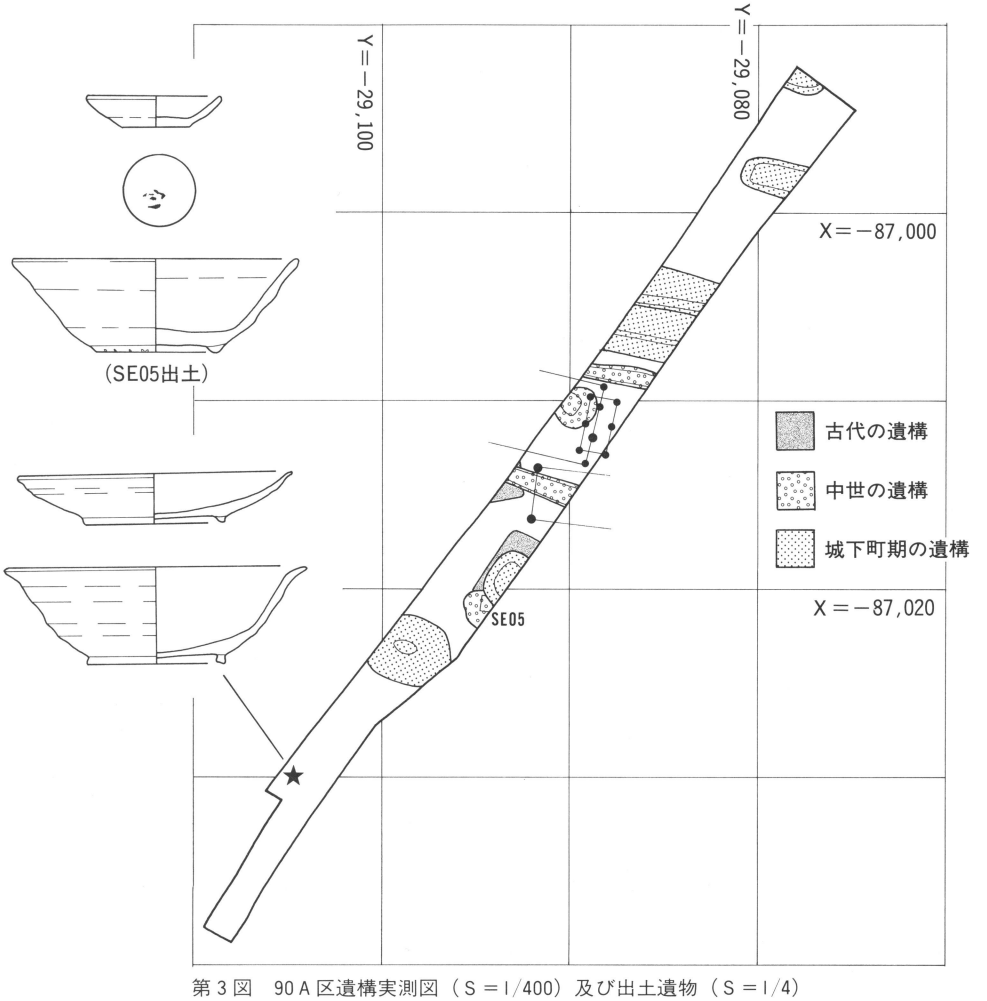
城下町期については、これまで前期は、守護所が下津から清須に移った1478年から1586年の天正地震、その後の織田信雄の大改修までを総称していたが、今回の調査区、ことにD区で、前期をさらに2期に細分し得る状況が確認された。前半は、今年の調査地点では五条川の流路とその澱み（NR01）の時期で、他に流路に平行して走る溝1条を検出した。澱みの部分からは、永正五（1508）年の紀年銘の卒塔婆が出土しており、また、陶磁器の年代からも16世紀前半に位置付けられよう。後半は、天正地震直前の16世紀後半に位置付けられ、C・D区で溝2条を確認した。そこでは天正地震直前に五条川が埋まったそのままの状態のところを造成しようとした状況が確認できた。それは、急な造成であったためか地盤が非常に不安定で、天正地震の際に多量の砂が吹きだし、地表面が沈下して砂に覆われた状況を確認した。砂を取り払った後の当時の面では多くの人の足跡を検出した。遺構も非常に希薄である事から、何か急な理由があって町を作ろうとし、地震によって壊された状況が想定できる。

宿場町期については、調査区の位置がちょうど美濃街道のすぐ裏手という事もあって、B区を中心に町屋の裏側に展開する井戸群を検出した。B区の井戸群はほぼ5群に分かれており、何度も掘り直した状況が確認できる。時期は19世紀前半頃に位置付けられる。

ＮＲ01出土の木製品について

ここでは、永正五（1508）年銘の資料と共に、16世紀前半に比定できるＮＲ01の澱みからまとまって出土した木製品について紹介する（図４、図５）。これらの木製品は、紀年銘資料と同一の灰黒色粘質土中から出土した。木製品には、椀、皿、箸、下駄、卒塔婆、柿経などがあり、その量は非常に多く、まだ整理作業が済んでいないので、ここではその一部を紹介するにとどめる。

卒塔婆類は、大きさにより３種類に分かれる（第４図）。そのうち、小型のものは、鴫という文字をいれた卒塔婆が何枚も出土した。これは、片面の文言の内容から２種類に分けられる。一つは、南無阿弥陀佛為雲窓慶大姉也（５、６）、もう一つは、南無阿弥陀佛為定因也（３、４）である。もう片面は鴫と日付が記されている。１は永正五年銘の板塔婆である。上部は欠損している。片面は、□陀佛　賢阿弥陀佛往生位、もう片面は、□□陀佛

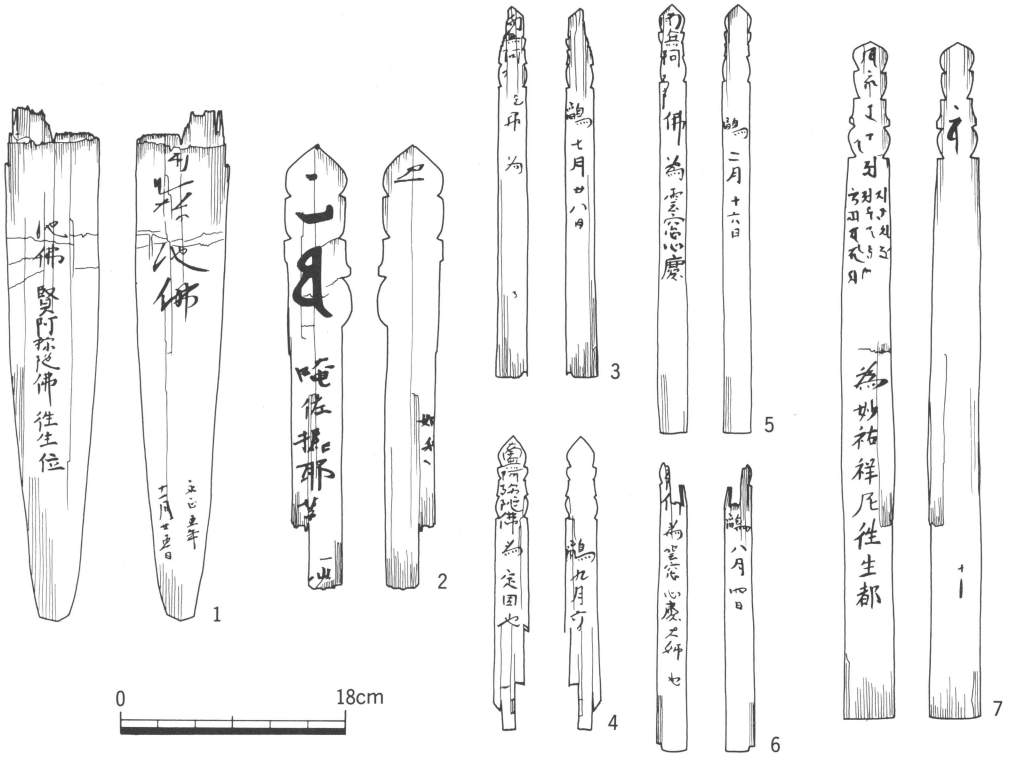


第３図　90Ａ区遺構実測図（Ｓ＝1/400）及び出土遺物（Ｓ＝1/4）

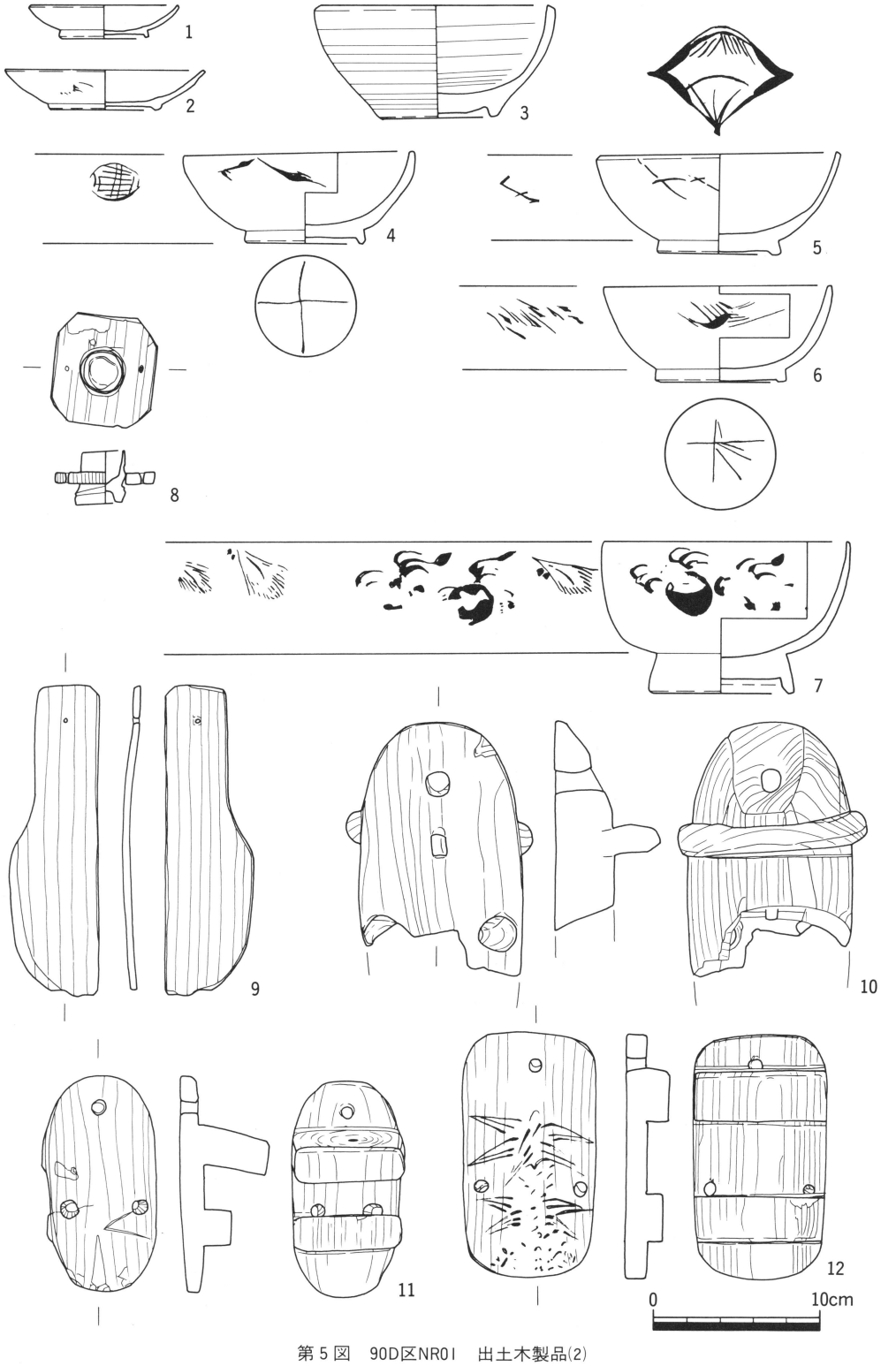
永正五年十一月廿五日と記されている。2は卒塔婆の上半分である。片面は、文珠菩薩を表す梵字、俺佐□耶□と記されている。7は中型品である。五輪部分は梵字で空、風、火、水、地を表し、さらにその下に梵字を記し（経文か）、その下は、為妙祐祥尼往生都（率望也）と読める。裏面は大日如来を表す梵字が、さらにその下に十月十四日と記されている。

木製品類も多く出土した（第5図）。3は白木椀である。白木椀はこれまで清須で出土しておらず特殊な使用法が推定できよう。漆製品も、皿、椀（1、2、4～7）が出土しており、椀はその大きさの差から、2～3種類に分類できよう。8は木の板の中央に竹材を差し込んだものである。竹の縁には煤が着いており、大きさから、線香立てではないかと思われる。下駄は一木作りのものと、差歯下駄の2種類を検出した。12は表面に焼き印で花と思われる文様を施している。

さらに、これらの木製品と共に人、鹿、犬、猪、馬などの骨が出土した。これらの骨は埋葬されたそのままの状態のものと、後で手を加えたものとが存在する。この状況からこの場所が河原での特殊な空間を推定させる資料である。（加藤とよ江）



第4図　90D区NR01　出土木製品(1)



第 5 図　90D区NR01　出土木製品(2)

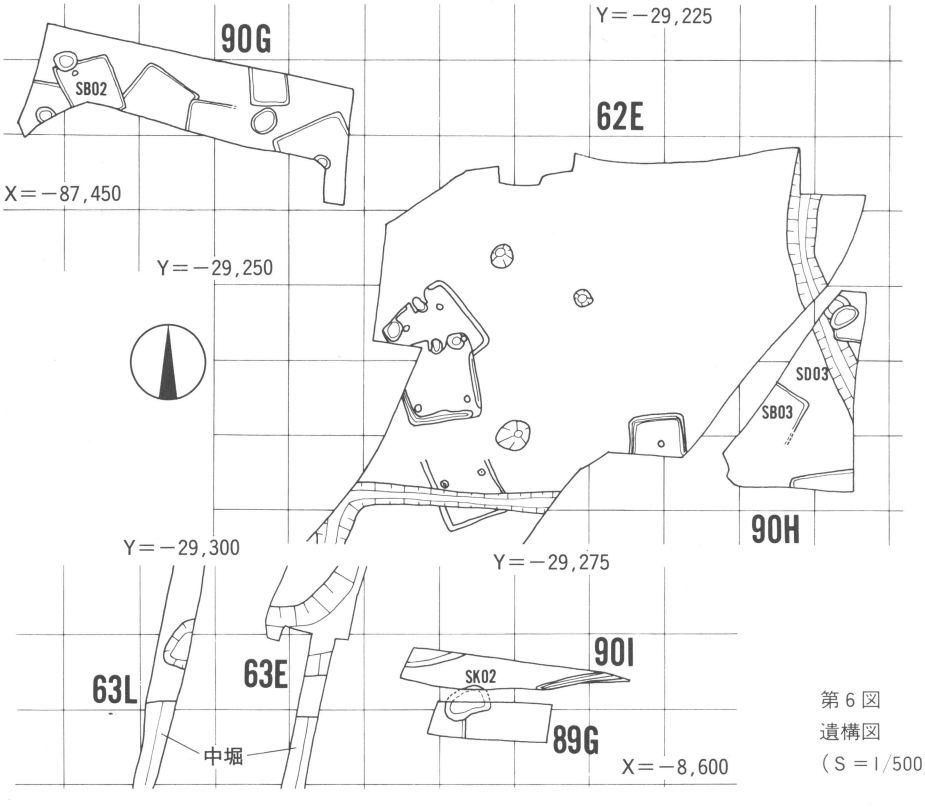
県道新川・清洲線関連

本年度はG・H・I区の調査を実施した。以下に概要を示す。

G区　奈良時代の竪穴住居6棟と土坑が数基検出された。竪穴住居は一辺が5m前後を測る隅丸方形を呈し、周溝は検出できなかった。出土遺物はSB02から8世紀後半の杯が出土した他は、あまり良好な遺物は見られない。表土および江戸時代の土坑から7世紀から8世紀の須恵器が出土することから、これらの竪穴住居の時期がおおよそ伺える。なお、若干の遺物はあるものの、清須城下町に関連する遺構は存在しなかった。

H区　古墳時代後期の溝と平安時代の土坑などが検出された。古墳時代後期の溝は、62年度に調査したSD03（62E区SD07）に繋がるもので、該期の集落の限りを示すものであろう。また、SB03から弥生時代中期の甕が出土し、従来遺物のみを確認していた弥生時代の遺構の存在も想定できよう。ただ、G区と同様、清須城下町の遺構はなかった。

I区　昨年度調査した隣接する89G区と合わせて報告したい。清須城の中堀の内側に隣接する地点で、中堀に平行する溝1条と16世紀代の滞水状況を示した土坑が検出された。土坑の中からは、法華経を書写した柿経が数百枚程出土しており、その性格が問題である。この他には7世紀の土坑、8世紀の竪穴住居が存在し、該期の遺物が散見している。



第6図
遺構図
（S＝1/500）

まとめ

平成２年度の調査では、古代から近世までの各時期の遺構・遺物を得たが、従来と同様、調査地点によって遺跡の様相が異なっている。ここでは要点を時期ごとに整理する。

１、古代に関しては、これまで集落跡の存在が確認されていた田中町地区一帯で、７～８世紀代の竪穴住居が検出され、新たなデータが蓄積された。それに加え、今まで空白となっていたＫ－14窯式の段階の遺物と遺構が、これまで知られている集落跡よりも北に位置するＡ区で確認され、集落の連続性と人々の移動について今後問題となるであろう。

２、中世の段階では、Ａ区で井戸などを確認した。これは12～14世紀を中心とする朝日西遺跡の南端部の遺構と考えられ、朝日西の集落の広がりを表す資料である。

３、清須城下町に関連する大きな成果は、Ｂ・Ｃ・Ｄ区で旧五条川を検出したことと天正地震前後の中堀内部の状況を確認したことである。

旧五条川は現五条川よりやや東に広がり、Ｄ区南端で西に屈曲する形で検出できた。これは「清須村古城絵図」と合致し、屈曲点より南に自然堤防の微高地が展開していたと考えられる。旧五条川の脇に位置する澱みの黒灰色粘土からは永正五（1508）年の紀年銘資料が出土しており、共伴する土器・陶磁器・多種多様な木製品などは良好な一括資料となるだろう。また、この澱みには死後加えた刃傷が残存している人骨、馬・鹿・犬などの獣骨、卒塔婆、柿経なども投げ入れられており、河原に特殊な空間が広がっていたと推察できる。川に平行する溝が旧五条川の屈曲点で開口することとあわせて、その持つ意味は今後の課題である。

旧五条川を埋積した粘土の堆積は短期間に行われ、1586年の天正地震の噴砂によって覆われている。旧五条川埋積後、天正地震までの間は主な遺構は溝一条しか無く、地震直前に足跡が認められることから建造物などがなかったと考えられる。天正地震以降の段階にも遺物・遺構がほとんど存在せず、清須城下町中堀の虎口内部に相当する空間に軍事的な空白地があったことは注目に値する。

Ａ区で検出した前期の溝は屋敷地を囲む溝と推定でき、田中町地区の屋敷地群と同様のものである。この屋敷地群は一辺100ｍ規模の居館を取り囲む形で展開していただろう。

４、宿場町の時期の遺構は、18世紀末以降の井戸群が中心である。従来の知見と同様、現美濃街道に沿った形で、しかも幾つかの切り合い関係をもって検出された。今回は特に美濃街道が五条橋に向かって曲がる角地での調査を行い、その地点での遺構配置が問題であった。結果として、東西方向に走る現美濃街道に接近して井戸が発見され、現美濃街道の東西方向に面して短冊型地割を成していたとは考えにくい。なお、昨年度確認された瀬替え以前の宿場町に関する遺構は全く存在しなかった。　（鈴木正貴）

山中（やまなか）遺跡

調査の経過

濃尾平野のほぼ中央に位置する一宮市は、犬山扇状地の扇端部でもあることから、伏流水が沸き出す水の町として、古くから多くの産業と文化を育んできた。そして市域西方に位置する萩原町周辺では、木曽川により形成された自然堤防がよく発達し、北から山中遺跡・南木戸遺跡・苗代遺跡・二夕子遺跡・河田遺跡と、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が密集している。なかでも、山中遺跡は弥生時代後期の標式遺跡として著名であり、その発見は昭和34年に遡る。県立尾張病院建築、改築に伴い昭和34年に第１次調査、昭和55年に第２次調査、続く昭和56年に第３次調査が行われ、縄文時代晩期から弥生時代全般にわたる遺構・遺物が検出されている。

今回、県立尾張病院の改築に伴い、その事前調査として、3500㎡にわたる発掘調査を実施した。Ａ～Ｈの８つの調査区を設定し、調査期間は４月～９月であった。調査の結果、竪穴住居・方形周溝墓・水田などをはじめとする縄文時代晩期から古墳時代初頭にかけての遺構・遺物を良好な状態で検出することができた。（日比　宰）

調査の概要

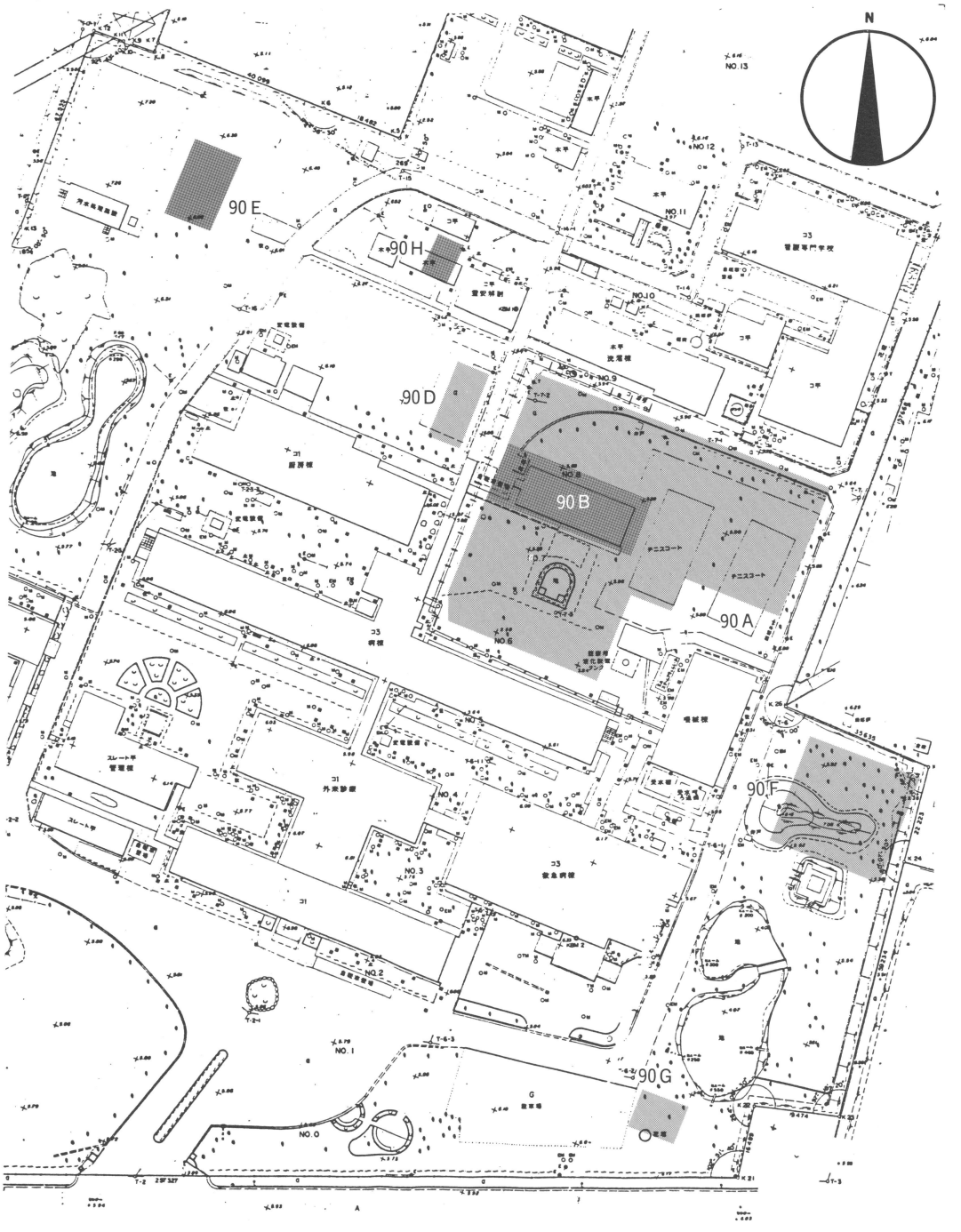
山中遺跡は、弥生時代後期の標式遺跡として著名である。今回の調査で確認された遺構・遺物は、弥生時代前期（Ⅰ期）と弥生時代後期から古墳時代初頭（Ⅱ期）の二時期に大別することができる。以下、各調査区ごとに、その概要を述べる。

Ａ区　Ⅰ期の遺構としては、竪穴住居・方形周溝墓・環濠の可能性が考えられる大溝・石器製作関連遺構があり、県下で初めて稲作農耕定着期のムラの一端が明らかとなった。Ⅰ期の遺物は、遠賀川式土器と条痕系土器が約半数ずつ出土し、下呂石を石材とする石器も出土した。Ⅱ期の遺構としては、主体部と祭事跡を伴う方形周溝墓があり、当時の埋葬状況を知る上で貴重な資料となった。

Ｄ区　Ⅱ期の方形周溝墓を検出したが、古代から近世の遺構・遺物も散在的に見られた。

Ｆ・Ｇ区　Ｆ区では、主体部が残存するⅡ期の「前方後方型墳丘墓」を検出し、この時期の墓制の展開を考える上で興味深い資料となった。Ｇ区では、Ⅱ期の水田跡を検出し注目された。

調査区の基本層序は、第Ⅰ層が尾張病院建設時の整地層及び旧耕作土で、第Ⅱ層が暗褐色シルト層で、遺物を包含する。第Ⅲ層が黄褐色シルト層で、遺構検出面となる。（鷲見　豊）



第Ⅰ図　調査区位置図（1/3000）

A区

竪穴住居

SB	規模(m)		深さ(cm)
10	5.4	−	8
11	6.1	−	12
12	5.3	5.2	8
13	4.1	4.0	7
14	−	−	6
15	−	−	13
16	3.9	3.0	17
17	4.6	−	10
18	5.4	−	12
19	4.2	4.0	1

方形周溝墓

SZ	規模(m)		溝幅(m)
01	(9.5)	9.4	0.8
02	(10.0)	(7.0)	0.8～1.0
03	10.8	10.5	1.2～1.9
04	(8.0)	6.7	1.2～1.7
05	(5.6)	(4.2)	0.5～0.7
06	6.5	5.6	0.6～1.0
07	6.5	(5.1)	0.4～1.1
10	13	−	6 ～ 7
11	−	−	3.4

遺構

弥生前期

弥生時代前期の遺構としては、竪穴住居10棟・方形周溝墓７墓・環濠の可能性が考えられる大溝２条・石器製作関連遺構等がある。遺構は調査区のほぼ全域で確認されており、環濠と考えられるＳＤ62によって、竪穴住居が集中する居住域と方形周溝墓が築造された墓域とに明確に区分される。竪穴住居は重複して検出されており、いずれも一辺５ｍ前後の規模であり、方形状を呈する。特にＳＢ17は、石器製作に関連すると考えられる下呂石の原石・石核等がまとまって出土しており、周辺に展開する石器製作関連遺構（ＳＫ50、ＳＫ75等）の存在とあわせ興味深い。方形周溝墓は、その規模より一辺10ｍ前後のＳＺ01～03と６ｍ程のＳＺ04～07の二群に分類することができる。いずれの周溝墓も、平面形態は四隅に陸橋部を有するタイプであり、所謂“東日本的周溝墓”の初現を示す資料として位置付けられよう。（服部信博）

弥生後期

方形周溝墓２基を確認でき、その内ＳＺ10は、北溝を調査区外に置き、南西隅に陸橋部を設けるものである。また陸橋部から墳丘中央部にかけて11基の土坑が確認された。その内４基（ＳＫ29・47・55・56）を除いたものが主体部と考えられる。ＳＫ36は墳丘の中央部に位置し、東西方向に主軸を置く6.0ｍ×1.4ｍの規模を測る大型の墓壙。ＳＫ56は1.65ｍ×1.0ｍの土坑で、その内部より小型の土器３点が出土している（第６図１・２・３）。いずれも山中式土器に所属するものと考えられる。また東溝においてもほぼ同時期の土器（４～７）が出土しており、ＳＺ10の築造を山中式後半の新しい段階に置くことができよう。規模は墳丘の東西13ｍ・南北13ｍ(推定)、周溝幅６～７ｍ深さ0.4ｍを測る。(赤塚次郎)

その他

古代から中世の遺構が、調査区の西辺部を中心に散在的に分布しており、なかには、緑釉陶器・猿面硯・瓦塔など注目すべき遺物もみられる。

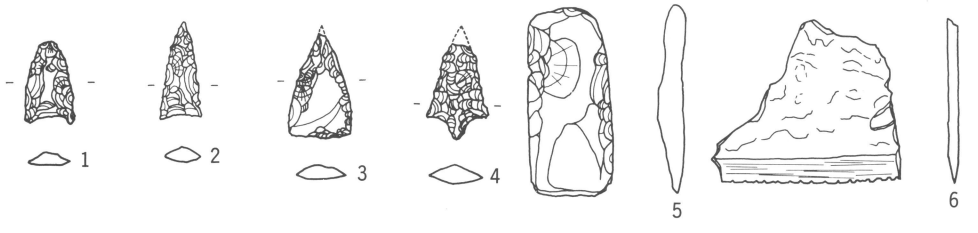
遺物

弥生前期（第５図）

今回の調査で出土した前期の土器については、遠賀川系と非遠賀川系とに大別することができる。遠賀川系に対する非遠賀川系の共伴率については、まだ整理途上であるため判然とはしないが、概算で約半数程度となるようである。

遠賀川系土器は壺と甕が出土しており、所謂「亜流遠賀川式」と呼称されるものが主体を占める。それらは形態・文様等の特徴よりみるならばおおむね前期新段階の範疇に含まれるものである。非遠賀川系の主体となるのは、条痕系土器（水神平式が中心）であり、外面がヘラケズリされた削痕の深鉢や大洞式系、大地型土器等がこれに加わる。特に、ＳＫ64・ＳＫ65出土資料は、遠賀川系土器を伴わず条痕・削痕の深鉢のみがみられ注目される。また、ＳＫ28からは大地型土器が良好な形で出土している。（服部信博）

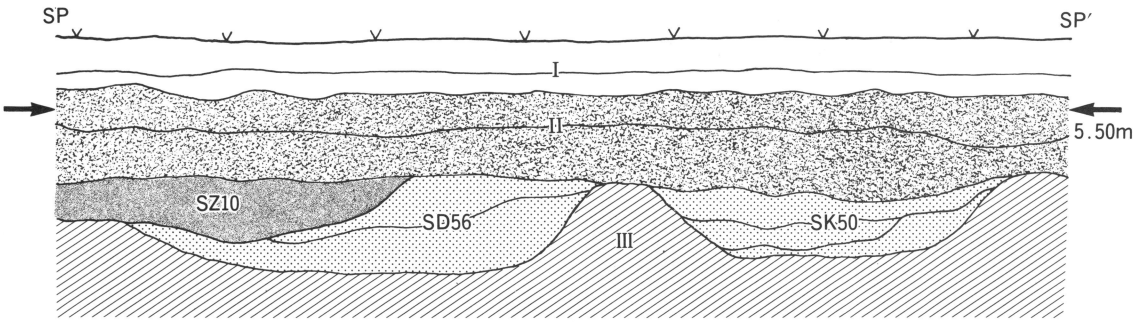
石器　今回の調査では、Ａ区全域、特に弥生時代前期の居住域を中心として、原石から製品に至るまでの石器製作過程を示す良好な資料を得ることができた。その総数は3300点余にのぼるが、中でも、ガラス質石英安山岩（下呂石）は、製作過程資料のほぼ全て、打製製品の９割以上を占める主要石材であり、製作技法、供給ルート等、数多くの問題を提起することとなった。また、ＳＢ17、ＳＫ32・50・57・75等の石器製作関連遺構の存在は、集落内における石器製作の空間的、人的分業体制の成立を物語るものとして注目される。製品は、石鏃・石錐・石斧・削器等、縄文的色彩をとどめるものが多いが、石庖丁など、周辺に弥生時代前期の水田遺構の存在を窺わせる貴重な資料も出土している。（金子健一）



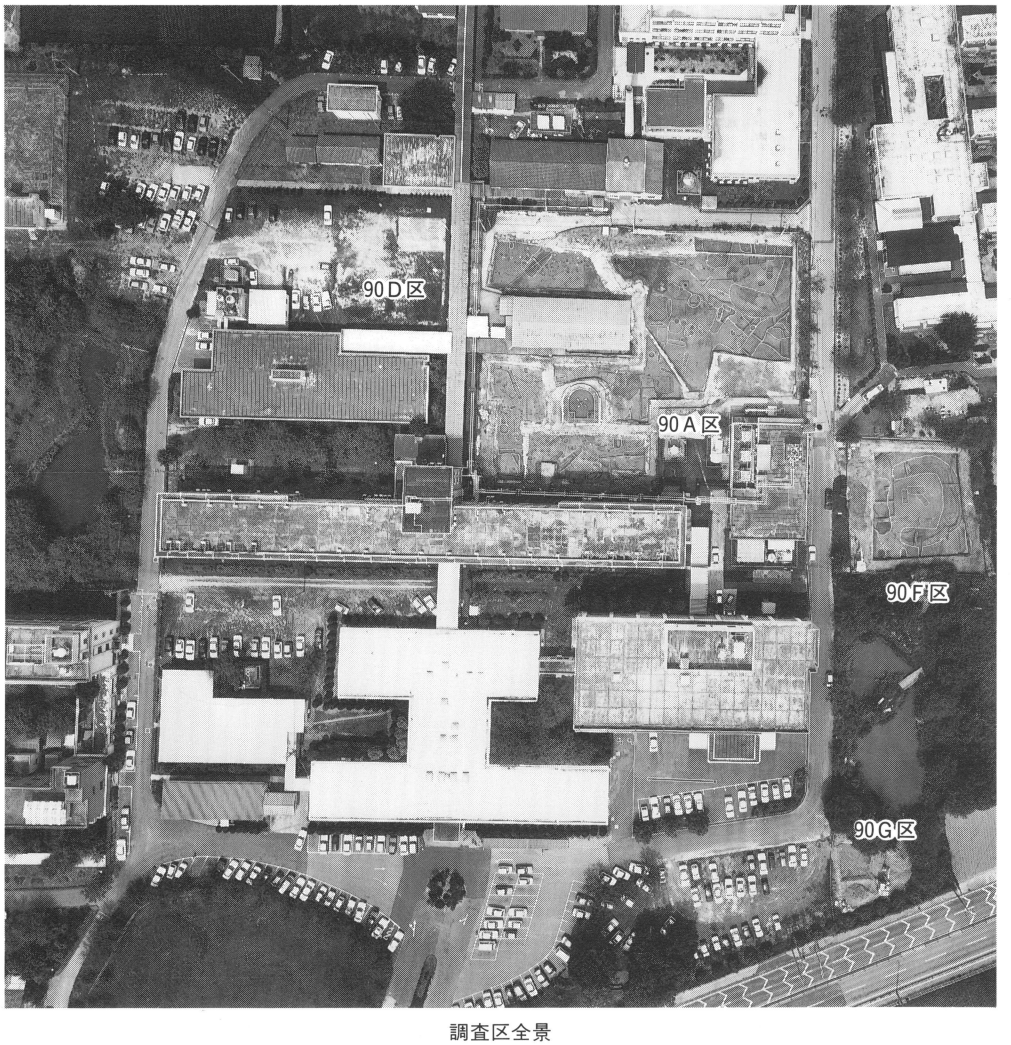
第２図　石器実測図（１～４　2/3・５～６　1/2）

弥生後期（第６図）

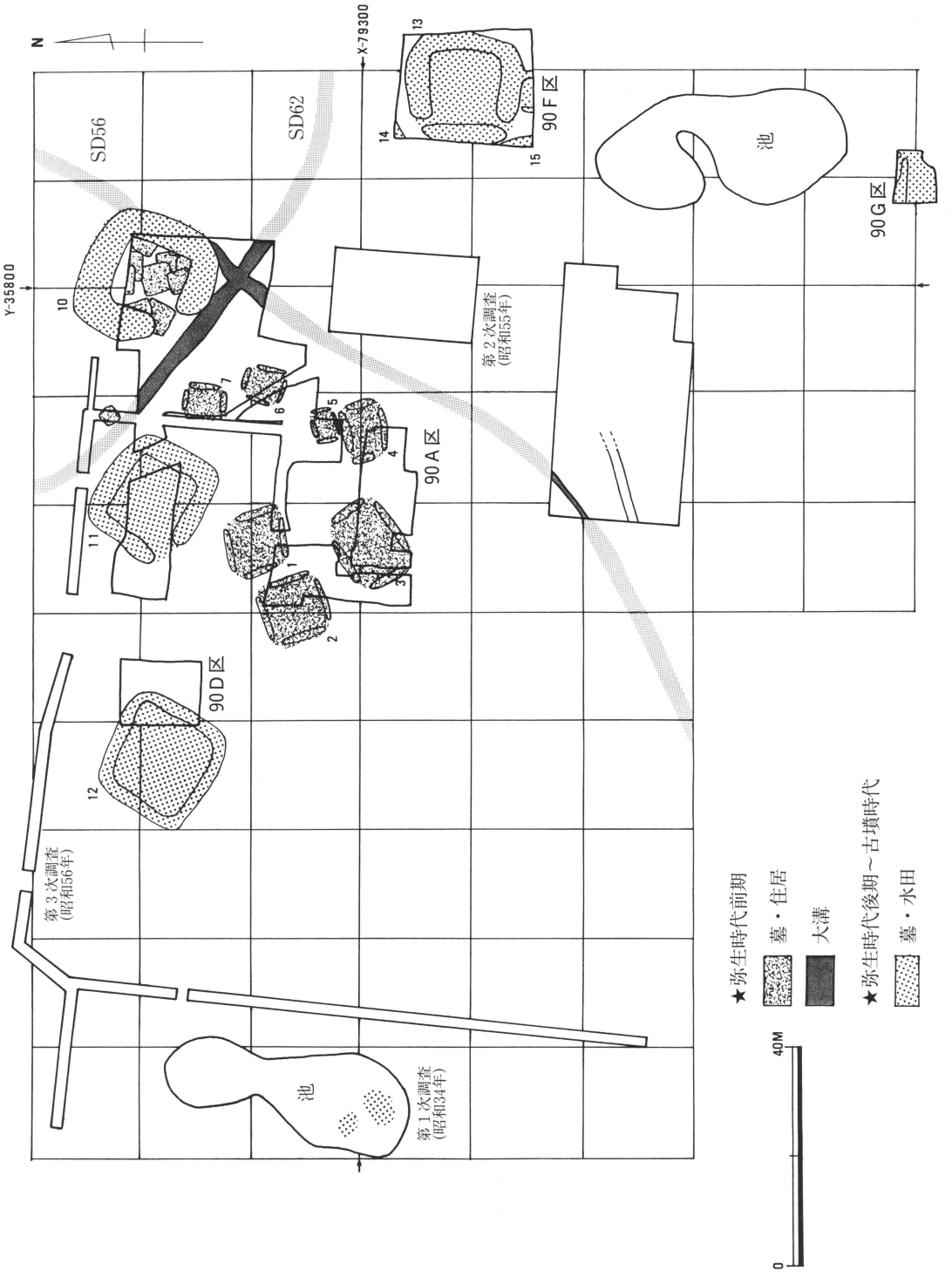
調査区南東に位置するＳＺ10より山中式土器が出土している。特にＳＫ56には小型の鉢２点（１・２）と壺１点（３）が見られ、１は口径15cmで口縁部が有段化する受口状口縁鉢。２は口径13cmを測る鉢で、端部に刺突文を施し、体部外面は密度の細かいハケメで調整し、内面はケズリを用いる。３は口径９cm、器高16cmを測る直口壺。その他４・５はパレス壺で、６は口縁内面に加飾を伴なう（剝落している）広口壺。７は受口系口縁甕。（赤塚次郎）



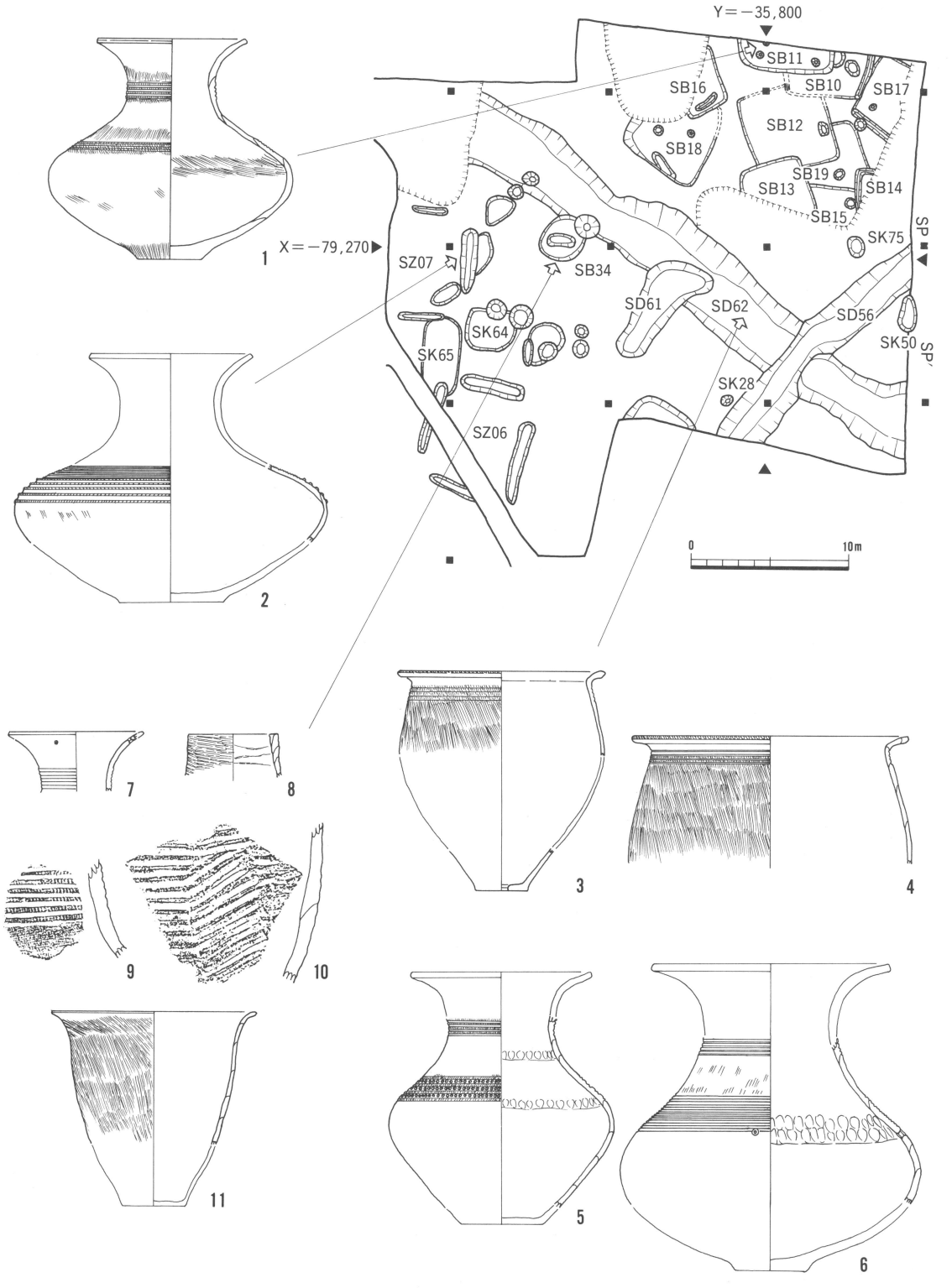
第3図　A区東壁部分土層断面図（Ⅰ：50）



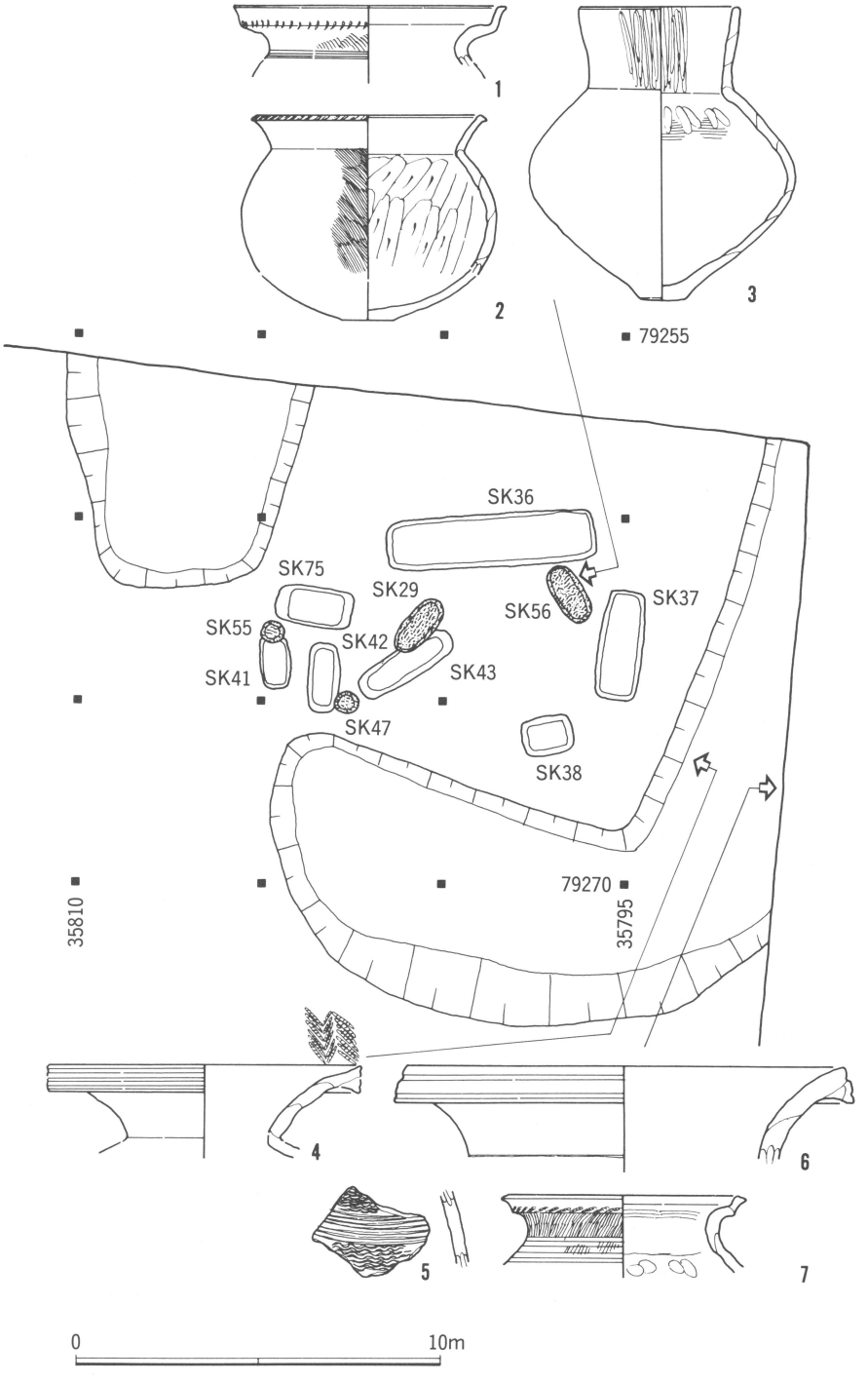
調査区全景



第4図　主要遺構配置図（1：1200）



第５図　弥生前期の主要遺構と遺物（遺構Ⅰ：400、土器Ⅰ：８、拓本Ⅰ：３）



第6図　ＳＺ10（遺構Ⅰ：200　遺物Ⅰ：4）

D区

D区はA区の西に設定し、基本層序は、Ⅰ：淡茶灰褐色シルト、Ⅱ：明褐色シルト、Ⅲ：褐色シルト、Ⅳ：淡茶褐色砂質シルト、Ⅴ：黄褐色シルト（基盤）である。

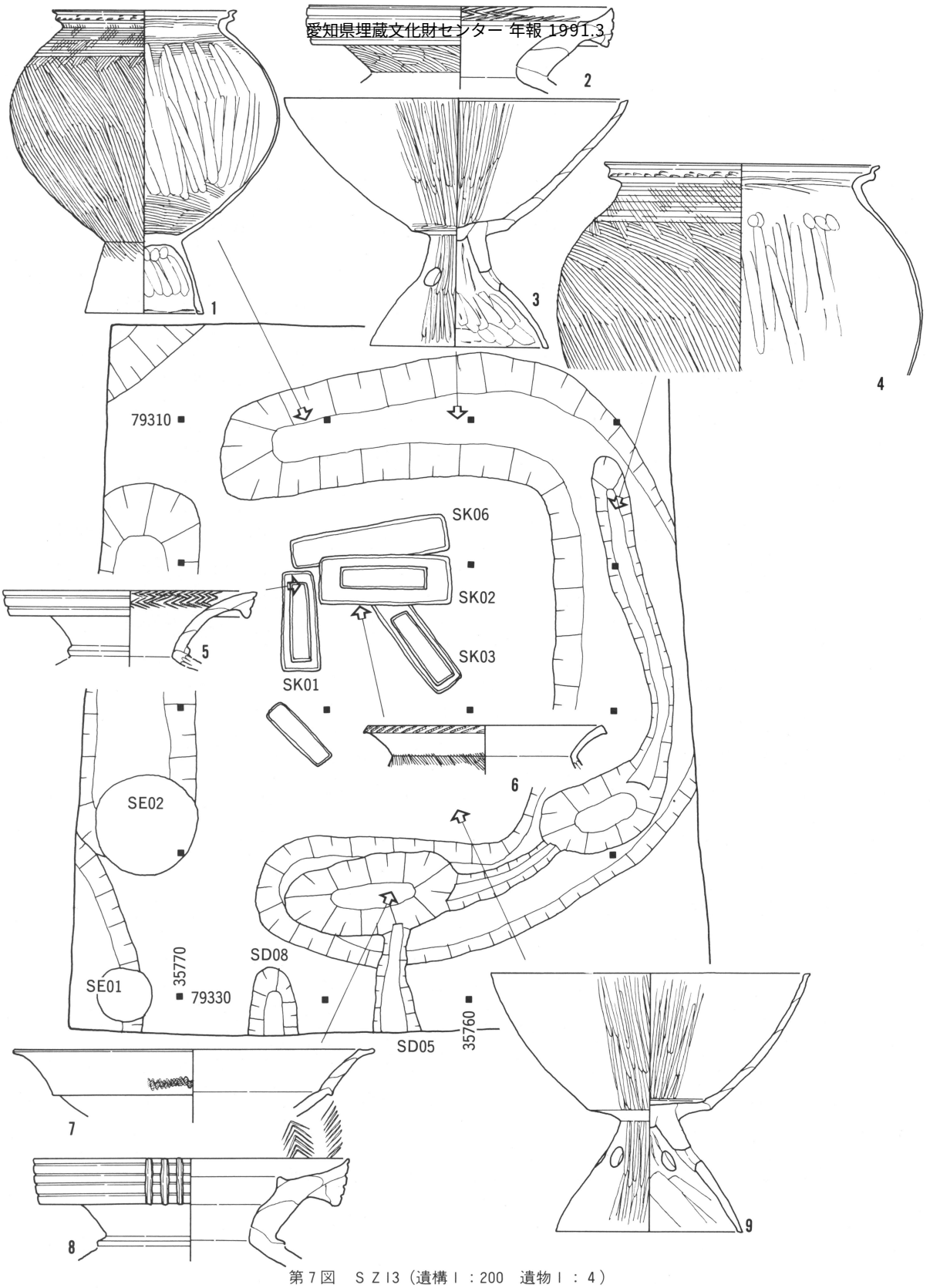
Ⅲ層上面において中世末から近世初頭にかけての溝４条、土坑多数を検出した。そのうち２条は２ｍの間隔を置いて平行し、道路側溝の可能性が高い。

Ⅴ層上面においては、古墳初頭から中世初頭にかけての遺構を検出した。調査区西側の屈曲する溝は方形周溝墓の周溝にあたり、畿内系有段鉢（廻間Ⅲ－３）を出土した。この鉢は、浅い椀状の体部に、鋭く２段に屈曲する独特の口縁部を有するもので尾張地方では、岩倉城遺跡下層で同様の鉢が２例出土している。また、この周溝は検出面で、幅2.5m、深さ0.3mを測り、一辺20mの規模を有する。調査区中央付近で井戸１基、北東隅で溝１条を検出し、さらに、井戸と溝の間にほぼ直角に折れ曲がる形で3.3m等間の柱列を検出した。これらの遺構は若干時期差はあるが、いずれも古代末から中世初頭のものであり、位置関係からも屋敷地を構成する遺構群と想定できよう。（小塚俊夫）

F区

検出できえた遺構はほぼ２時期に分割できる。調査区西側に存在する井戸ＳＥ01・02とそれに関連する南北溝を中心とする鎌倉時代（12世紀）の遺構群と、調査区内全域に広がる方形周溝墓ＳＺ13を中心とする弥生時代後期の遺構群である。後者はＳＺ13の他、調査区北西と南西隅で検出しえた周溝の存在からさらに２基の周溝墓が近接して営まれていたものと考えられる。

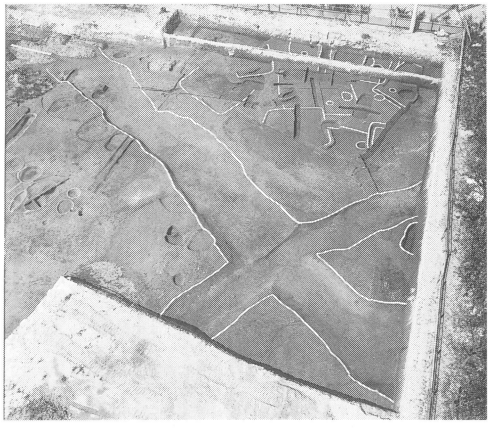
ＳＺ13は南北15m・東西15mの墳丘を有し、周溝幅約４ｍ、深さ0.5mを測る。形状は北西部と南西部に陸橋部を持つもので、さらに東・南溝には溝の再掘削が観察できる。またそれに連続するＳＤ05と平行するＳＤ08は掘削状況と埋土の状態から周溝再改変とほぼ同時に構築された溝である可能性が高い。するとＳＺ13は南北に主軸を置き、南方へ前方部をとりつけた「前方後方型墳丘墓」とする推測がゆるされよう。主体部はやや北側に偏る形で５基検出することができた。中心となるＳＫ06・02は東西方向に主軸を置く。最も新しいＳＫ02は墓壙4.5m×1.9mで、内部に3.0m×0.8mの組合木棺の痕跡を確認することができた。築造時期はＳＫ01・02及び南溝最下層より山中式土器（５・６・７）が出土しており、弥生時代後期に所属する。また北溝より廻間Ⅰ式４段階（１・２・３）の土器群が出土している。さらに注目されるのは、廻間Ⅰ式３段階の土器（４・８）が東・南溝再掘削溝内より見つかっていることから、墳丘の改築が行なわれたのは遅くとも廻間Ⅰ式後半の時期であり、その時点で前方後方型に変形された可能性を考えておきたい。(赤塚次郎)



第7図　ＳＺ13（遺構Ⅰ：200　遺物Ⅰ：4）



A区　弥生前期方形周溝墓



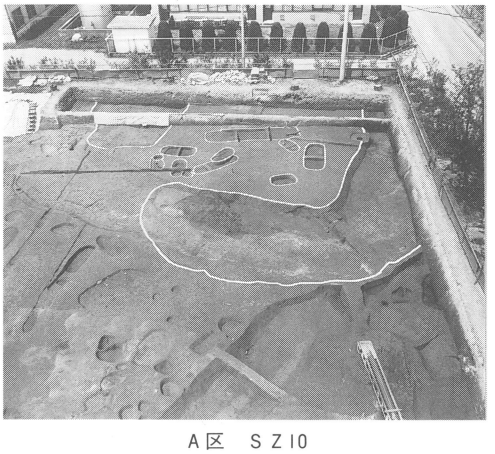
A区　弥生前期大溝と住居跡



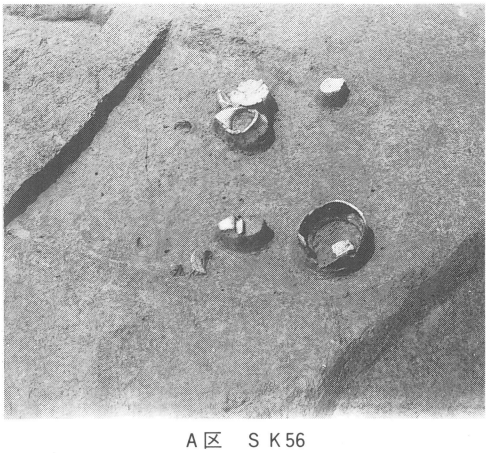
A区　石器製作関連遺構（ＳＫ50）



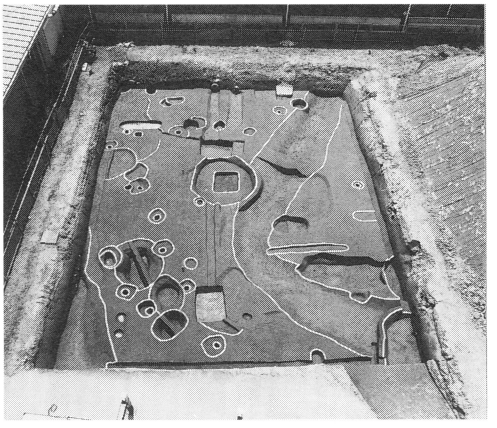
A区　大地型壺出土状況（ＳＫ28）



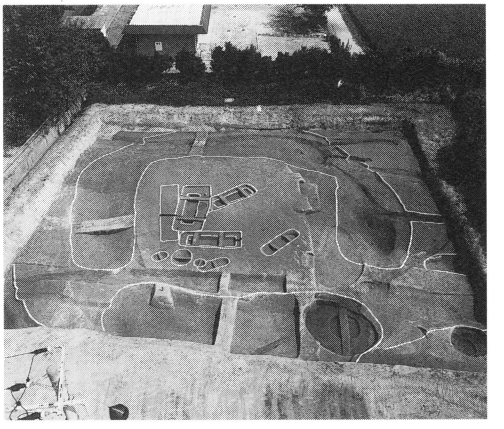
A区　ＳＺ10



A区　ＳＫ56



D区　下面完掘状況



F区　S Z 13



F区　高杯出土状況（S Z 13）



F区　S字甕出土状況（S Z 13）



A区　地震痕（噴砂）



A区　地震痕（断層）

G区

小規模な調査区であるが、古墳時代初頭の水田跡を検出することができた（検出面の標高4.7m）。但し水田耕作土はいち早く削り採られ、その下層に発達した鉄・マンガン斑紋の分布により小区画（おそらく南北にやや長く、東西４～５m）に区切られたやや不定形な水田の形跡を捉えることができる。マンガン斑紋層下位からはＳ字甕Ａ類新が、上面からはＢ類が出土しており、少なくとも廻間Ⅱ式期には水田が廃絶していたことが窺い知れる。

まとめ

今回の調査成果をまとめておくと以下の３点になる。

１．弥生後期の標式遺跡であるはずの山中遺跡は、今回の調査成果を踏まえると弥生時代前期の集落遺跡として改めて位置づけておく必要がある。また調査によって大溝で墓域と居住域に区切られた集落構造を明らかにでき、さらに点在する石器製作場の存在は弥生前期集落の研究に注目すべき内容を提供したといえよう。

検出した主要遺構は周溝墓７基・住居10棟・大溝２条・石器製作関連遺構５ヵ所。

２．弥生後期から古墳時代にかけては、居住域を構成していた形跡は一切認められず、分布が方形周溝墓に限定できるような在り方を示した。すなわち、山中遺跡は弥生後期以降墓域を形成していたという事になる。またＧ区での古墳時代初頭水田の可能性を考慮すると山中遺跡東側に生産関係の空間を設定できるのかもしれない。将来の調査に期待したい。

周溝墓は山中式期３基・廻間式期１基・所属時期不明２基を確認した。

３．山中式期に所属するＳＺ10・13では複数の墓坑を検出し、両者とも中心主体東西方向に主軸を置く、長軸が５～６mを測る大型のものであった。さらにＳＺ13は廻間Ⅰ式期に墳丘を、所謂「前方後方型墳丘墓」に改変した可能性が考えられ、墳丘墓の在り方に新しい知見を提供した。

以上の諸点から一宮市萩原町山中遺跡は、弥生時代前期から集落が形成され、中期に一旦中断し、再び後期に墓域として利用されるという大きな変遷が追える。こうした遺構の消長がなにを物語るかはより広範囲の遺跡調査が必要であり、また周辺の遺跡である南木戸・苗代・二夕子遺跡等を含めた萩原遺跡群としての視点も重要となろう。

調査にあたってＧ区では、特に静岡大学名誉教授加藤芳郎氏に水田耕土について御教示賜わった。

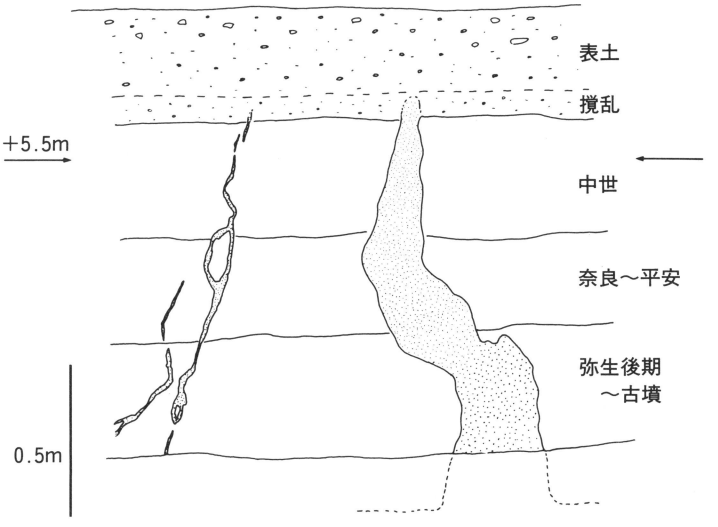
（赤塚次郎）

山中遺跡の地震痕について

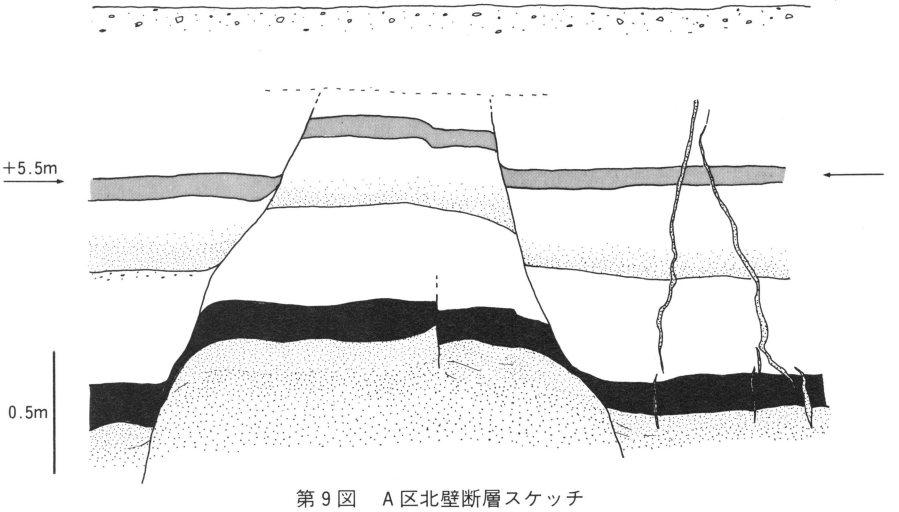
噴砂を伴う地割れは、90A区のSZ10の周溝に沿って東西方向に25m以上にわたって確認された。最大幅は20cmで、調査区外にも延びていた。

東壁断面において噴砂の粒度分析を行ったところ、噴砂の上部で細粒になっていることがわかった。また噴砂を供給した下位の砂層は、噴砂に比べ粗粒であった。このことから、地震によって液状化した砂が上昇する過程で分級作用を受けたことが推定され、噴砂のメカニズムを知るうえで興味深い。推定される地震については、噴砂の断面観察、及び噴砂の規模などから濃尾地震（1891年）である可能性が高い*。

また、90A区の北壁において2本の正断層が確認された。落差はともに約20cmである。表土以外は断層による変位を受けていることから、上記の噴砂と同時期であると推定される。一般に液状化した砂層は、再堆積の過程で堆積を減じると言われており、今回発見された断層も砂の液状化と噴出によるものと考えられる。（伊藤隆彦）



第8図　A区東壁　噴砂スケッチ



第9図　A区北壁断層スケッチ

＊通産省地質調査所寒川旭氏御教示による。

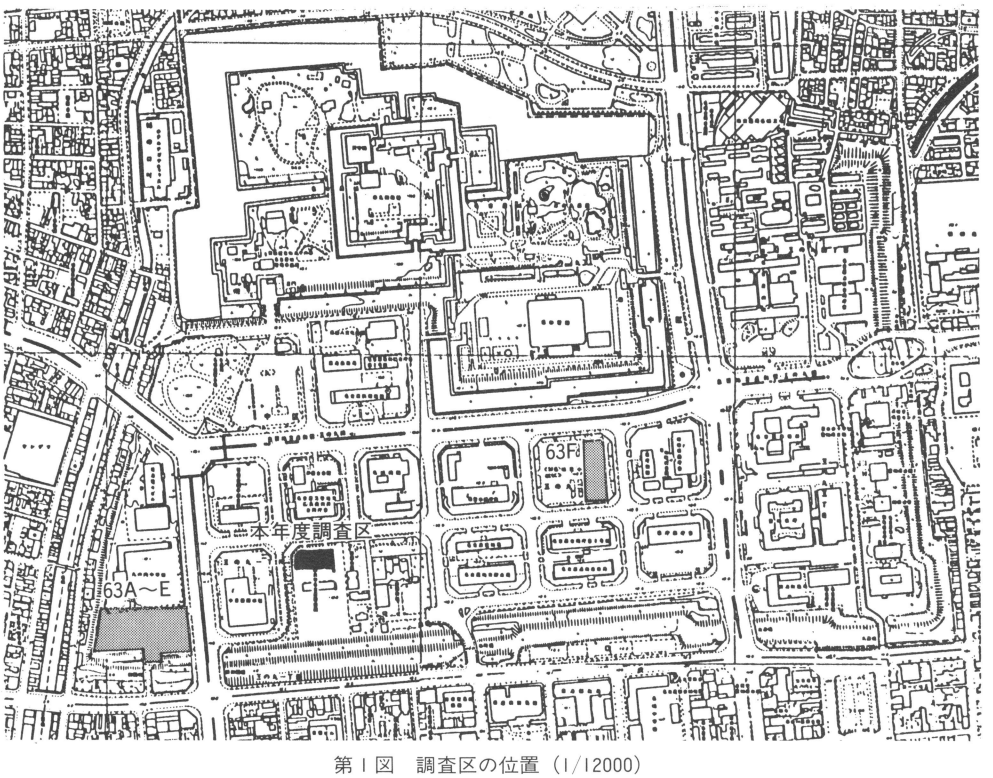
名古屋城三の丸遺跡（なごやじょうさんのまる）

調査の経過

立地と沿革

名古屋の近世を象徴する「名古屋城」は、徳川御三家の筆頭、尾張徳川家62万石の居城として造営されたものであり、名古屋台地の西北端部に位置する。城の縄張りは台地端に占地する本丸を最高所とし、南西に西の丸、南東に二の丸を配し、さらにその南から東にかけて三の丸が設けられ、外堀で囲まれている。その外堀一帯に囲まれた中区三の丸は、現在では官庁と公共施設の街となっており、その標高は13m程を測る。

三の丸一帯では、すでに平安時代末頃に、藤原氏一族の荘園としての「那古野庄」の名が文献にみられ、戦国時代には、織田信長の生誕地ともいわれる「那古野城」が、今川氏親の手によって築かれた。さらに名古屋城築城後は、成瀬氏、竹腰氏ら尾張藩の重臣達の上屋敷が立ち並ぶ武家屋敷地を形成していた。また、昭和63年度調査の63Ａ～Ｅ区では、弥生～古墳時代の遺構・遺物が確認され、三の丸遺跡が単に近世のみならず、これらの時代を通じた遺跡であることが明確となった。（日比　宰）



第Ⅰ図　調査区の位置（1/12000）

調査の概要

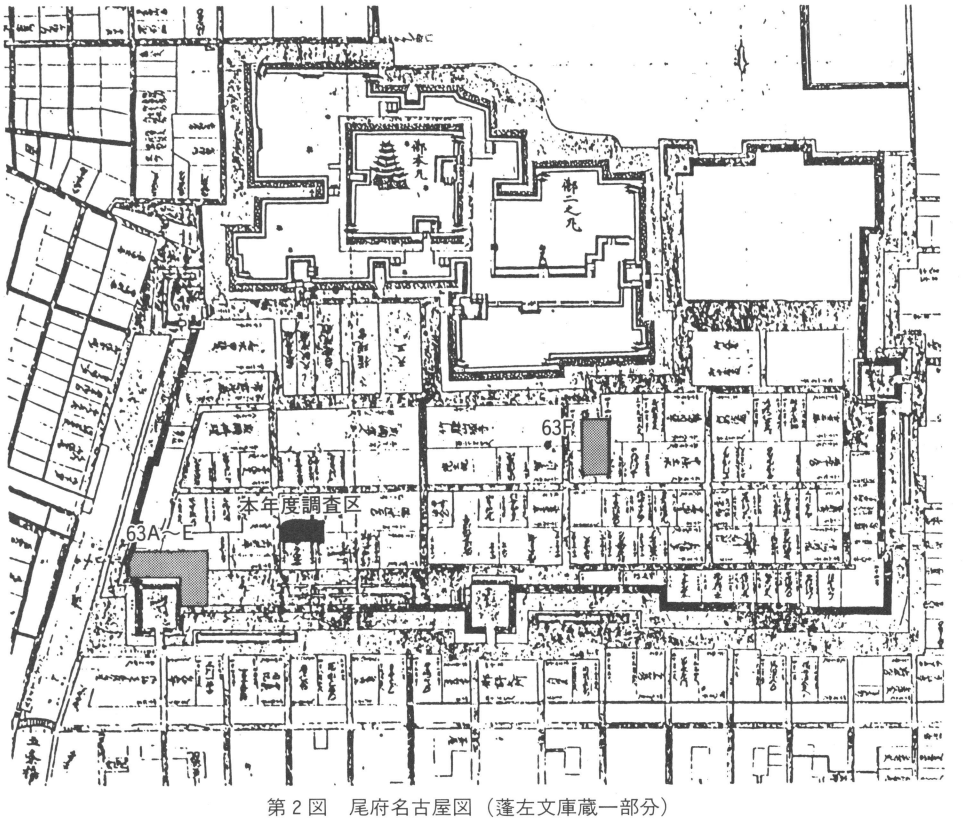
昭和63年度の調査は、市立丸の内中学校に南接する愛知県新文化会館（新図書館）建設用地（Ａ～Ｅ区）及び名城東小公園内の名古屋第一地方合同庁舎建設用地（Ｆ区）の２地点について実施した。

平成２年度の調査は、税務大学校跡地の名古屋家庭・簡易裁判所合同庁舎建設用地2,800㎡について実施した。

前回の調査で確認された遺構・遺物は、Ⅰ期（弥生～古墳時代）、Ⅱ期（奈良～平安時代）、Ⅲ期（室町～安土・桃山時代）、Ⅳ期（江戸時代）の四時期に大別することができた。今回の調査も同様の時期区分が想定できる。以下、Ⅳ期の遺構・遺物について述べる。

今回の調査で検出した遺構は、柱穴・井戸・溝・地下室・廃棄土坑である。調査区は、幕末時の成瀬氏・鏡島氏・天野氏・中西氏の屋敷にかかっており、遺構は各屋敷に伴うものである。また、廃棄土坑等からは膨大な量の陶磁器類の遺物が出土した。尾張藩の重臣達の上屋敷であった「名古屋城三の丸」を解明する上で、貴重な資料となるであろう。

（鷲見　豊）



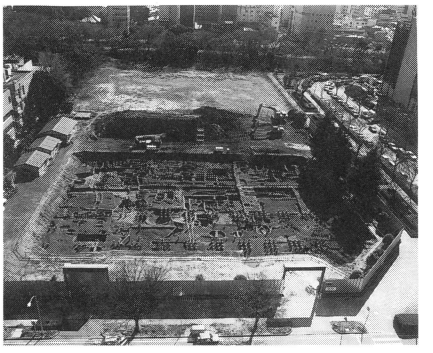
第２図　尾府名古屋図（蓬左文庫蔵一部分）

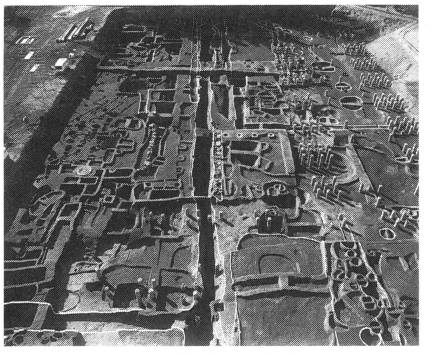
遺構　ここでは、調査の大半を占めるⅣ期の遺構について概要を述べていきたい。今回の調査では、第２図のように面積の多寡はあるものの４軒の屋敷地（1～4）が調査区内に含まれており、屋敷境いの溝、柵列、廃棄土坑、地下室等が確認されている。

まず、これら４軒の屋敷地の境界を成す施設については、溝と塀の存在が想定できる。溝は、ＳＤ04、16等が該当するものと考えられるが、ＳＤ04は幅1.2m、深さ1.9m、ＳＤ16は幅１m、深さ1.6mのともに箱掘りの溝で、幅に比して非常に深いのが特徴である。ＳＤ04は、出土遺物から17世紀前半のものと考えられ、三の丸造成当初は隣家との境界を明確に意識していたことが窺われる。また、溝のあり方が宝永６年（1709）の『尾府名古屋図』の屋敷割りと合致することは注目に値しよう。塀については、ＳＡ03、ＳＤ03が、その基礎に比定され得るが、溝が埋った後、その上に築かれていることから、溝に比べ、境界に対する意識の一歩後退した形として捉えることができよう。なお、溝と塀の共存、及び境界部分における路地等の存在は、今後の重要な検討課題の１つであろう。

次に廃棄土坑は、大小様々な形態のものが調査区全域に分布しているが、大概、５つのグループ（Ａ～Ｅ）に大別できるようである。それぞれ、境界溝に沿う形で、屋敷地のコーナー部分に集中しており、建物の裏手、裏庭等に繰り返し掘削、投棄していたことが窺われる。

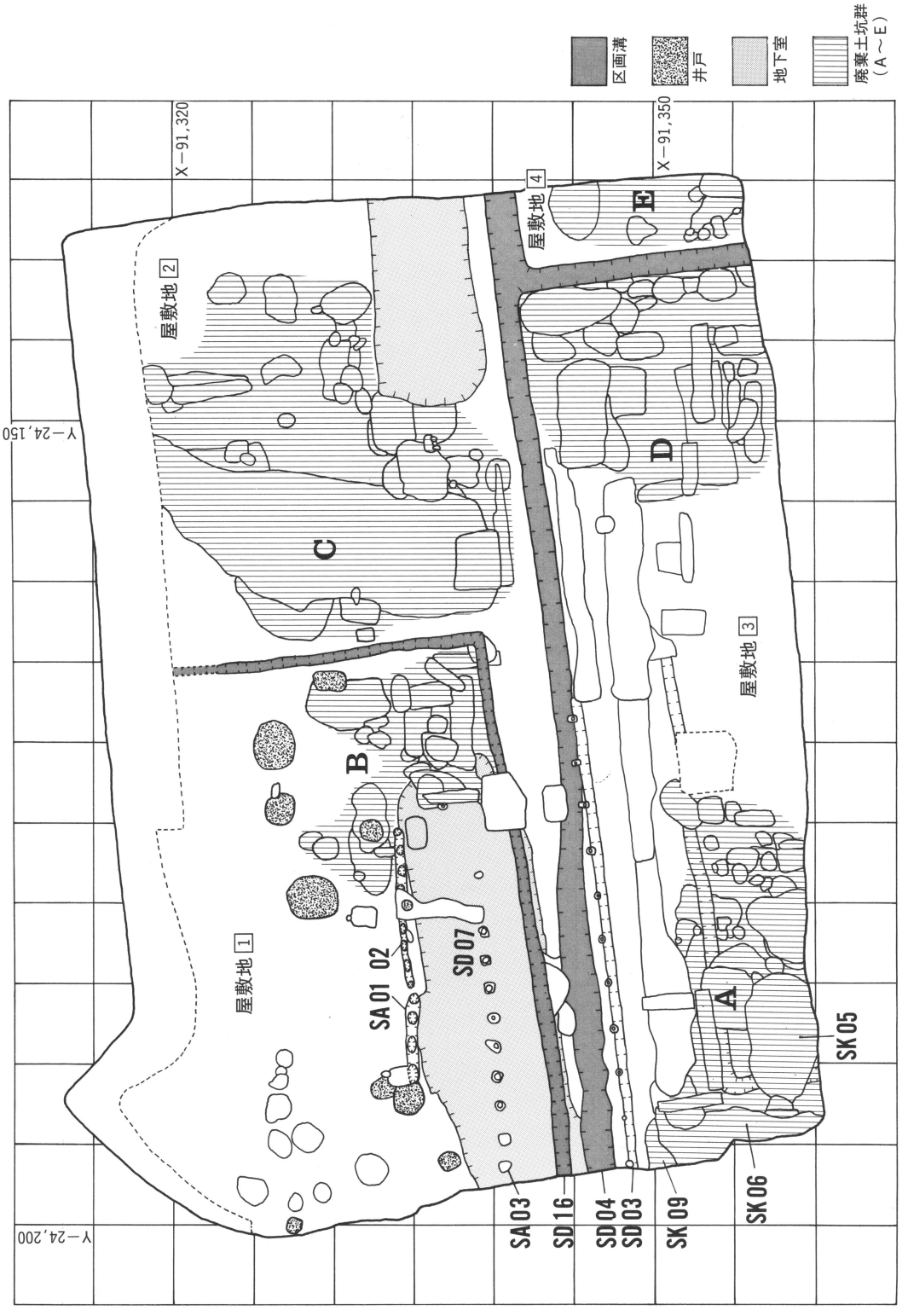
地下室は、屋敷地1内に幅８m、長さ25m以上・深さ３m以上の東西方向に細長い形態のもの（ＳＤ07）が確認されている。北肩には、幅1.5m程の


調査区全景（北から）


ＳＤ04（中央・東から）


廃棄土坑群Ｂ（北から）


ＳＤ07セクション（東から）


区画溝
井戸
地下室
廃棄土坑群
（A～E）
X－91,320
X－91,350
Y－24,150
Y－24,200
屋敷地 1
屋敷地 2
屋敷地 3
屋敷地 4
A
B
C
D
E
SA01 02
SD07
SA03
SD16
SD04
SD03
SK09
SK06
SK05

第3図　主要遺構図（Ⅳ期）

テラス状の張り出し部分、及びそこから降りる地山を削り出した階段が付随している。地下室内の詳細な構造や上屋の存否については不明である。

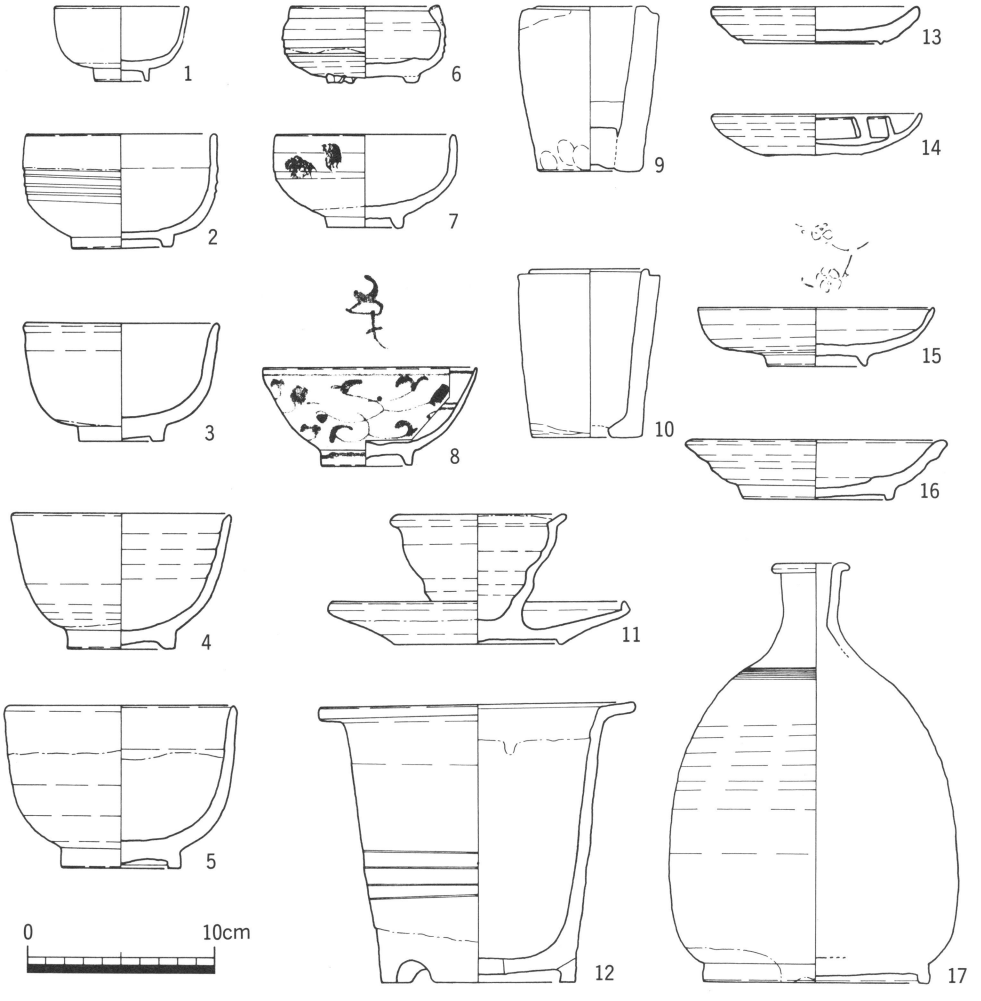
井戸は、その大半が屋敷地1内で確認されているが、この部分は屋敷の南東部分にあたることから、周囲から出土している埋甕と伴に、屋敷地内における井戸、及びその関連施設の分布を知る手掛りとなり得るものであろう。井戸枠等の内部施設については、台地上で井戸が深いこともあり、確認していない。

また、屋敷地3のように、廃棄土坑群（A・D）の間に、非常に遺構の少ない部分が一定範囲広がることは留意すべき事実であり、ここには、礎石建物や庭の存在が想定される。

さて、以上、主な遺構を性格ごとに概観してきたわけだが、今回、図示した以外にも、境界溝や地下室と考えられるものがいくつか存在する。それらを含め、遺構の変遷やセット関係の解明、出土遺物の分析が望まれるところである。そして、そこから導き出される遺構のあり方は、屋敷地内の空間利用のパターンを考える上で重要なデータとなり得るのであり、一昨年度の調査成果も合わせて、今後検討を加える必要があろう。

遺物　遺物は、Ⅳ期のものだけでコンテナに約540箱出土しており、その大部分は陶磁器である。その内容は、最も多量に出土する椀、皿、擂鉢、灯明具等の生活雑器から、人形、雛・飯事道具などの嗜好品に至るまで、実に多種多様である。これらの陶磁器は、大半が18世紀中頃から19世紀前半に含まれるものであるが、17世紀のものも少量ながら出土している。産地は、瀬戸・美濃産のものが最も多く、肥前陶磁や京焼等がそれに次ぎ、輸入陶磁も若干含まれている。また、廃棄土坑群Cの中には、土器の皿や鍋と伴に、獣骨や貝がらを多量に含む遺構も見られた。その他、キセル、銭貨、釘等の金属製品、硯、砥石、石塔等の石製品、かんざし等のガラス製品、漆椀等の木製品など、当時の生活を髣髴とさせる遺物も多量に出土している。

1は灰釉を施した小椀、2はいわゆる「腰錆」といわれる灰釉と錆釉を掛け分けた筒形椀、3は灰釉、4は長石釉を施した丸椀、5は口縁周辺にうのふ釉が施されたいわゆる「尾呂茶椀」である。6は緑釉が掛った香炉、7は京焼の煎じ茶椀で、外面に鉄釉で文様が描かれる。8は外面に呉須で唐草文が描かれた磁器椀で輸入陶磁の可能性が高い。9、10は焼塩壺で、蓋受け部が痕跡程度に退化している。11は全面に鉄釉を施した灯明具、12は灰釉の掛った植木鉢で、土坑中に4個体並べ据え置かれた状態で出土した。13は長石釉の皿で、高台はかなり退化している。14は鉄釉を全面に施した灯明受皿、15は内部底面に摺絵のある灰釉の皿、16は長石釉を施した輪剝げの皿である。17は鉄釉を施した徳利である。これらの遺物は、ＳＫ09のものが17世紀前半と考えられる他は、全て18世紀後半以降のものということができよう。　（金子健一）



第４図　Ⅳ期の遺物（１、２、７、９、10、15、17はＳＫ05、５、６、13はＳＫ06、４、11、16はＳＫ09、12はＳＫ100、３、８、14はＳＤ07）



ＳＫ89（手前）・ＳＫ100植木鉢出土状態



ＳＤ07漆椀出土状態

勝川（かちがわ）遺跡

調査の経過

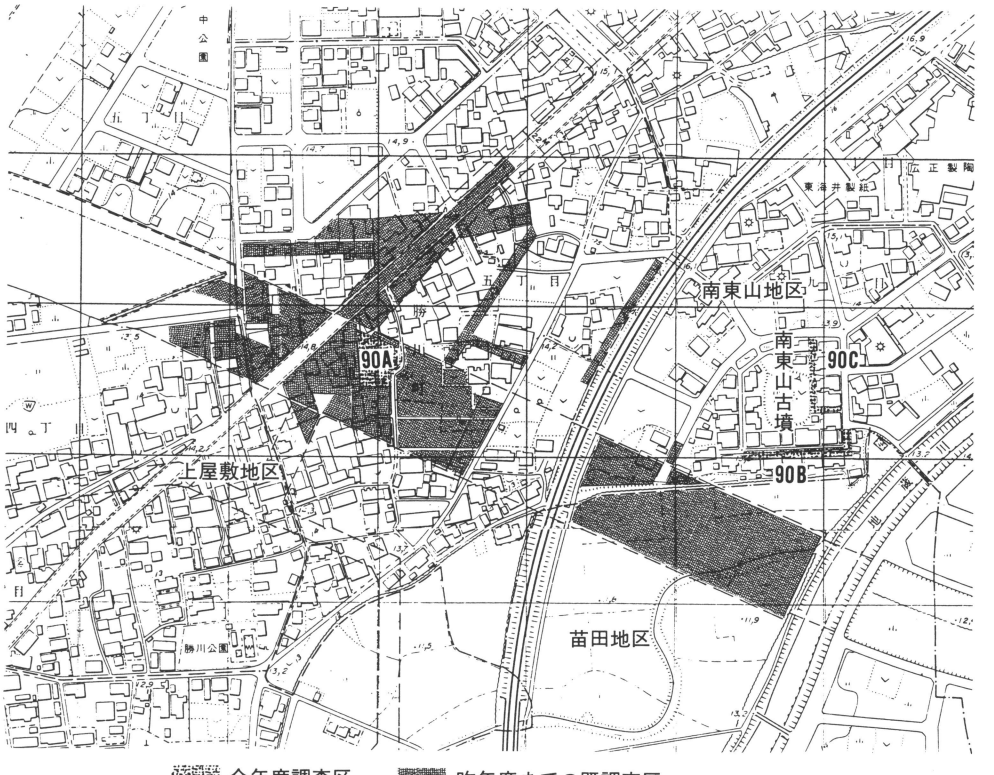
勝川遺跡は、春日井市勝川町に所在し、昭和56年より春日井市教育委員会、財団法人愛知県教育サービスセンター、財団法人愛知県埋蔵文化財センターによって継続調査されている。その成果を元に、本遺跡の時期をⅠ期（弥生時代中期）、Ⅱ期（弥生時代後期～古墳時代）、Ⅲ期（奈良時代～平安時代）、Ⅳ期（江戸時代）の4期に区別している。また、鳥居松段丘上西側を上屋敷地区、東側を南東山地区、段丘下を苗田地区としている。

調査の概要

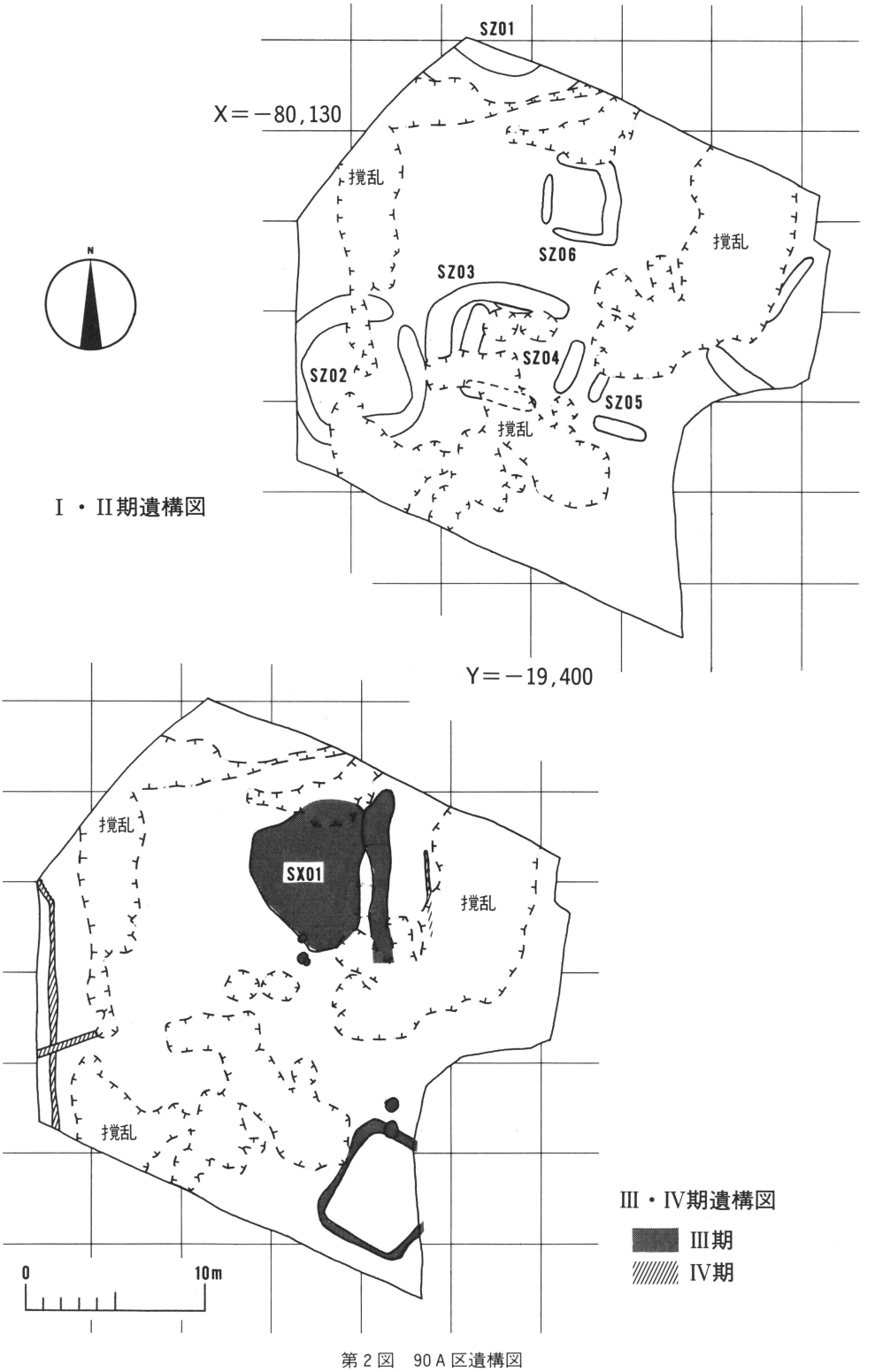
今年度は90A～C区の3調査区において調査を行った（第1図）。

A区　環状2号線建設に伴う事前調査として行った。上屋敷地区に含まれ、A区の周囲はすでに調査を終了している。Ⅰ・Ⅱ期には方形周溝墓群を含む墓域が形成され、Ⅲ期には「勝川廃寺」の遺構、遺物がある。Ⅳ期の遺構は勝川宿に関係するものである。

A区の現状は、攪乱が激しく、特に東側は部分的な攪乱のみならず全体的にも削られて



第1図　調査区位置図

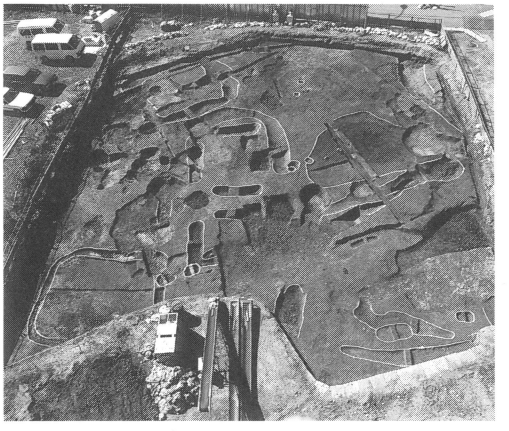


I・II期遺構図

第2図　90A区遺構図

おり、遺構検出面である赤色粘土の残存状態は悪い。

Ⅰ・Ⅱ期の遺構として方形周溝墓６基、周溝墓の溝と思われるもの２条を検出した（第２図）。ただし、ＳＺ01・06を除き遺物は皆無である。ＳＺ03・04は東・南・北の溝が重複する。ＳＺ03は周溝の４隅が切れるタイプで、溝が埋まり切る前に西溝の外側に溝を掘り北溝とつなげる３隅の切れるタイプのＳＺ04を再築している。



Ａ区全景

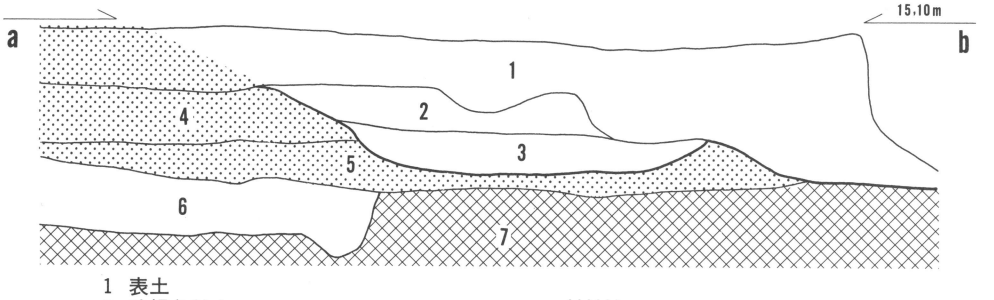
Ⅲ期は「勝川廃寺」大溝の存在が推測されたが、その推定ラインに攪乱があり検出し得なかった。このラインの西側にＳＸ01がある。これは、長径8.7m、短径6.4m、深さ0.6mで、平面不定形の落ち込みである。下層にはほとんど遺物を含まず、炭化物層を挟んで上層には瓦を主とする遺物の投棄が見られる。下層に遺物がないことから廃棄土坑ではないが、その性格は不明である。



Ａ区　ＳＸ01　遺物出土状況

Ⅳ期は細い溝のみ検出した。

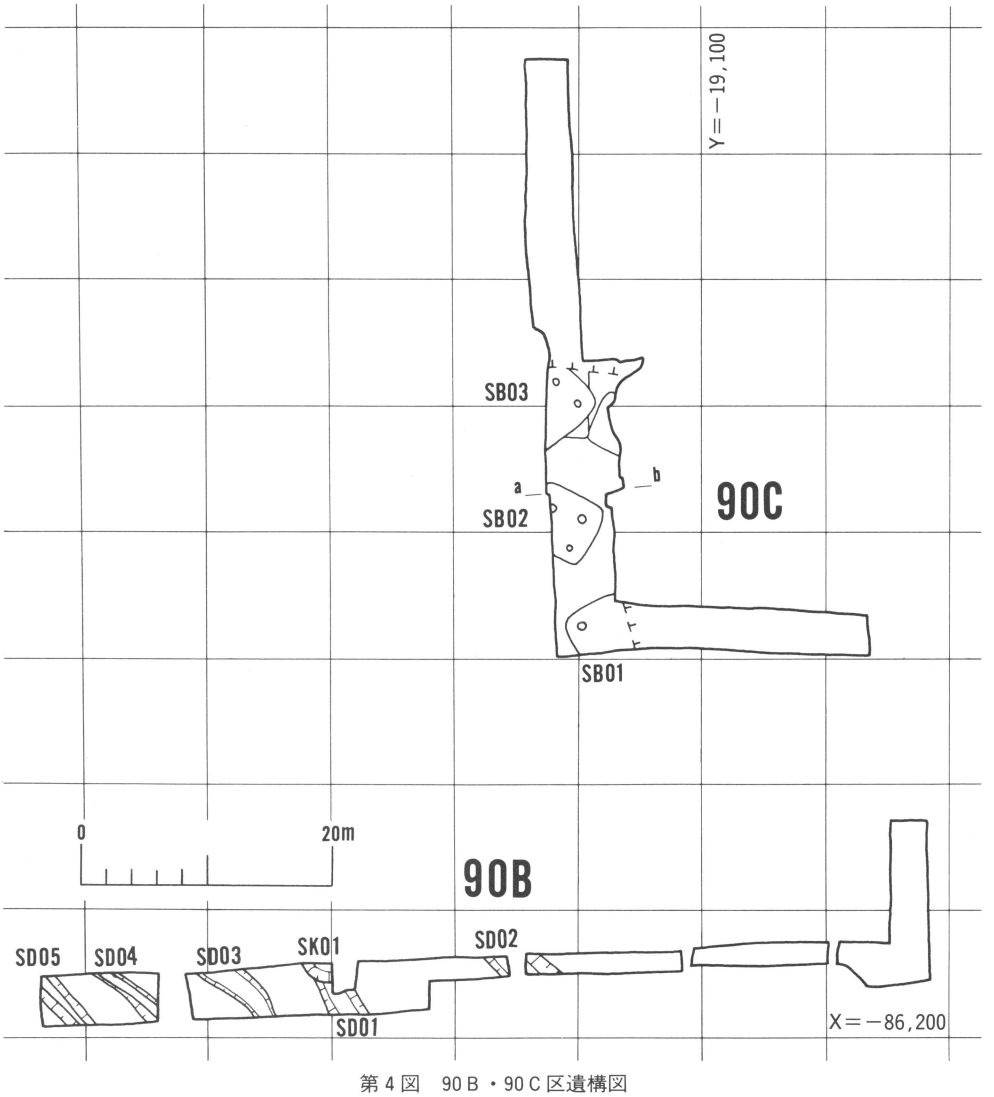
Ｂ区　Ｂ・Ｃ区は勝川土地区画整理事業の一貫として行われた。共に南東山地区に含まれるが、Ｂ区東側は段丘下に入る。Ｂ区



1　表土
2　暗褐色粘土
3　暗灰色粘土と淡黄色細砂の互層
4　SZ01盛土
5　暗灰褐色粘土
6　SB02埋土
7　地山

SZ01復元
鳥居松礫層

第３図　ＳＺ01　土層断面略図



第４図　90Ｂ・90Ｃ区遺構図



Ｂ区　ＳＤ05遺物出土状況



Ｂ区　ＳＫ01遺物出土状況

の幅は４ｍで調査区中央をガス管が縦断しており、遺構を平面的にとらえるのは困難な状況であった。

検出された遺構は全てⅠ・Ⅱ期に含まれ、そのうち目立つものは溝である（第４図）。溝は５条あり、すべて北西から南東に向いている。まとまった資料として、ＳＤ01とＳＫ01にⅠ期、ＳＤ05にⅡ期の遺物がある。ＳＤ01は幅2.9m、深さ0.6mで、中期中葉に比定される。ＳＤ05は幅1.8m、深さ0.9mで、極めて鋭角的な「Ｖ」字掘りで、出土遺物に広口壺の完形品があり、その胴部に穿孔が見られることから周溝墓の溝である可能性も考えられる。古墳時代初頭にあたる。ＳＫ01は一部分検出したのみで全体の規模はわからないが、中期中葉の遺物が大量に廃棄されており良好な資料といえる。調査区東側は鳥居松礫層が深く落ち込み、その上に粗砂が厚く堆積する。

Ｃ区　南東山地区中央にある「南東山古墳」の残存する墳丘東端を中心に「Ｌ」字状をなす調査区である。遺構は墳丘部分にのみ存在し、その北側及び東側は深く削られている。

上面はいわゆる「南東山古墳」で墳丘東斜面を検出した（ＩＫＫ　ＳＺ01）（第３図）が、墳丘上が現在畑となっており攪拌されているため、盛土は最厚でも30cm程度残っているのみで、墳形自体を推し計るまでには至らなかった。ただ、東斜面に沿って幅2.0m、深さ0.2mの浅い溝があり（第４層）、ＳＺ01の地山である第５層を掘り込んでいることから、以前の報告で墳丘東側が開発により削られたとするような事実は、少なくとも墳丘の形状を変えるまでには至っていないと考えられる。

下面はいわゆる「南東山遺跡」で、Ⅰ・Ⅱ期の遺構を検出している。主なものは竪穴住居で８棟検出しているが、調査区の幅が狭く全体像を把握できるものは少ない。

まとめ

今年度の調査に基づく問題点を上げてみたい。

90Ｂ区ＳＤ05は前述したように、周溝墓の可能性があるのだが、90Ｃ区の竪穴住居を含む居住域とはわずか40mしか離れていない。また、90Ｂ区の周辺で周溝墓に関係する遺構は出ていない。もし、ＳＤ05が周溝墓だとすれば単独で存在するのか、あるいは未調査部分に広がっているのか検討しなければならない。

今年度の調査を以て環状２号線関係の調査は終了し、土地区画整理事業関係の調査も区切りを迎えた。勝川遺跡の全体像を見つめ直し、改めて報告していく予定である。

（岡本直久）

松河戸（まつかわど）遺跡

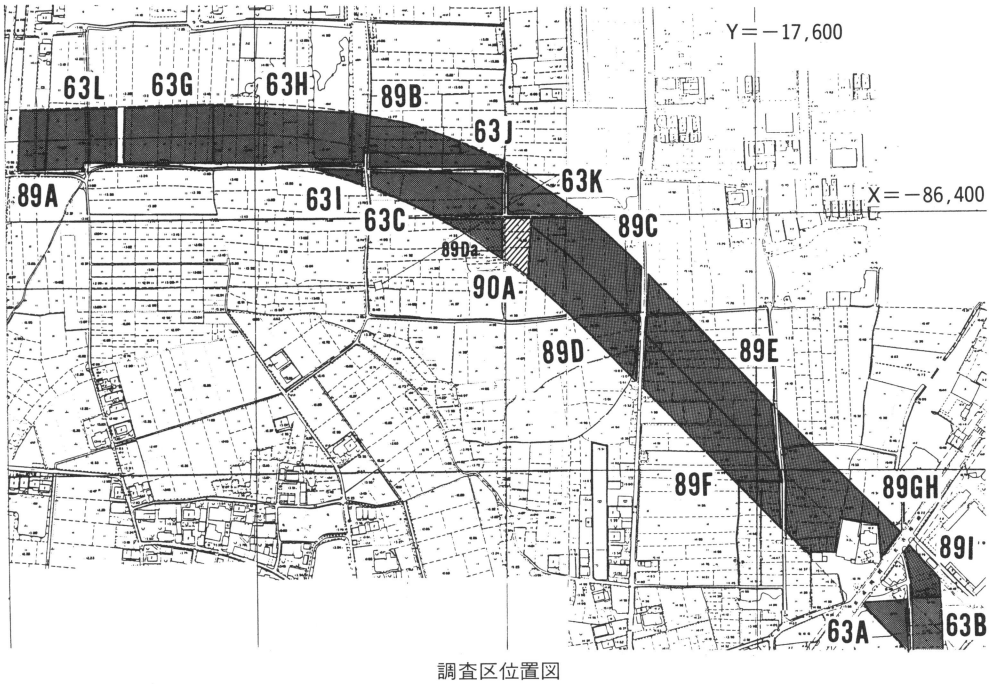
調査の経過

松河戸遺跡は春日井市松河戸町に所在し、庄内川右岸の沖積地に立地する。名古屋環状２号線建設に伴う事前調査として昭和62年度より継続調査が行われ、東西２㎞、総面積は６万㎡を越える。松河戸町一帯は方格地割による畦畔が遺存する地域とされ、「条里制遺構」検出を調査の主目的とした。その結果、条里制に伴う水田跡が15世紀代まで遡り得ること、微高地（基本的に鳥居松礫層の隆起による）周辺では地割に乱れが生じること、その微高地上には縄文時代前期～後期・縄文時代晩期後半～弥生時代前期・古墳時代・中世の遺構が散在することを確認している。

調査の概要

今年度は１調査区のみ調査を行った。位置は89Ｄａ区と89Ｄｂ区に挟まれた地点である。現水田下に２枚の条里制水田が存在し、これらは正確に方格地割され、逆に現水田に地割の乱れが見られる。なお、畦畔に沿って見られた土坑については今回は確認していない。また、水田下は鳥居松礫層の隆起がなく、厚く粘土層が堆積するのみであった。

（岡本直久）



調査区位置図

岩倉城遺跡

調査の経過

岩倉城遺跡は、戦国時代における尾張北部の拠点であった岩倉城跡を中心とする遺跡であり、尾張平野を南流する五条川の両岸に細長く形成された標高10m前後の自然堤防上に立地する。行政的には、岩倉市下本町から大市場町にかけて広がりをもつ。



遺跡遠景（南西から）

発掘調査は、県道萩原多気線建設に伴うものであり、昭和62年度以降継続して調査をすすめてきた。昨年度までに、岩倉城の主要部分を中心に7,470㎡の調査を終了しており、二重の堀に守られた堅固な岩倉城の姿が明らかになりつつある。

今年度は、遺跡の東端部を3,000㎡にわたり調査を実施したが、生活道路の確保、水道管の維持等により、調査区は寸断されたものになった。しかし、B区において、岩倉城の東限を示すと考えられる堀状の遺構を確認でき、また、下層の調査では、縄文晩期の竪穴住居や古墳時代の集石墓群等を検出し、新たな知見を付け加えることができた。



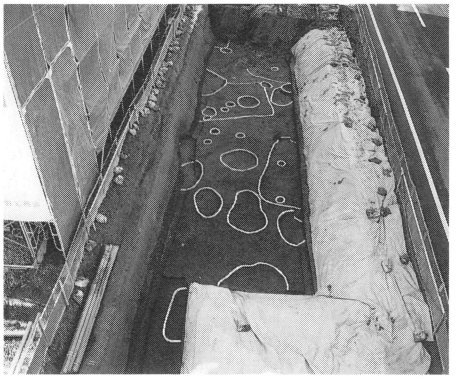
第Ⅰ図　調査区位置図（1/5000）

調査の概要

今年度調査区の基本層序は、第Ⅰ層：整地土、第Ⅱ層：褐色シルト（戦国・中世）、第Ⅲ層：淡褐色砂（古墳・弥生）、第Ⅳ層：黒褐色砂質シルト（縄文晩期）である。遺跡は、出土遺物により大きくⅠ期からⅥ期に区分されるが、今回の調査においてはⅢ期（奈良時代）の遺構・遺物はみられなかった。以下、各時期の概略を述べていく。

Ⅰ期（縄文～弥生時代）　従来の知見になかった縄文晩期と弥生中期の遺構・遺物を検出した。縄文晩期の遺構としては、竪穴住居４棟、土坑数基がある。また、弥生中期の遺構には、竪穴住居２棟、溝数条があり、貝田町期を中心とした遺物が出土している。

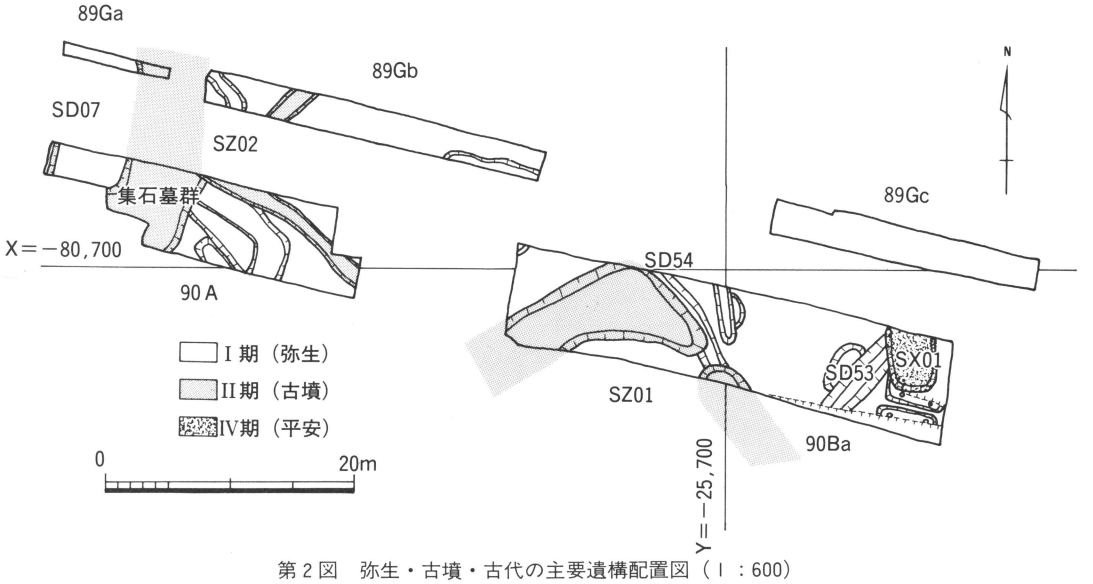
Ⅱ期（古墳時代）　６世紀前半以前に築造された方墳の周溝を再利用する形で築かれた集石墓群（６～７世紀）を検出し、主体部を７基確認した。また、５世紀後半に比定される方墳（ＳＺ01）も確認している。



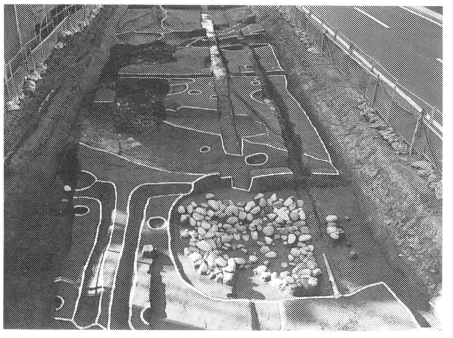
縄文晩期の遺構（東から）



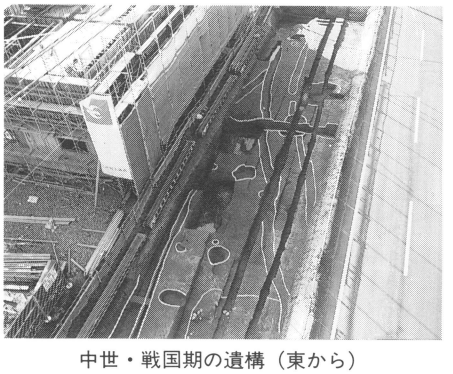
集石墓群（西から）



第２図　弥生・古墳・古代の主要遺構配置図（Ｉ：600）



集石遺構（東から）

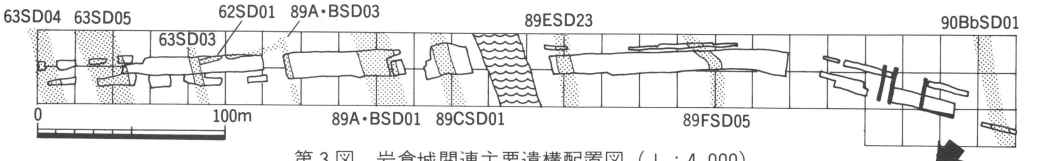


中世・戦国期の遺構（東から）

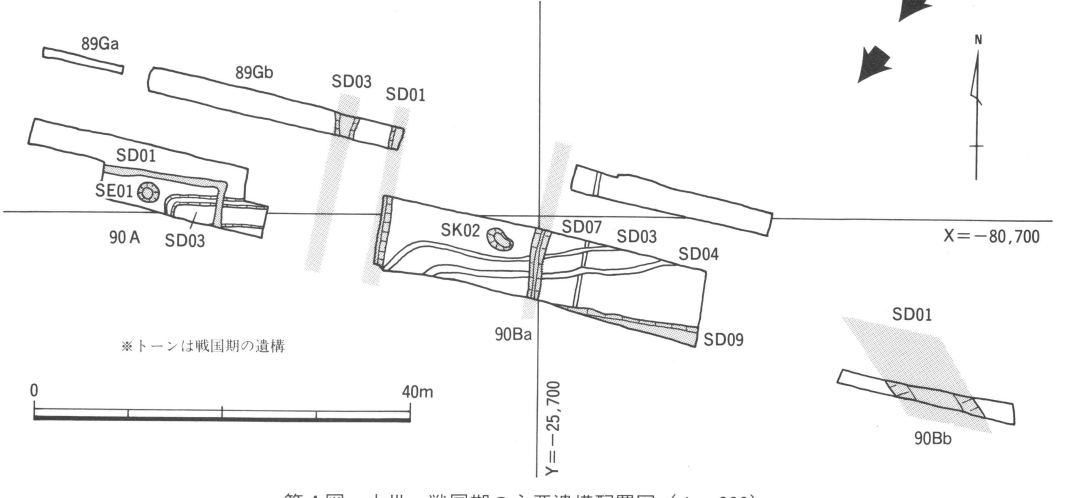
Ⅳ期（平安時代）　集石遺構（ＳＸ01）を確認している。これは、井戸状の土坑が廃絶した後、人頭大の河原石を方形状に集積したものであり、灰釉椀が出土している。

Ⅴ期（中世）　調査区のほぼ全域で13～14世紀を中心とした遺構・遺物がみられた。特に、Ba区を並行して斜めに横断するＳＤ03・04は規模・形状ともに酷似しており、道の可能性が考えられる。

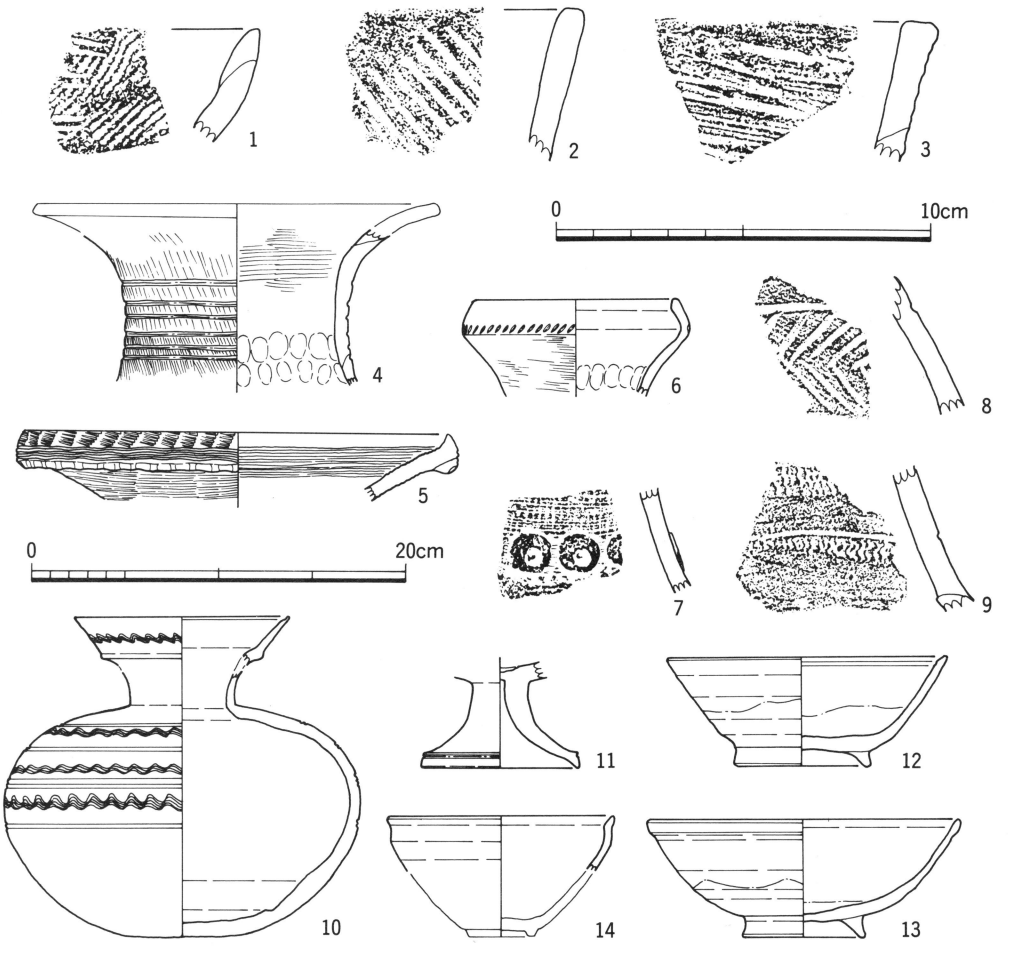
Ⅵ期（戦国時代）　Ⅵ期の遺構には、溝・井戸及び土坑がある。Ba区で検出した溝数条は、幅１～２ｍの規模であり、東西・南北方向にほぼ直交する形で配置される。Bb区ＳＤ01は、幅10ｍ・深さ３ｍの規模を持つ堀状の遺構である。この溝を境として、戦国期の遺構・遺物は全くみられなくなり、岩倉城の東限を示す注目すべき遺構といえよう。



第３図　岩倉城関連主要遺構配置図（１：4,000）



第４図　中世・戦国期の主要遺構配置図（１：800）



1～3　縄文晩期（包含層）　　4（SD54）　　5～9（SD53）
10～11（SZ01）　　12～13（SX01）　　14（SD09）
第5図　出土遺物実測図（1：4、拓図1：2）

まとめ

県道萩原多気線建設に伴う岩倉城遺跡の発掘調査も、今年度で一応終了することになる。4年間に及ぶ発掘調査は、尾張の拠点的な城でありながら実像の不明であった岩倉城を現代に甦らせるかの如く、多数の遺構と夥しい遺物を我々に提供した。しかし、それらは物言わぬ「もの」であり、かつ様々な問題を内包している。今後、整理作業に入るわけだが、考古学的分析を中心に据え、文献史学、歴史地理学等の成果を取り入れながら、岩倉城を多角的に検討していく必要があろう。そうすることによって、物言わぬ「もの」が自ずと我々に歴史を語りかけてくれるものと信ずる。

最後に、蛇足的だが、岩倉市の周辺は、名古屋のベッドタウンとして開発が急であり、存亡の危機にたたされている遺跡も少なくない。行政的な配慮を期待したい。

（服部信博）

岡島遺跡

調査の経緯　岡島遺跡は、矢作川左岸の沖積低地上の微高地に所在する弥生時代を中心とする集落遺跡である。所在地の地目は水田および畑地となっており、西側に現在の西尾市街地がのる洪積台地が、東側には幡豆山塊を背景に岡島町の集落が展開している。なお、地表面の標高は、５ｍ程度である。本センターが実施したこの遺跡の調査は、昭和61年度の試掘調査を皮切りとし、昭和62・63年度には県道蒲郡碧南線建設に伴う調査を終了し、平成元年度からは、国道23号線バイパス建設に伴う調査を開始している。

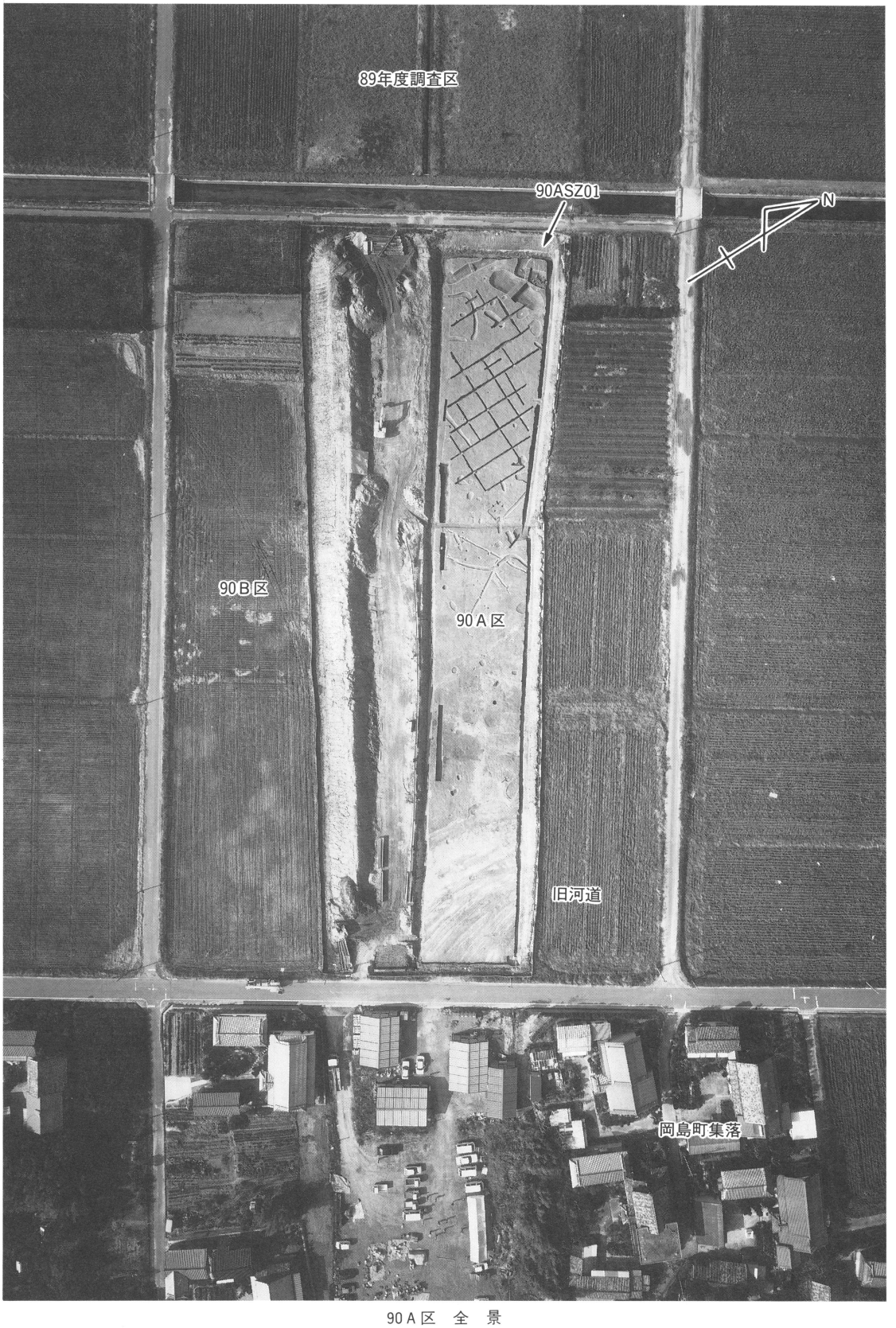


遺　跡　遠　景

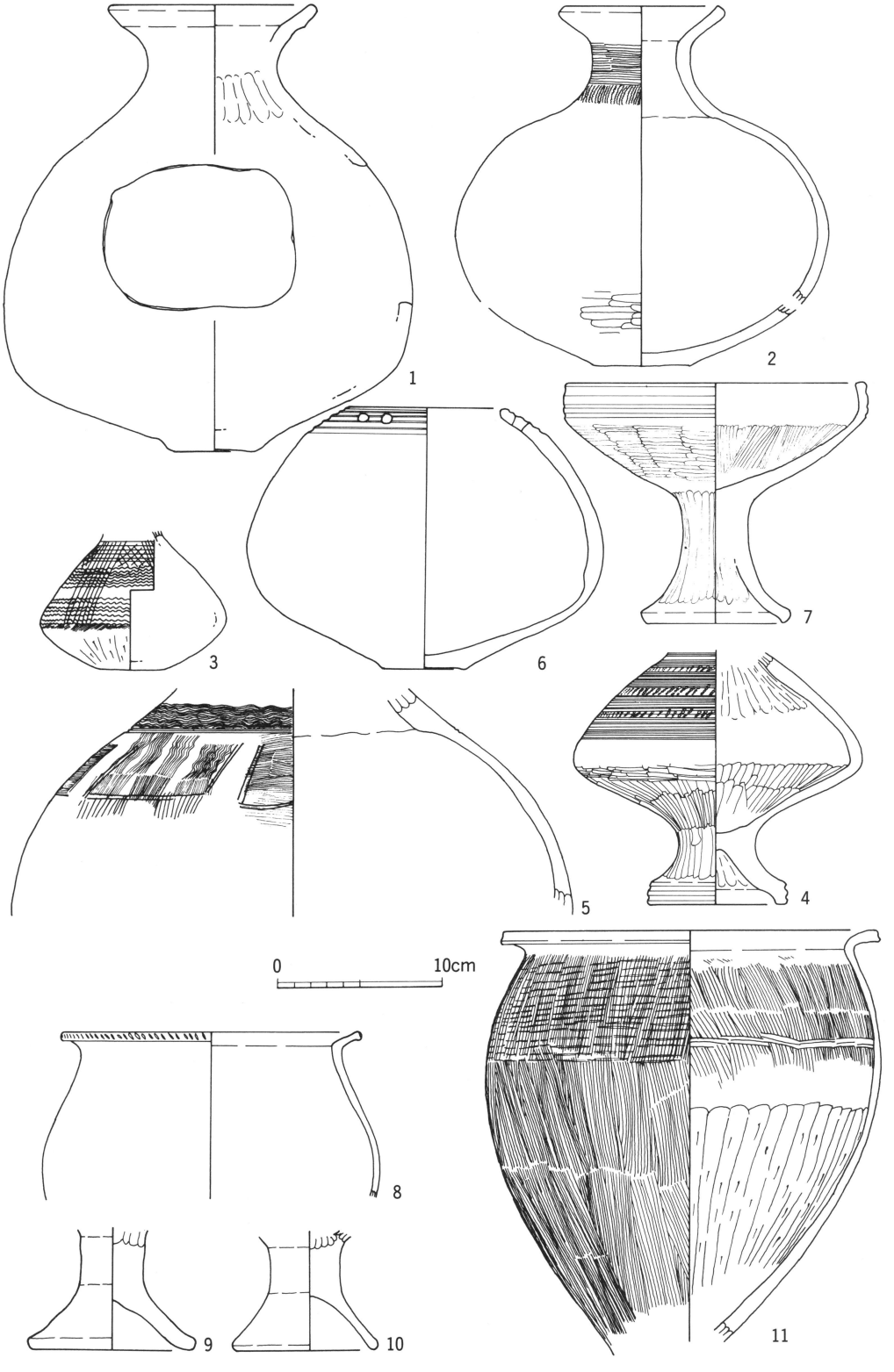
本年度の調査区は、平成元年の調査区の東方にあたり、岡島遺跡の南端部に該当していることが考えられる。調査面積は、9000㎡である。なお、具体的調査にあたっては、これをさらに排土などの関係で、Ａ・Ｂ区の２地区に分割して実施した。今回の報告は、調査期間が地下水位の低下する冬期に設定され、現在も調査が継続中である関係上、Ａ区上面で検出された周溝墓（90Ａ　ＳＺ01）とその出土遺物を中心とする。

遺構　ここで報告するＡ区上面とは、県道蒲郡碧南線建設に伴う調査で報告（以下、県道報告書）した第１面・第２面に該当する。これらは、前者が古墳時代後期～中世頃、後者が弥生時代中期末に該当しているが、本年度調査区においてはこれらを同一面で検出し（上面）、遺構埋土の差異によりこれを識別している。遺構の分布状況は標高が高い西側にほぼ集中し、東側では遺構も希薄。具体的に検出できた遺構は、第１面では、溝数条・土坑十数基である。遺構の配置などに規格性はうかがえない。一方、第２面では周溝墓３基・土器棺１基を確認でき、墓域としての性格を考えることができる。そして、土器棺の検出数が89年度のそれと比較し、希薄になる傾向が強いことや、検出されている周溝墓の存在を重視するのならば、ほぼ、90年度の調査区と、89年度の調査区ととで墓制の差が存在しているのかもしれない。ただし、周溝墓の検出数がやや乏しく、今後の検討を要する。

今回報告する遺物を出土した周溝墓ＳＺ01は、調査区の北西隅に存在し、その全貌は検出できててはいない。周溝の規模は、幅2.3～2.6m、検出面からの深さ0.6mである。



90A区　全　景



90A SZ01 出土遺物

遺物　ＳＺ01からは周溝の北側部分で、集中して多数の土器が出土している。これらの土器は現在整理中で、代表的な11点についてのみここで報告する。なお、器種名については、県道報告書に従う。

１は広口壺Ｂ。にぶく屈曲する口縁部に、肩部と腰部が張る全体に四角形に近い体部を有する。無文で、焼成後穿孔による円窓を有する。２は細頸壺。口縁部は直線的で、口端はやや肥大する。頸部は太く、体部は１と同様に、肩部と腰部が張り全体に四角形に近い。外面の腰部以下にミガキ調整を加える。頸部に文様がみられ、上方に櫛による直線文、下方に貝殻による刻目文を施す。３は細頸壺。「ソロバン玉状」の体部を有する。外面の腰部以下にはケズリ調整を加える。文様は腰部より上方で、櫛による直線文、波状文と櫛による縦方向の直線文、篦による斜格文を施す。４も細頸壺。３に太くがっしりとした台部を有する。腰部は強く張る。文様は腰部よりやや上方と、台部の縁帯とでみられ、前者は櫛による直線文、刻目文を交互に配し、後者は凹線文を施す。５は広口壺か。頸部下方と肩部のみの破片であるが、肩部は張る。１・２と同様に全体に四角形に近い体部を有するか。頸部には櫛による直線文と波状文が、肩部には篦による直線文で設定された区画中に櫛による縦方向の直線文、波状文を充填する。６は無頸壺。１・２・５と同様に肩部と腰部が張る全体に四角形に近い形状。口縁部には凹線文がみられる。７は高杯。細く高い脚部と、「鉢状」の杯部を有する。口縁部には凹線文を施す。８は甕。腰部以下を欠くが、丸味を帯びた体部に短く屈曲する口縁部を有する。９・10は甕の台部。上方は柱状に発達する。11も甕。台部を欠くが、肩部付近に最大径を有する丸味を帯びた体部と、短く屈曲する口縁部を有する。外面はハケメ調整とタタキ調整により、内面はハケメ調整とケズリ調整による。

まとめ

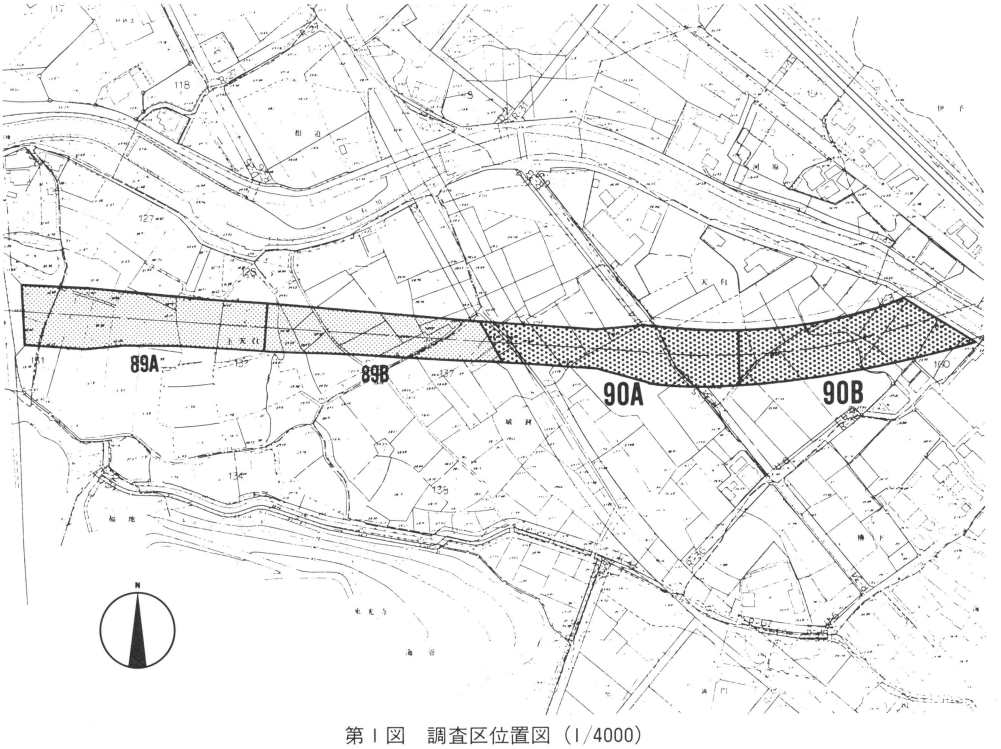
若干のまとめとしてＳＺ01出土土器の時期について考えてみたい。まず、１・２・５・６・８～10は、在地系の土器である。いずれも淡灰色の色調を呈し、土器を黒色に焼成するという原則が崩壊しつつある様子をうかがうことができる。また、６にみられる在地系の器形に施される凹線文は、これが外来的要素を受けた結果であったことの１つの根拠になりうるだろう。つぎに３・４・７・11は外来系の土器で、これらが定着しているものと考えることができる。以上の様子から、ＳＺ01出土土器の内容を県道報告で提示されている編年にあてはめるとⅣ－２期に該当し、従来良好な資料に恵まれなかったこの段階の資料を補足するものである。　（池本正明）

東光寺遺跡

調査の経過

東光寺遺跡は、額田郡幸田町大字深溝字上天白、字天白及び字城跡にかけて所在する。遺跡は、県道蒲郡碧南線と同安城蒲郡線の建設に関連して行われた圃場整備に先立つ幸田町教育委員会の試掘調査によって確認され、耕地整理部分に関しては6次にわたる発掘調査が行われている。県道蒲郡碧南線については、愛知県土木部からの愛知県教育委員会を通じた受託事業として、当埋蔵文化財センターが先年度より調査を実施している。平成元年度は、安城蒲郡線との交差点より西側部分の5000㎡を調査し、今年度はその東側部分5000㎡を90A、90Bの2地区に分けて調査を行った（第1図）。

遺跡は、美濃・三河山地の東の遠峰山と西の三ケ根山の山塊の山峡部を流れる拾石川右岸の洪積台地の中位段丘面に位置する。標高は、24～32mを測る。遺跡は、南と西は三ケ根山の山塊によって、東と北は拾石川によって画され、西の拾石川に向かって緩やかに傾斜する地形上に立地する。周囲は、近年まで不規則な土地割りの畑地と果樹園であったが、圃場整備によって整然と区画された畑地となっている。（酒井俊彦）



第1図　調査区位置図（1/4000）

調査の概要

先年度を含めた調査区全体は、三ケ根山の山塊と拾石川に挟まれた段丘の中央部に幅20～30m、長さ約500mのほぼ東西方向に伸びた形をしている（第１図）。89Ａ区の西側は山塊であり、その麓の89Ａ区から東端の90Ｂ区の西半までが洪積台地である。90Ｂ区の東半は拾石川の河谷で、東に傾斜している。遺跡の基本層序は、洪積台地上では　１．灰褐色土（現表土）、２．褐色土、３．暗褐色土で、深さ0.6～１mで基盤の黄褐色砂礫土層にいたる。２・３層は、90Ａ区を中心とした部分で「黒ボク」と呼ばれる東三河の中位段丘上に分布する黒色土に変化する。90Ｂ区の河谷部分は、拾石川に向かって傾斜を始めるやや離れた地区で現耕作土下に２～３層、川に接した部分で同じく１層の旧耕土が礫層直上にあり、現地表より１～2.5mで礫層に達する。遺構の検出は、基盤の黄褐色砂礫土及び礫層の上面で行った。先年度の調査で検出された遺構・遺物は、Ⅰ期：縄文時代晩期　Ⅱ期：弥生時代後期　Ⅲ期：奈良時代　Ⅳ期：中世に大別された。以下、各調査区ごとにその概要について述べる。



第２図　90Ａ区全景（西から）

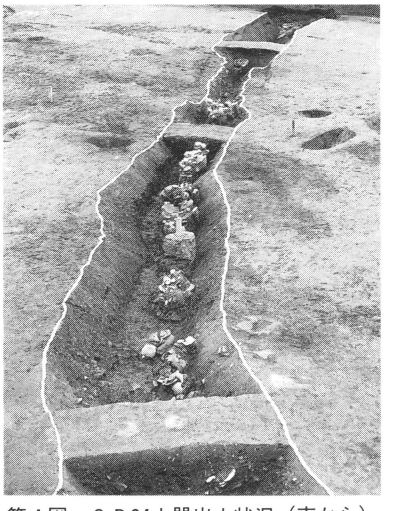
90Ａ区

89Ｂ区の東側に連続する部分である。溝６条、竪穴住居１棟、土坑二百数十基を検出した。６条の溝の内ＳＤ03～ＳＤ06は、弥生時代後期に属す。調査区の東端に近いＳＤ03･04は並行して走り、北半はほぼ南北方向、南半はやや南東－北西に方向を変え、調査区を横断する形で検出された。その西側のＳＤ06はほぼ南北に走り、調査区内では北半のみ存在し、調査区中央で途絶



第３図　ＳＤ03～06（南から）

する。ＳＤ05は、北部がＳＤ06と重複し、これに切られている。南半は、北西－南東に方向を変える。溝の規模は、各々地点によって差があるが、最大のＳＤ06で幅2.0m深さ0.7m程である。出土遺物については、各溝から西三河の後期前半の寄道式土器が出土しているが、ＳＤ03は相対的に少なく、他の３条の溝は完形に近いものを含む各器種の多量の土器が検出された。また、同時期の四本柱穴で隅丸方形の竪穴住居を１棟検出したが、検出面における掘り込みは浅く、出土遺物は少量であった。規模は、長軸5.5m×短軸4.8mである。その他に弥生時代の土坑と認定されるもの数基が検出されたが、遺物は少量であった。



第４図　ＳＤ04土器出土状況（南から）

土坑については二百基以上が検出されたが、弥生時代のものと中世前半の掘立柱建物の柱穴と考えられる数基以外は時期を認定できなかった。特殊なものとしては、掘り下げた基盤の土砂が一方向に近接して積み上げたまま放置されたため、基盤土が一定方向に片寄って埋積する独特な埋土の近世以前の大形土坑（長径3.7m、深さ0.7m）がある。その他、ＳＤ01は時期不明、ＳＤ02は近世の溝である。（酒井俊彦）

90Ｂ区

弥生時代、古墳時代、平安時代、江戸時代の四時期に及ぶ遺構・遺物を検出した。以下、時期ごとに概要を述べていく。

弥生時代　竪穴住居１棟（ＳＢ06）を検出した。規模は、他の住居跡との重複関係にあり明確にしがたいが、一辺が４ｍ前後の隅丸方形と思われる。主軸は北東に振れ、周溝・柱穴等は不明瞭で確認しえなかった。この住居跡の床面直上からは、壺・高杯等の弥生時代（高蔵期）の遺物が一括出土した。

古墳時代　竪穴住居２棟（ＳＢ05、08）を検出した。規模はともに一辺５ｍ程度であり、主軸はＳＢ05が北東に、ＳＢ08が北西に振れる。周溝・柱穴等は不明瞭で確認しえなかった。ＳＢ05の北東隅において焼土塊を検出し、須恵器の甕と土師器の高杯が出土した。ともに古墳時代後期に比定される。



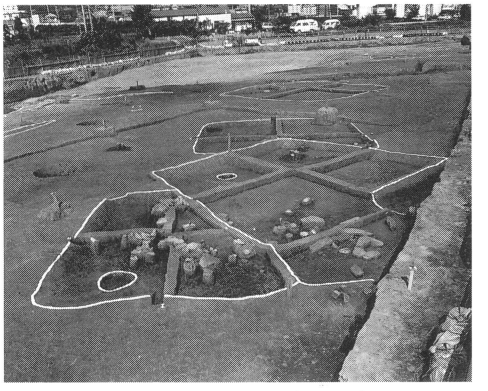
第５図　90Ｂ区全景（西から）

平安時代　竪穴住居２棟（ＳＢ04、07）を検出した。ＳＢ04は北西隅を一部確認したのみで規模等は不明である。ＳＢ07は一辺が４ｍ前後の隅丸方形で、主軸は北西に振れる。この住居跡の床面から灰釉陶器(皿)、土師器(甕)等の遺物とともに40～50cm大の柱状の自然石群が検出されたが、その性格は検討を要する。

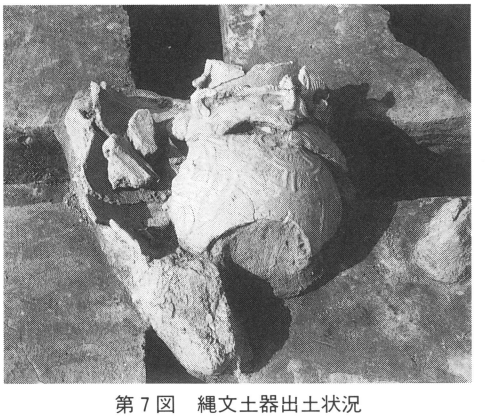
江戸時代　溝十数条、掘立柱建物２棟を検出した。溝の多くはほぼ東西方向に走り、最も北側に位置する溝（ＳＤ07）の北壁には石垣状の遺構がみられた。出土遺物から、これらの溝群の時期は江戸時代中期と考えられる。

上記の遺構・遺物以外に、多数の土坑と調査区東部において自然流路を確認した。また縄文時代中期の深鉢が出土したが、それに関連すると思われる遺構は検出しえなかった。

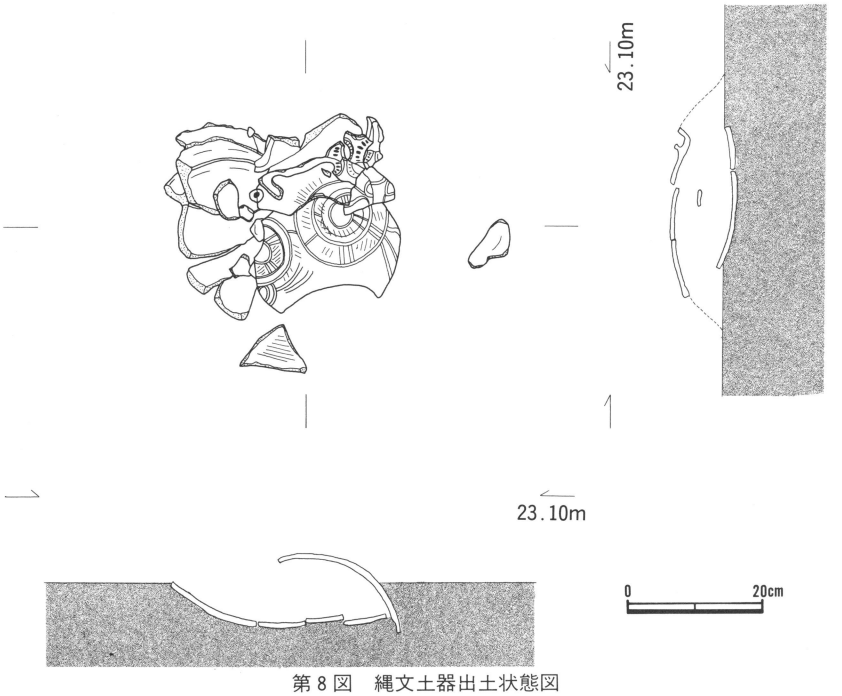
（大橋正明、川井啓介）



第６図　竪穴住居跡（西から）



第７図　縄文土器出土状況

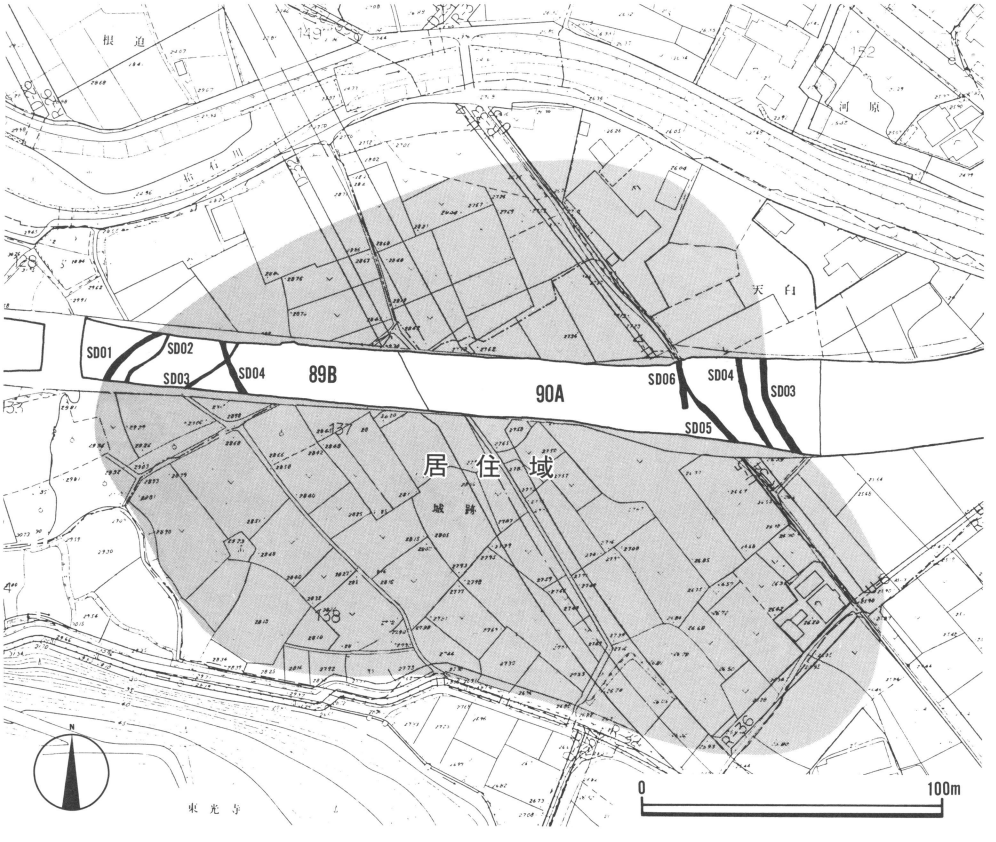


第８図　縄文土器出土状態図

まとめ

今年度の調査では、縄文時代から近世までの時期の遺構・遺物が検出されたが、先年度の調査結果と合わせて重要な遺構として弥生時代後期の溝及び竪穴住居がある。89Ｂ区では、同時期の遺構として溝４条（ＳＤ01～04）と若干の土坑が検出されている（第９図）。溝からは、後期前半から後半の土器が部分的に多量に出土しており、規模・断面の形状及び本数から90Ａ区の溝と対応する。また、二つの溝群の間に同時期の竪穴住居が存在することから、これらは環濠集落を構成するものと考えられる。両溝群は、最も外郭をなし並行して走る89Ｂ区ＳＤ01・02と90Ａ区ＳＤ03・04、この内側でこれにほぼ並行する89Ｂ区ＳＤ03と90Ａ区ＳＤ05、89Ｂ区の他の３本と異なる方向のＳＤ04と90Ａ区の調査区内において途絶するＳＤ06が、各々対応関係にあると推定される。90Ａ区ＳＤ03・04（89Ｂ区ＳＤ01・02）は、同時に掘削・機能していたと考えられるが、溝全体の新旧関係は今後の検討課題である。環濠集落の居住域は、最大で東西約250ｍであるが、調査ではこれに対応する墓域は認められず、北の拾石川の対岸あるいは居住域の南東方向の区域に存在する可能性がある。

（酒井俊彦）



第９図　弥生後期居住域推定図



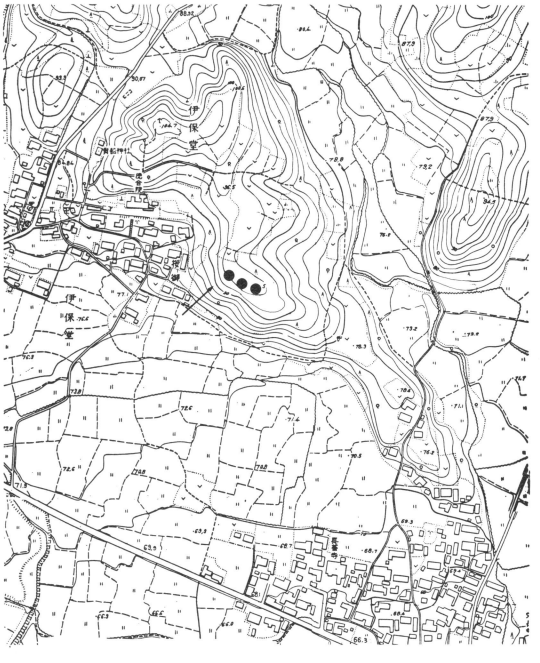
第10図　遺構全体図（1/800）

根川（ねがわ）遺跡

位置・経過　遺跡は愛知県豊田市東保見町根川地内の丘陵上に位置する。調査地は根川第１・２号墳の西側にあたり、眼下には古墳の出現期の遺跡として著名な伊保遺跡を望む。

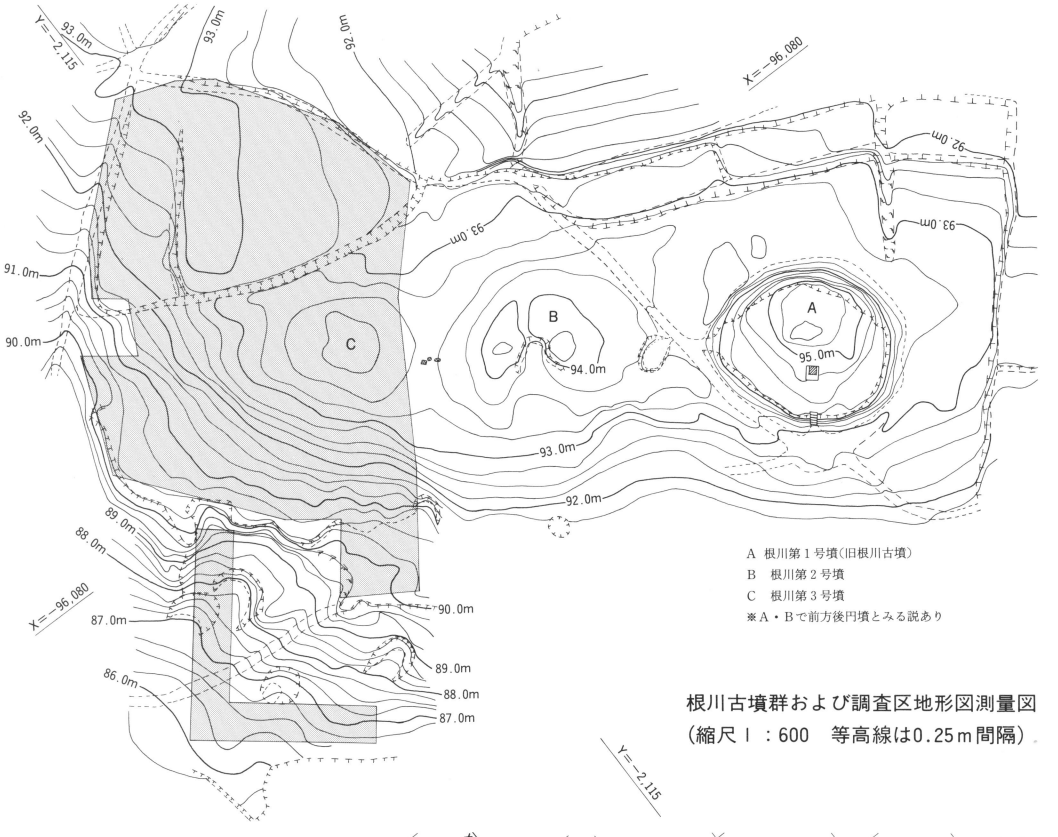
今回の発掘は一般県道加納・東保見線建設に伴う事前調査として実施したものである。調査の結果、以前より古墳の可能性が指摘されていた丘陵頂部、根川第２号墳西隣の高まりが古墳であることが確認され「根川第３号墳」と命名されたほか、丘陵斜面において表土層および流土中より須恵器・埴輪・灰釉陶器・中世陶器片が近代の陶磁器片に混じって出土したが、上記の古墳以外の遺構は認められなかった。

根川第３号墳　比較的平坦な丘陵頂部の南端に位置し、眼下の現水田面との比高差は約20ｍをはかる。墳丘の大半は流失し、原形はかなり損なわれている。現状では径13ｍほどの円墳とみられるが、一部調査区外となる東部は墳丘裾が直線的で方墳の可能性もある。西側で周溝（幅3.0ｍ、深さ0.3ｍ）の一部が検出された。主体部はすでに消失しているが、墳丘中心より北へ著しく偏った地点で簡易な埋葬施設とみられる土坑（長さ1.2ｍ、幅0.6ｍほど、舟底状の底に薄い粘土層・炭化物層が認められる）が検出された。遺物としては墳丘上（東側）から須恵器片（器台・𤭯・瓶類）がまとまって出土した。これらはいずれも６世紀中葉に比定されるもので、本墳の築造年代はそのころに求められよう。（北村和宏）



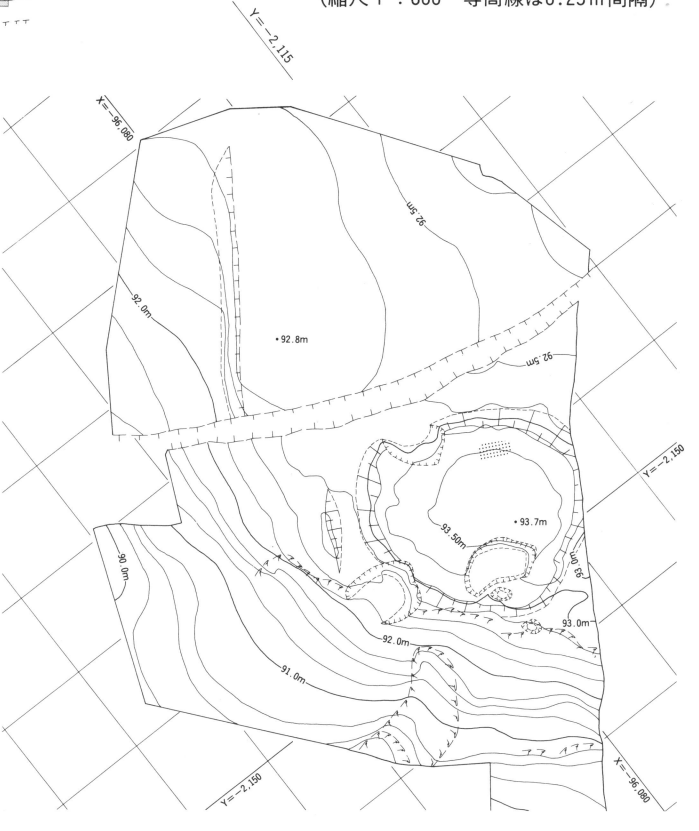


上：埋葬施設？（東から）
左：調査地位置図
（矢印調査地　●印 根川古墳群）



A 根川第１号墳(旧根川古墳)
B 根川第２号墳
C 根川第３号墳
※A・Bで前方後円墳とみる説あり

根川古墳群および調査区地形図測量図
(縮尺１：600　等高線は0.25ｍ間隔)



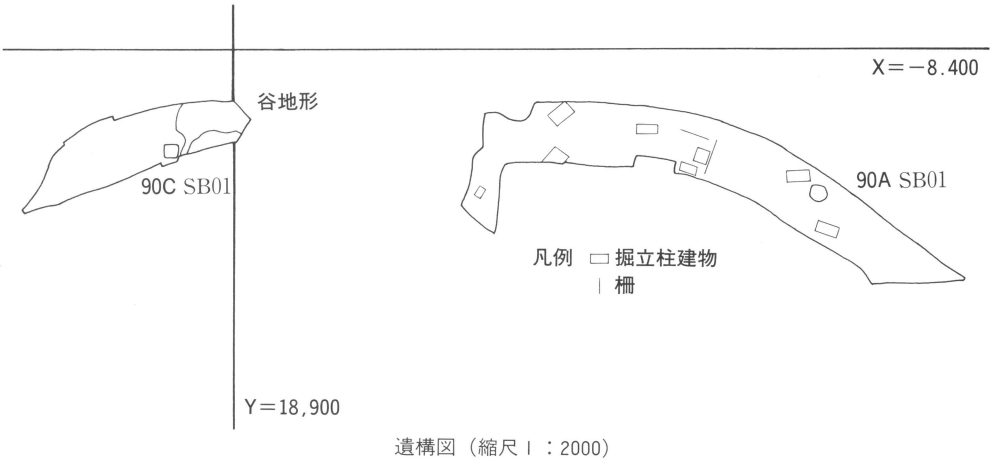
右：根川第３号墳実測図
(縮尺１：400　等高線は0.25ｍ間隔)

上万場（うわまんば）遺跡

調査の経過　上万場遺跡は、東加茂郡旭町に所在している。今回の調査は県道瑞浪大野瀬線建設に伴うもので、調査区は中央に所在している谷を挟んで、２か所に設定し、それぞれを二分割して実施した。調査区の呼称は東からＡ区～Ｄ区である。つぎに遺跡の所在地を地形的にみると、阿摺川が矢作川に合流する500ｍ手前の右岸側に該当し、ここに広がる面積10万㎡にも及ぶ緩やかな傾斜地帯の一角を占めている。なお、遺跡の標高は、ほぼ230ｍをはかる。現在の地目は、畑地である。

遺構　今回の調査で検出できた遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・柵・土坑・溝などの他、谷地形があり、調査区がほぼ居住域に該当していることが予想される。検出された遺構を年代的にみると、縄文時代～近世にまで及ぶが、各時期については数例を数えるに留まり、それほどまとまりを持ったものではない。以下、今回の調査で検出した遺構について主なものについて説明を加える。

まず、竪穴住居であるが、Ａ区とＣ区でそれぞれ１軒ずつ、合計２棟を検出している。Ａ区で検出できたものは、縄文時代前期末のもので、プランが円形を呈する。検出面での直径は５ｍ、深さ60㎝をはかる。周囲には主柱穴が巡る。中央には焼土の分布範囲が２か所認められ、いずれも周囲には、直径20㎝程度の小土坑がみられる。これを石の抜き取り痕と判断するのであれば、石囲い炉であったことが予想できる。なお、南側の炉については中央に円筒深鉢型土器を埋め込んでいる。また、Ｂ区で検出できた竪穴住居は、古墳時代後期のもので、プランがほぼ正方形を呈する。検出面での一辺は４ｍ、深さは10～20㎝をはかる。中央には、土器を埋めた土坑が存在している。上面が若干被熱している状況か



遺構図（縮尺１：2000）

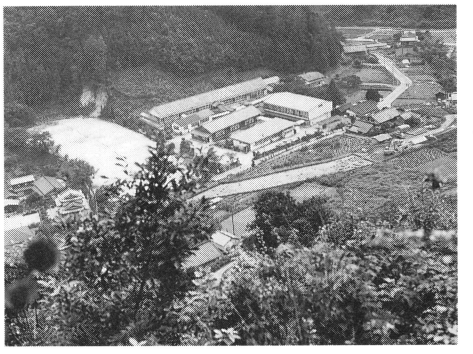
ら、炉であったことも考えられる。

つぎに掘立柱建物であるが、A・B区を中心として8棟検出している。これらは、地形による制約を受けて存在していることが考えられる。いずれも規模が2間×3間程度で、庇をもたない形態をとり、なかには柱通りの悪いものもみられる。柱穴の掘形は、プラン円形がほとんどで、大きさは検出面で直径40cm前後、深さ40～50cm前後のものが大半である。一部には柵を伴っているものもみられるが、いずれも小規模である。

最後に谷地形であるが、C区の北東½を占め、現在の谷の方向に向かってゆるやかに展開している。埋土中の遺物は、ベース上から縄文土器片、ベースから30cm上方に堆積する黒色土中から弥生時代中期の土器片が出土している。年代は、出土遺物の時期をそのまま当てはめるのならば、検出した部分が、ほぼ弥生時代まで谷として存在していたことが考えられる。

まとめ　今回の調査は面積4500m²に及び、三河山間部での遺跡のあり方を考える上で貴重な資料を提供したといえる。なお、遺物については今回は時間の関係で触れることができなかったが、整理箱（30×50×15cm）で50箱程度に留まり、多量とはいいがたいが、遺跡が美濃と三河の中間地帯に存在していることから、その性格は多様なものとなっている。

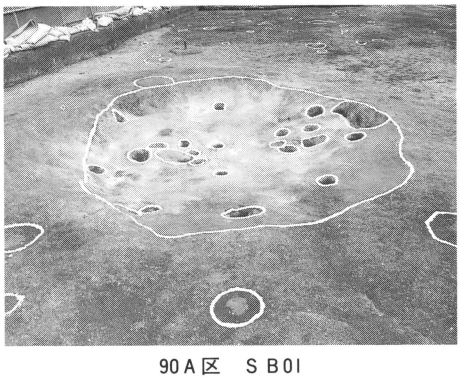
（池本正明）



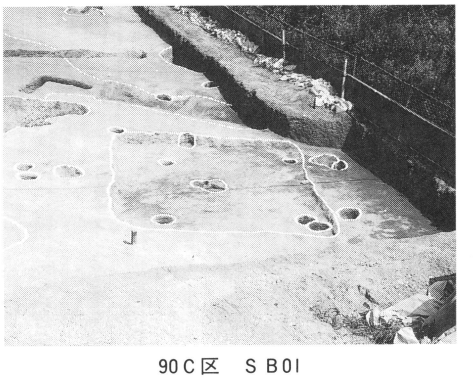
遺跡風景



90A区　全景



90A区　SB01



90C区　SB01

松 久 保 遺 跡

調査の概要

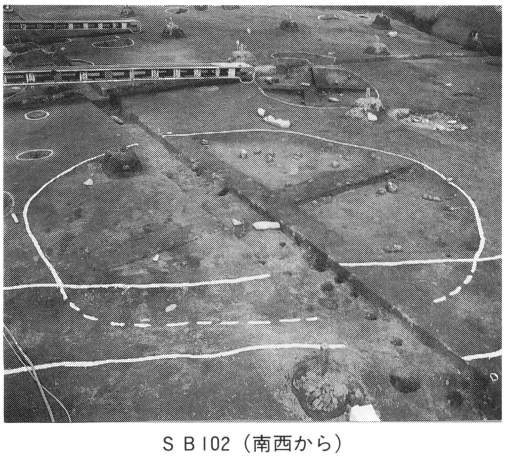
松久保遺跡は北設楽郡東栄町大字中設楽字松久保に所在する。本遺跡は愛知県の東北端、三河山間部に位置し、県内に僅かに入り込む天竜川水系に属している。振草川（大千瀬川）によって形成された南向き緩斜の河岸段丘上（標高約300m）に遺跡は立地しており、周辺には縄文時代を中心とする多くの遺跡が見られる。

調査は県立特別養護老人ホーム建設工事の事前調査として、平成２年10月から翌年３月まで、約６ヶ月実施した。調査区及びその周辺は、水捌けのよい南向きの緩斜面であることから、畑地として利用されており、その周囲は植林による杉、檜で囲まれている。調査区内の基本層序を概観すると、地表面から20～80cmの厚さで淡茶褐色の耕作土が堆積しており、その下に20～60cmの厚さで黒褐色粘質土が堆積し、さらにその下には20～40cmの厚さで暗灰褐色粘質土が堆積している。基盤層は、礫を伴う明黄褐色粘質土である。遺構面は大きく２時期に分けられる。黒褐色粘質土層を掘り込んでいる上面は、溝２条、土坑数基を検出したが、これらは中世末から近世にかけてのものと思われる。暗灰褐色及び明黄褐色粘質土を掘り込んでいる下面では、数ヶ所の土坑等を検出し、縄文時代中期から弥生時代中期にかけての土器片、石器片等が出土しており、現在その性格を検討中である。

（松田　訓）



作 業 風 景



ＳＢ102（南西から）

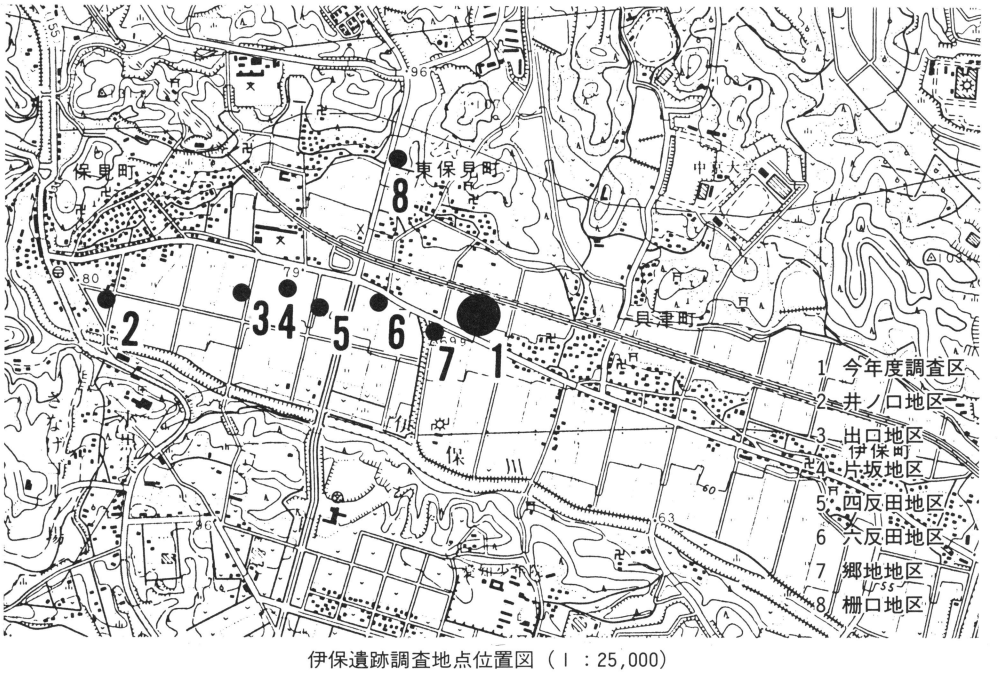
伊保遺跡

調査の概要

伊保遺跡は豊田市保見町から東保見町にかけて所在する。猿投山から南へ舌状に延びる洪積台地南端に立地し、その南には西から東へ伊保川が流れている。

昭和44年、旧猿投町地内において圃場整備事業が行われ、これが保見町に及んだことにより工事中遺物が認められた地点において猿投遺跡調査会が緊急調査を行った（２～８）。その結果、弥生時代後期～古墳時代、奈良・平安時代の遺物が出土しているが、時間的制約により断面観察と遺物採集に終わった地区が多い。この調査では、四反田地区・六反田地区において弥生時代後期～古墳時代の竪穴住居跡28棟を検出している。伊保遺跡は東西1.4kmに及ぶ細長い集落遺跡である。

今回の調査は、県道加納・東保見線建設に伴う事前調査であり、その面積は2192m²である。調査区(1)の南に県道名古屋・豊田線、北に愛知環状鉄道が走る。猿投遺跡調査会の調査地区のうち最も東にある郷地地区(7)よりさらに東にあたる。標高は70～72mである。現状は水田耕作等により全面的に削平され、特に南端は１m以上も深く抉られており、残存状態は良くない。現在調査途中であり詳細を述べる段階ではないが、弥生時代後期～古墳時代初頭の自然流路を検出している。（岡本直久）

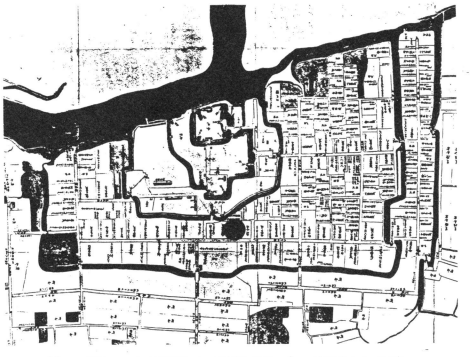


伊保遺跡調査地点位置図（１：25,000）

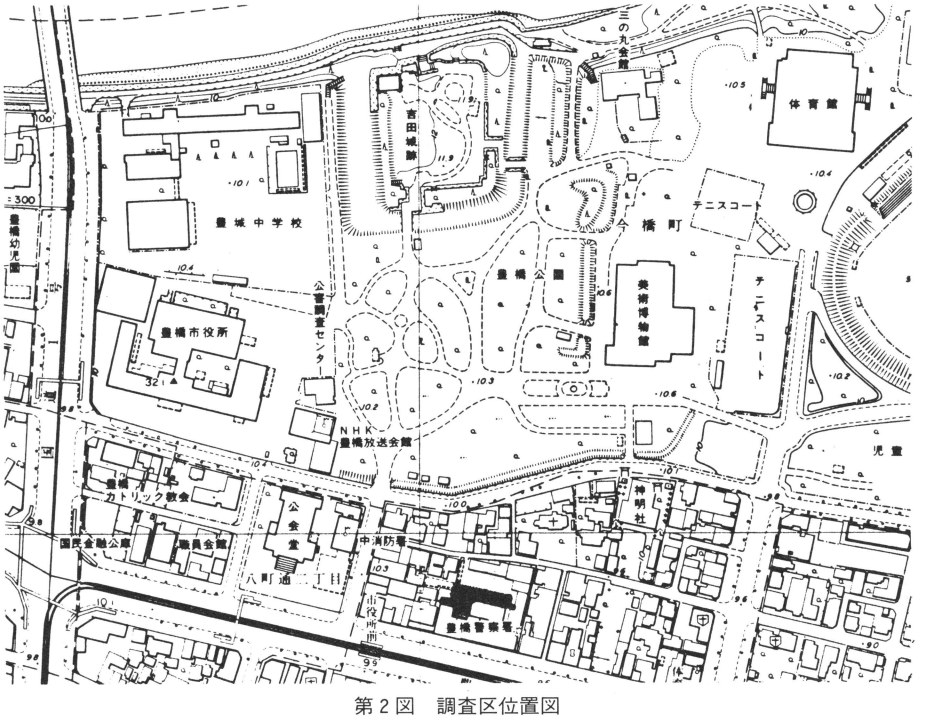
吉田城跡（よしだじょう）

調査の経過

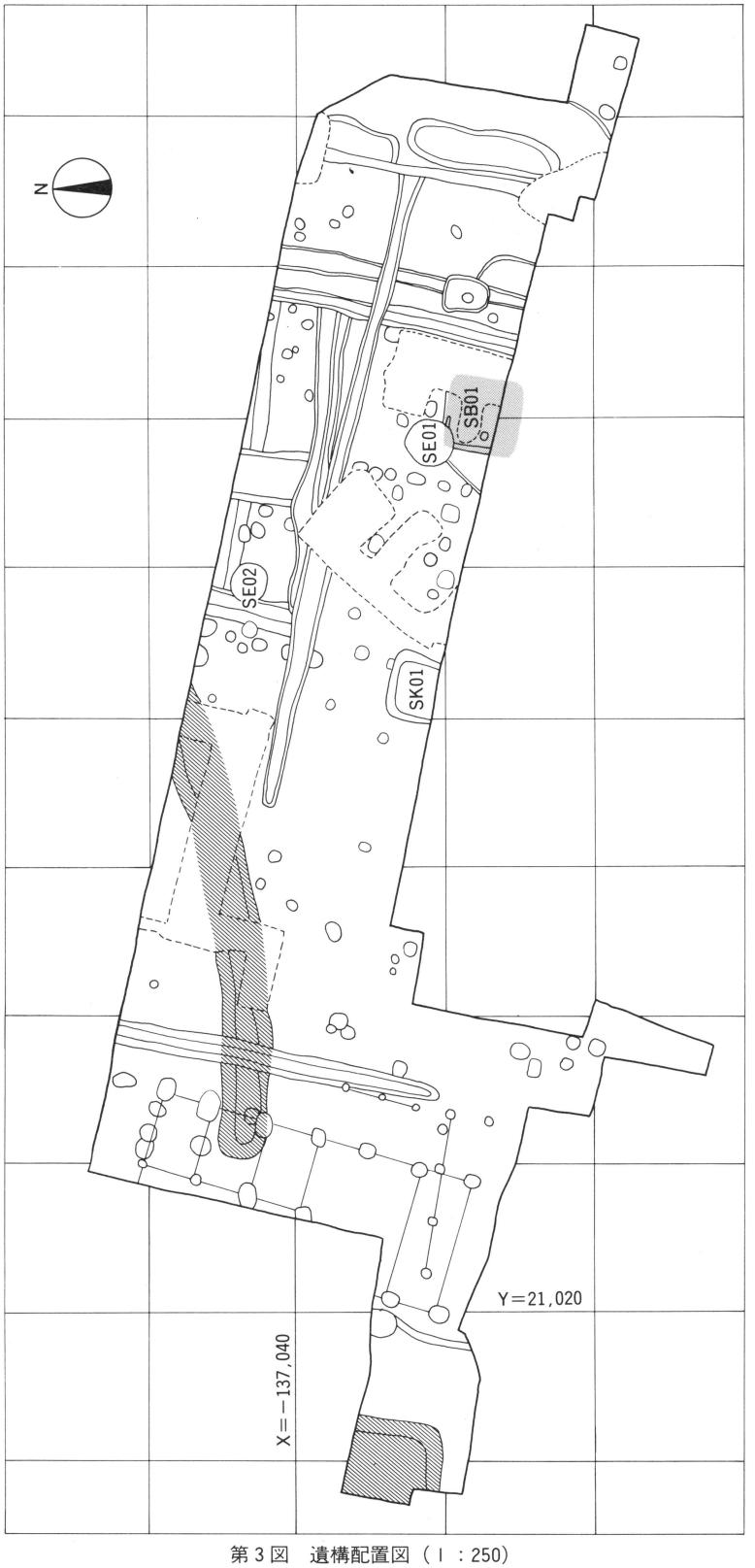
吉田城跡は豊橋市八町通に所在し、豊川左岸、朝倉川との合流点の豊橋段丘上に位置する。この豊橋段丘は街道筋にあたり、古代においては飽海渡、中世では鎌倉街道渡津宿、そして近世には東海道吉田宿として東三河の交通の拠点となっている。吉田城（今橋城）は永正二（1505）年豊川市域に勢力を広めていた牧野古白により創建され、家康家臣酒井忠次の整備拡張により、東三河と遠江境の戦略的拠点となる。この吉田城を近世的城郭に変貌させたのは、天正十八（1590）年に入封した池田輝政であった。池田輝政は在城十年間で城地や武家屋敷地の整備につとめ、84万m²におよぶ広大な城地を創出させる。しかし建設半ばで関が原の戦いの勲功により姫路転封となり、以後幕藩期を通じて6～8万石の大名領となり、城郭自体の完成は見られないまま明治を迎える。



第1図　吉田藩士屋敷図（●印調査区）



第2図　調査区位置図



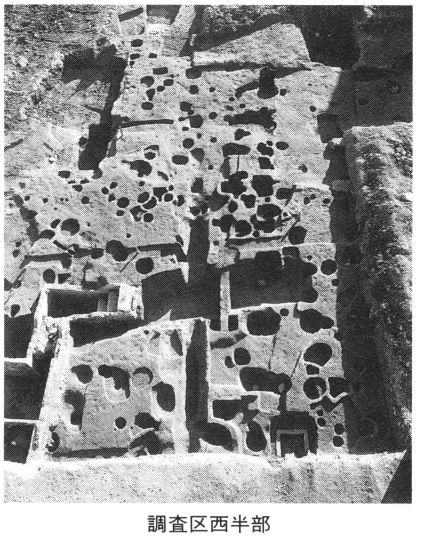
第３図　遺構配置図（１：250）
（▨は戦国期の溝）



S B01



調査区中央部



調査区西半部

今回の調査は豊橋警察署の建替えに伴うもので調査面積は600㎡である。

調査の概要

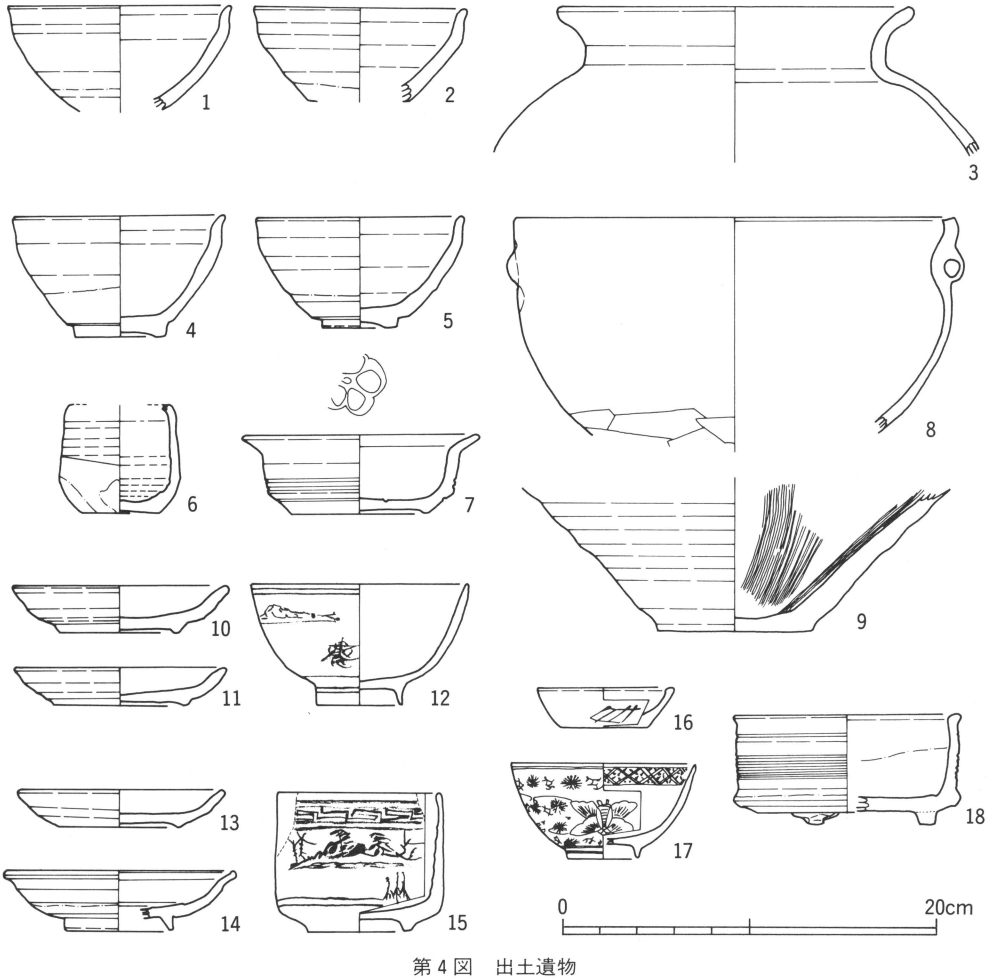
調査区は幕末期に作成された「吉田藩士屋敷図」によれば、家老西村氏の屋敷地にあたる。基本層序は、盛土→茶褐色土→赤褐色土（地山）である。しかし、明治以降警察署用地として活用されていたため建替えや防空壕等による攪乱が激しく、遺構の残存状況は決して良好ではなかった。但し、遺構の深度が深いため攪乱の下層から遺構の底部を検出することができた。今回の調査において検出した遺構・遺物は、古墳時代、戦国時代、江戸時代の３時期に大別することができる。以下、時代をおってその概要を述べてゆく。

古墳時代　竪穴住居２棟を検出した。遺構の大半が攪乱（防空壕）や調査区外になり、規模は不明であるが、周溝の一部や柱穴と思われる土坑が検出されたことにより住居跡と認定した。遺物は床面直上より土師器の甕等が出土した(第４図－３)。

戦国時代　今回の調査で注目された遺構として、調査区西半部で検出された２条の溝がある。１条は調査区内で幅２ｍ、深さは現地表面から２ｍをはかり、調査区内で収束もしくは西へ屈曲する。後世の遺構により溝の肩は削平されている。他の１条は幅1.5m、深さ0.7ｍをはかり、調査区西端で立ち上がり、東から北へ円

弧を描くように屈曲している。出土遺物（第４図－１、２、４～９）によれば池田輝政入封以前の遺構であると考えられ、中世吉田城（今橋城）の構造を考える上で貴重な資料となると思われる。

江戸時代　井戸２基、溝数条、土坑多数を検出した。井戸の深さは共に現地表面から約６m程度であり、遺構埋土の観察により屋内に設置されていた事が確認できた（第４図ＳＥ01；10、11　ＳＥ02；12)。溝は１条が東西方向に、他は南北方向に走り、いずれの溝も方位を若干東に振っている。このうち、調査区東端で検出された溝は江戸時代初頭から幾度かの掘りかえしをうけ、明治以降も排水用の溝として利用されていたと思われる（第４図13、14、15)。また土坑に関しても廃棄土坑（第４図ＳＫ01；16、17、18）と思われるものが１基確認された以外は大半が柱穴と思われ、根石を伴うもの、柱痕の認められるもの、及び深度の深い土坑、の３種類に区別することができる。出土遺物としては近世の陶磁器類が中心である。　（川井啓介）



第４図　出土遺物

淡洲神社北遺跡（あわのすじんじゃきた）

調査の概要

淡洲神社北遺跡は、豊川市の西端、音羽川と西古瀬川に挟まれた標高約８～９ｍの沖積低地に立地する。この沖積低地には他にも、御津川、佐奈川、豊川などの大小河川が流れており、これらの旧河道も随所に認められる。これらの旧河道間は、網目状に自然堤防が発達しており、その上に、集落が散在している。この沖積低地には水田地帯が広がり、自然堤防上は畑地として利用されている。また遺跡の南西には、「為当条里遺構」も残っており古くから水田として利用されたことが窺われる。

調査は東三河環状線建設工事に伴い、平成２年４月～６月まで実施した。調査区周辺の自然堤防上の畑地には、古代から中世にかけての遺物が認められたため、調査区内でも自然堤防上に何らかの痕跡が残されていることが予想されたわけである。調査区は３区（Ａ、Ｂ、Ｃ）設定されたが、基本層序を概観すると、海抜約９ｍの現地表面の下に、30～50㎝の厚さで客土が存在し、その下に40～50㎝の厚さで暗灰褐色シルト層が存在する。このシルト層は現代の水田耕作土と思われ、その直下には粗粒砂を伴う直径２～５㎝の円礫が堆積している。全調査区において遺物は、この水田耕作土直下、砂礫層直上より出土しており、明確な遺物包含層、遺構を検出することができなかった。

出土遺物は一定の時期幅を持たず、弥生時代中期と思われる土器片、古式土師器、須恵器等の破片が混在していた。この中に１点、チャート製の石帯が含まれていたことは、河川上流域における国府との関係などから、興味深いものがある。

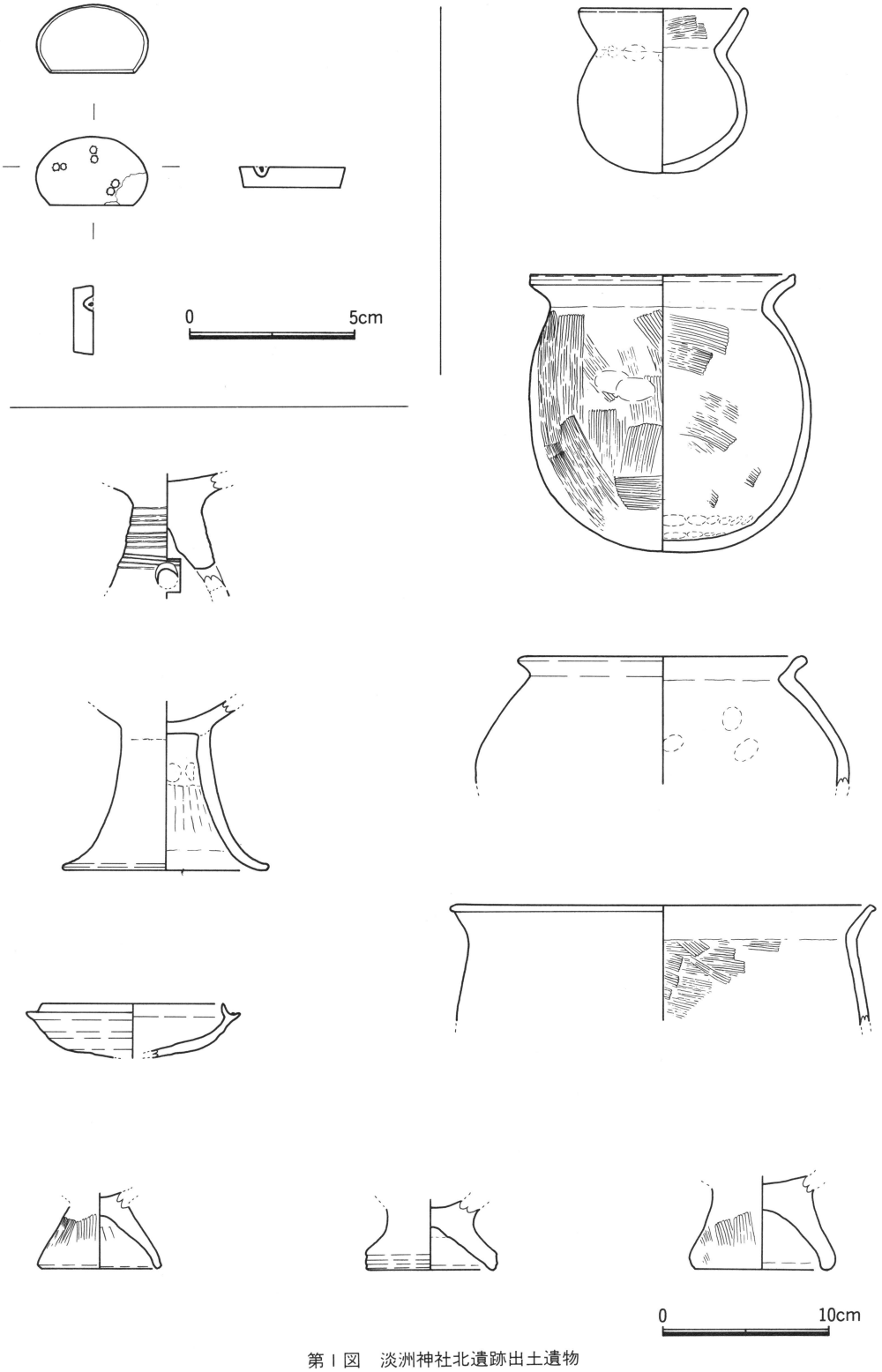
調査の結果本遺跡は、地理的条件、遺物の出土状況・構成から、第一次的遺物包含地とは考えにくく、河川等によって運搬された第二次的遺物散布地と思われる。（松田　訓）



Ａ・Ｂ区全景（北東から）



Ａ・Ｂ区全景（南西から）



第Ⅰ図　淡洲神社北遺跡出土遺物

境川（さかいがわ）遺跡

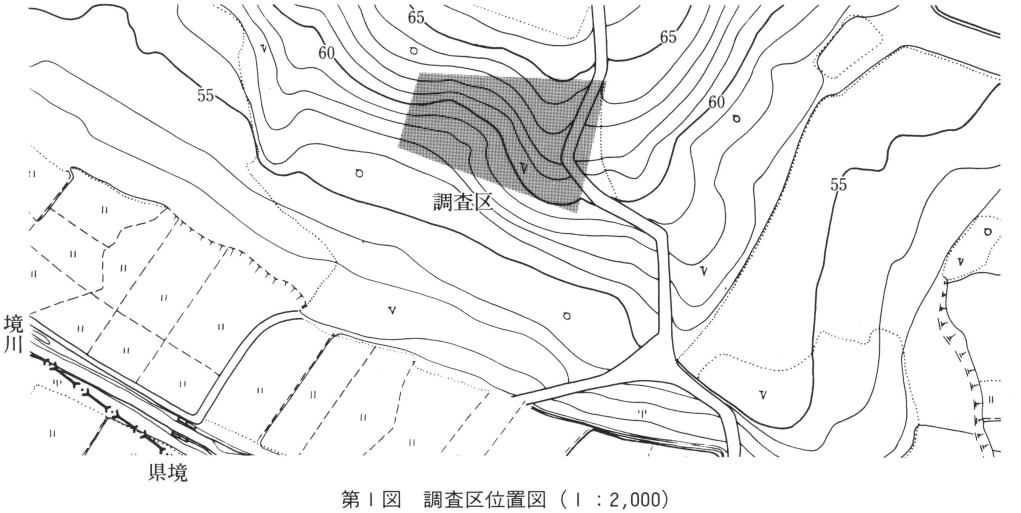
調査にいたる経緯

境川遺跡は、豊橋市東細谷町境川に所在し、地形的には三河と遠江の境を流れる境川によって形成された河岸段丘の西側段丘崖に位置している。境川遺跡のある豊橋市東部から静岡県湖西市にかけての地域には、古墳時代後期から鎌倉時代の一大窯業生産地である湖西古窯跡群がひろがっている。この地に国道１号線のバイパス（潮見バイパス）が建設されることになり、その事前調査として600㎡の発掘調査を行った。

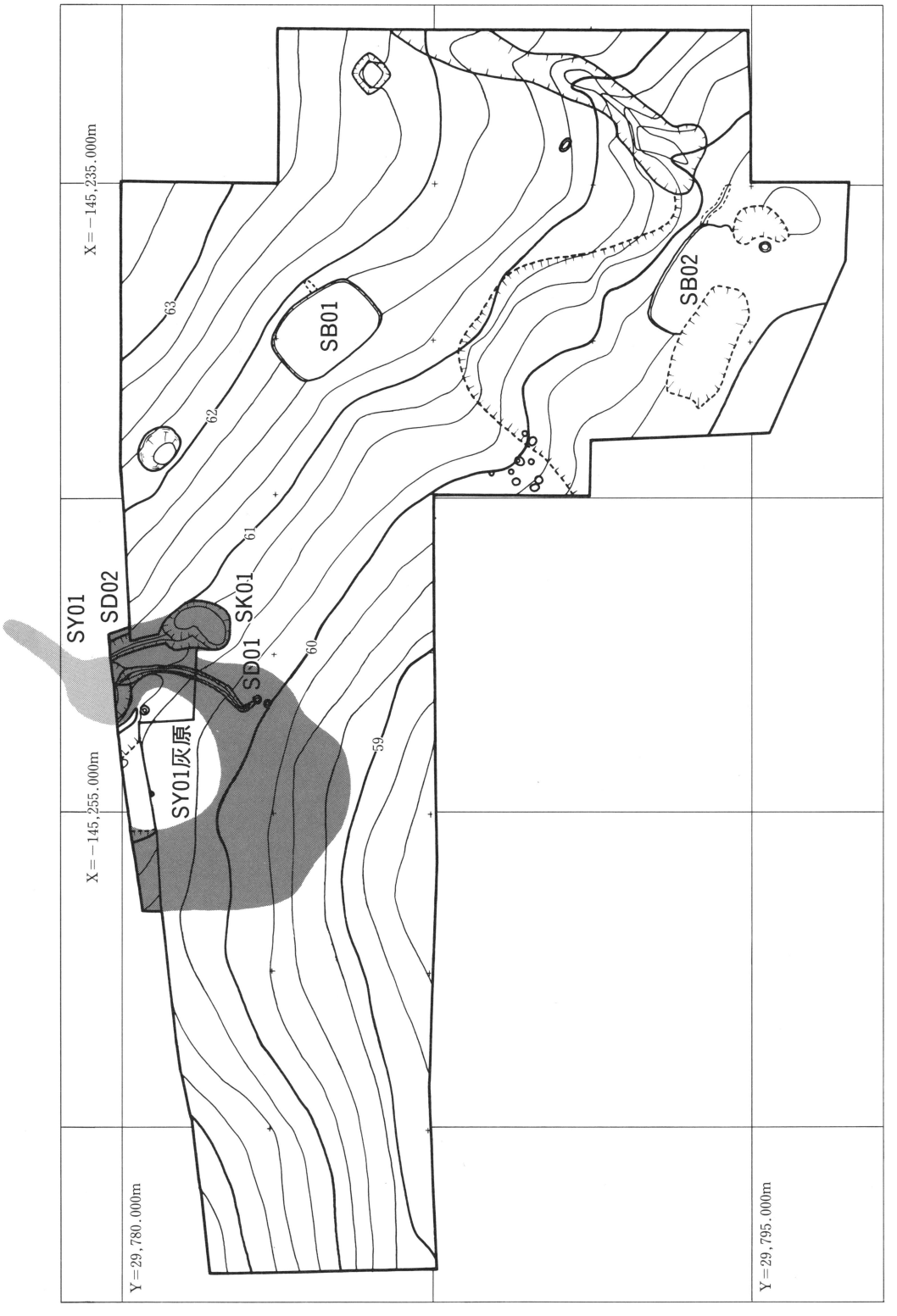
調査の概要

調査の結果、７世紀後半から８世紀前半にかけての窯跡とそれに付属する竪穴住居跡を検出した。窯跡（ＳＹ01）は、窯体が調査区外に位置するために灰原部分のみ発掘を行った。そして、窯の前庭部で焚口からのびる２条の排水溝（ＳＤ01・02）とそれにつながる土坑（ＳＫ01）が見つかった。２条の排水溝は重複して掘削されており、複数の窯が存在する可能性が高い。灰層の堆積は最も厚いところで25cm程度と薄く、遺物の量もコンテナに５箱ときわめて少ないが、時期幅はほぼ１世紀近くにおよんでいる。

竪穴住居跡は２棟あり、いずれも規模は3.5m×2.5m程度ときわめて小型で柱穴をもたない構造である。うち１棟（ＳＢ01）は７世紀末から８世紀前半に属し、北側に煙道が外にのびるタイプのカマドを有する。床面および埋土中から100点以上の須恵器片が出土している。もう１棟の住居跡（ＳＢ02）は８世紀中葉から後半に属し、ＳＹ01とは異なる窯跡に付属する可能性が高い。ここからは須恵器の製作に用いるための粘土塊が出土している。（樋上　昇）



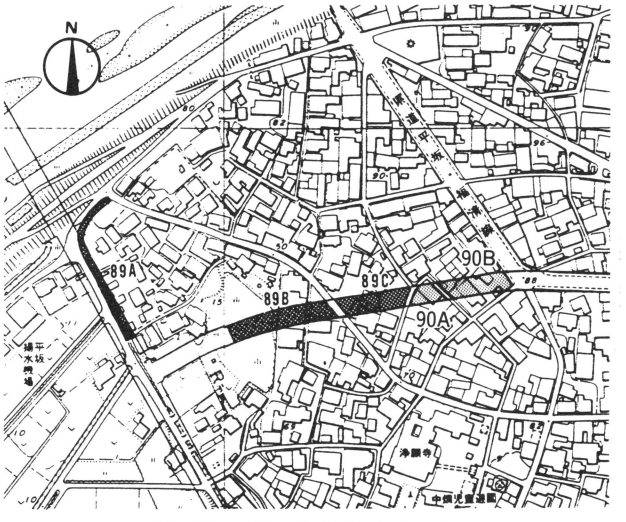
第Ⅰ図　調査区位置図（Ⅰ：2,000）



第2図　遺構配置図（Ⅰ：200）

清水（しみず）遺跡

清水遺跡は、愛知県西尾市中畑町清水地内に所在する。県営中畑橋橋梁整備事業に伴う事前調査として、平成元年度より発掘調査を実施している。本年度は、矢作川左岸の標高約７ｍを測る碧海台地（洪積台地）縁辺部880㎡を調査対象範囲として、90Ａ・Ｂの２調査区を設定した（第１図）。



第１図　調査区位置図（1/5000）

調査の結果、90Ａ区では、戦国時代から近世にかけての土取り土坑と思しき大型土坑（深さ1.5～２ｍ）３基を始めとして、近世の土坑・溝・その他を検出している。また、土坑・溝の一部には、アサリ・ハマグリを主体とし、他にカキ等から成る貝層の堆積を認めた。遺物としては、瀬戸・美濃、常滑、伊万里などの中・近世陶磁器、土師質煮沸器（土鍋・土釜）、土錘、寛永通宝、キセル等の出土がある。

90Ｂ区は、全般的に遺構の分布密度が希薄であり、調査区西端で近世陶器を包含する深さ約１ｍの貝層の落ち込みが認められた他には、近世末から近代の土坑を検出したにとどまった。

（尾野善裕）


90Ａ区全景（東から）


Ａ区天目茶碗出土状態

国道23号バイパス試掘調査

国道23号線バイパス予定地内　額田郡幸田町須美・桐山地区における遺跡の有無およびその範囲の確認を目的に下記の３地点について試掘坑を総計で20箇所設けた。調査期間は平成２年６月６～８日・11日で、調査面積は214㎡である。

第１地点　額田郡幸田町大字須美字南浦地内

トレンチNo.１～No.７　７箇所

各トレンチとも遺構・遺物の検出・出土なし。

第２地点　額田郡幸田町大字須美字石原・不馬入地内

トレンチNo.１～No.６　６箇所

トレンチNo.５において江戸時代（18世紀）の遺構・遺物を検出。

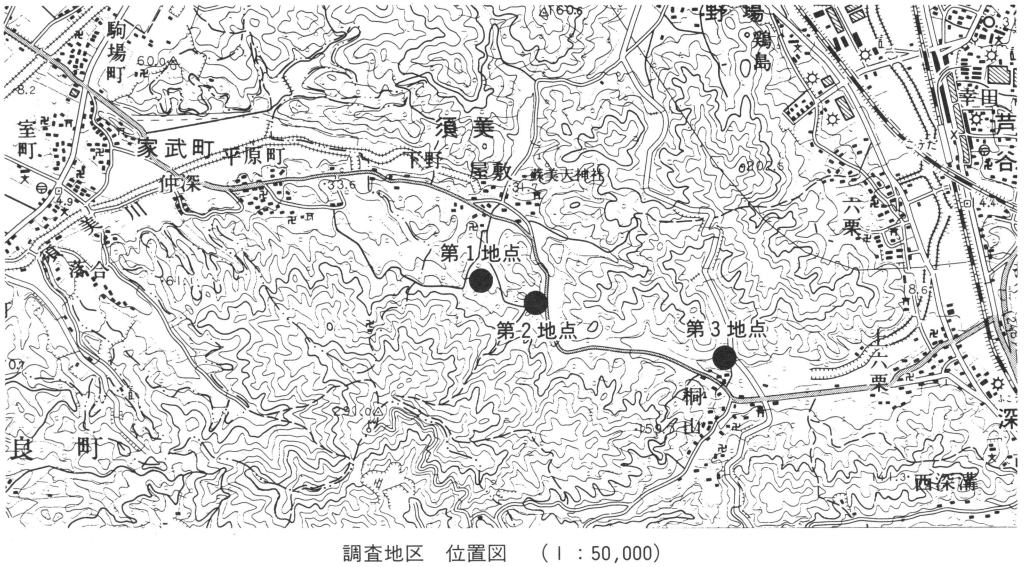
第３地点　額田郡幸田町大字桐山字広坪地内

トレンチNo.１～No.７　７箇所

トレンチNo.１にて溝・土坑の一部が検出され弥生土器（山中～欠山式）が出土した。トレンチNo.３の黒色土中より縄文土器（後～晩期）が出土。

以上より、第１～３地点のうち第２地点（江戸時代）・第３地点（縄文・弥生時代）について遺跡であることを確認し、前者を不馬入遺跡、後者を広坪遺跡と命名した。

（北村和宏）



調査地区　位置図　（１：50,000）

外町（そとまち）遺跡の範囲確認調査

調査の概要

外町遺跡は西春日井郡清洲町と新川町の境界付近で、清洲城下町遺跡のすぐ南に位置している。中世以降の美濃街道に面していることから、中・近世の遺跡であると想定された。

今回の調査は県道新川－甚目寺線建設にともないその範囲を確認するために実施した。調査は12箇所にテスト・トレンチを設定し、遺跡の所在の確認をおこなった。

調査の所見

外町遺跡の範囲は遺構・遺物の検出状況からトレンチNo.６とトレンチNo.７の間に設定しうる。遺物は西に行くほど濃密で旧美濃街道に面した地点ではかなり多量の遺物が出土した。遺物は近世のものがほとんどであるが中世陶器も若干見られた。

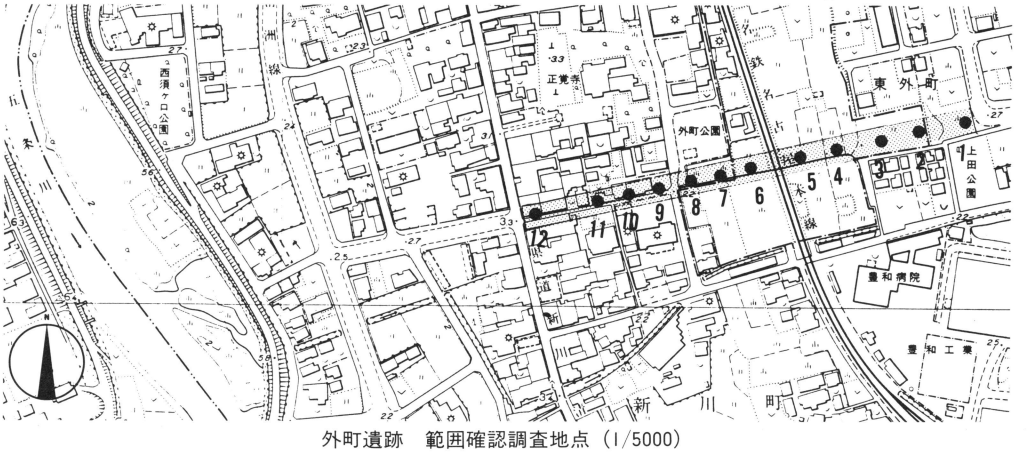
また、これとは別にトレンチNo.１、２及び周囲の畑には古墳時代の須恵器、土師器、中世陶器、近世陶磁器等の遺物が見られ、水田として削平されていない標高が高い部分については、いくつもの時代にわたる遺跡が存在する可能性が高い。　　（城ヶ谷和広）



トレンチNo.10　遺構検出状況



トレンチNo.12　出土遺物



外町遺跡　範囲確認調査地点（1/5000）

西上免遺跡（にしじょうめん）

調査の経過

西上免遺跡は一宮市今伊勢町馬寄及び尾西市開明町にかけてひろがる複合遺跡であり、現況は標高７ｍの水田及び畑地である。遺跡の西側は微高地に連続し、「野府城」が集落の中でその痕跡を留めている。西上免遺跡は弥生時代から鎌倉時代の遺物散布地として県遺跡番号0701として登録されているが、しかし本格的な調査は今回がはじめてである。調査は1991年（平成３年）２月～３月にかけて東海北陸自動車道建設予定地内（一宮市今伊勢町大字馬寄字東瀬古）において実施した。

調査の概要

遺跡の基本層序は、上から耕作層・黒褐色粘質層・黄色シルト層の大きく３層からなり、水田耕作地では第２層の黒褐色粘質土が削平されている。中世の遺構については、第２層上位にて遺構検出が可能であるが、それ以前のものについては極めて困難であり、遺構の正確な把握のためには第３層上位面にての確認が必要となる。したがって結果的に２面の遺構検出が必要となった。

調査区内で確認できえた主要な遺構は、下記のとおりである。

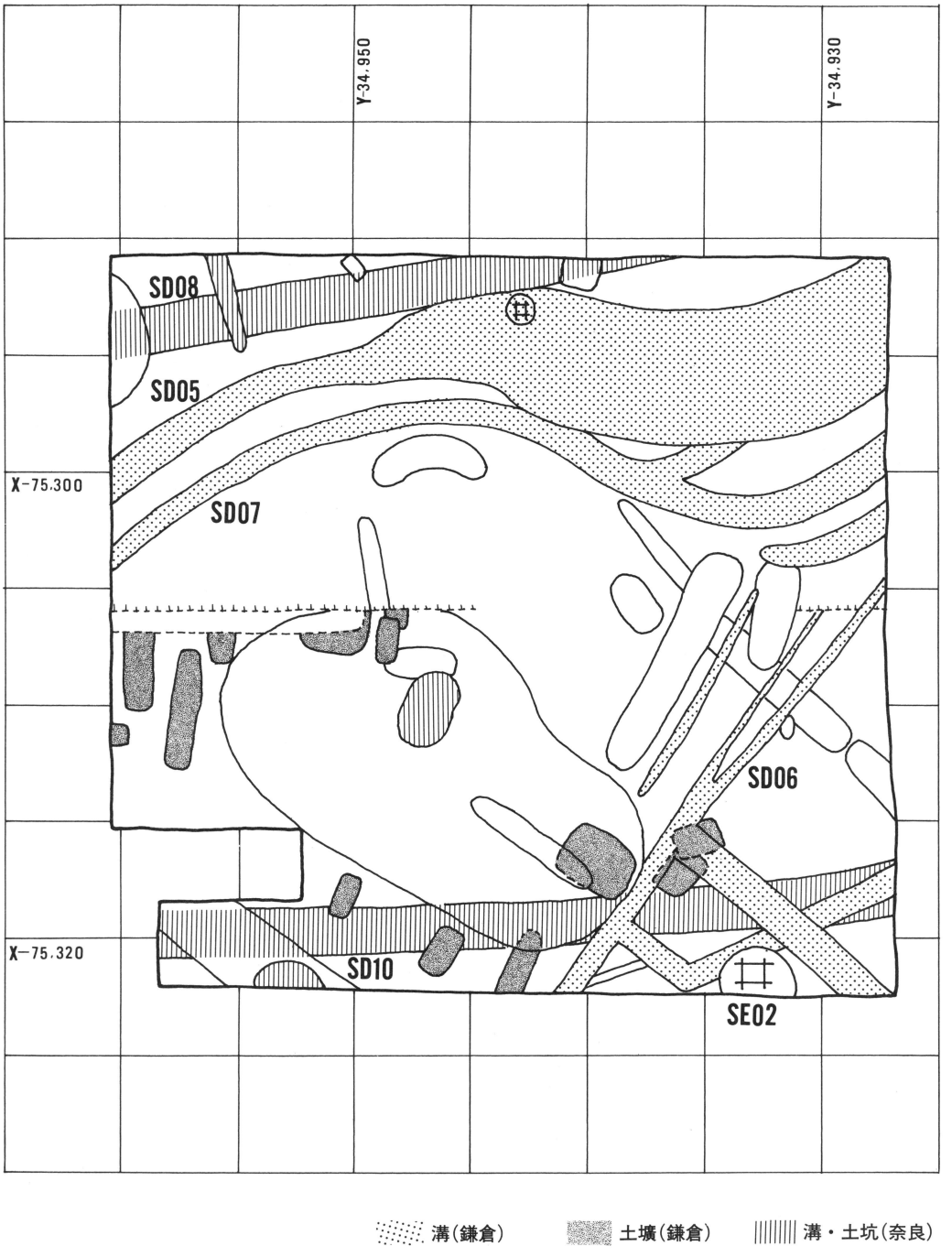
鎌倉時代後半　　溝13条・土坑６基・土壙13基・井戸２基その他柱穴多数

奈良時代　　溝４条・土坑２基

古墳時代前期　　土坑１基・竪穴住居１棟

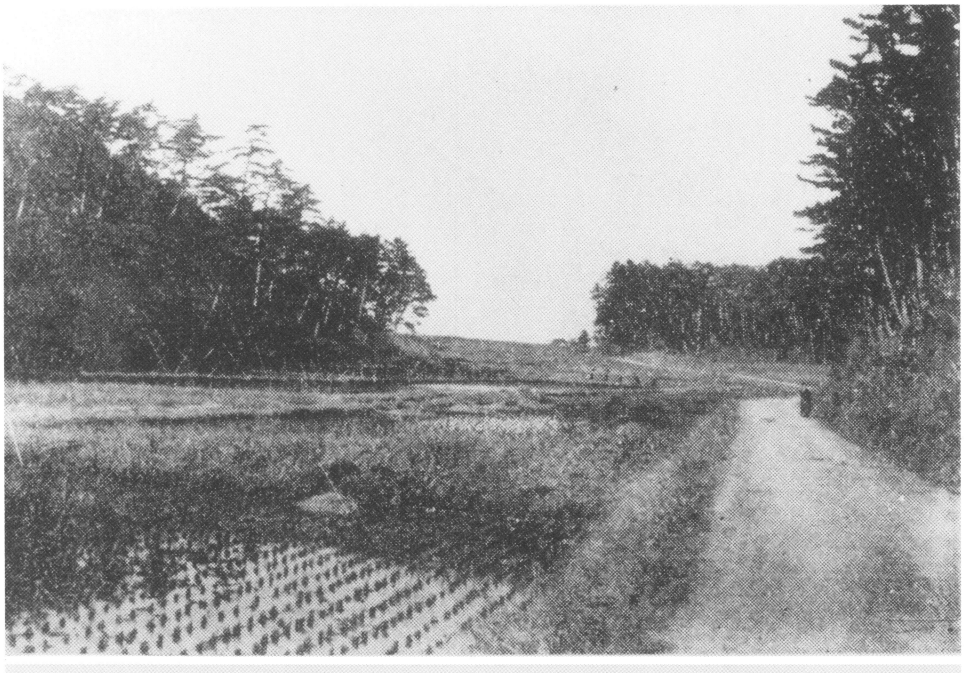
今回の調査において比較的遺構の関係が把握できる鎌倉時代後半（13世紀後半～14世紀前半）の遺構についてその性格を概観すると、まず調査区北側には窪地を利用するかたちで数条の蛇行する溝が掘削されており、その北側と南側には微高地が展開するものと考えられる。特に今回調査できた南側については、ほぼ全域にわたり土壙群が点在しており、その分布の状況は、数基単位で一つのまとまりが存在する。こうした土壙群の単位は、調査区東から西へ順を追って構築されていたものと推測できる。また調査区南東に位置するＳＤ06はこれらの土壙群の東端を区切る遺構として重要な位置を占めるものと思われ、同時にその東側には、井戸ＳＥ02・溝・柱穴が展開するところから集落の存在が類推できよう。

奈良時代の溝２条は、ほぼ東西に掘削され、特に調査区南端に存在するＳＤ10は溝幅２ｍ・深さ１ｍのＶ字形の溝であり、その性格が今後の課題である。その他古墳時代の遺構からは廻間Ⅲ式後半の土器が出土し、また遺物としては石鏃が認められるところより、近接して弥生時代から古墳時代の集落の存在が想定できよう。　　（赤塚次郎）



西上免遺跡主要遺構配置図（Ⅰ：300）

黄金堤（こがねづつみ）発掘調査報告



（境山岡戸瀬）　堤金黄と淵ヶ鐙

(大正末年頃)

例　言

1　本報告は、愛知県幡豆郡吉良町大字岡山字下り松に所在する黄金堤の発掘調査結果である。

2　調査は、主要地方道西尾吉良線の改築工事に伴う事前調査で、県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託をうけた㈶愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

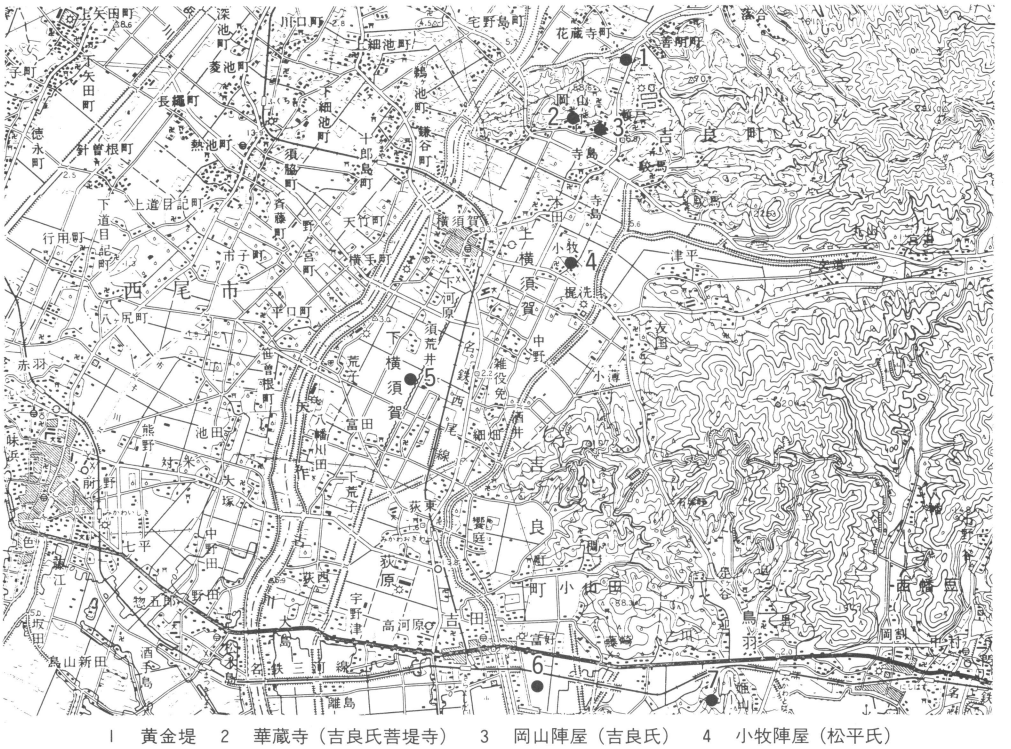
3　発掘調査は、㈶愛知県埋蔵文化財センター主事大橋正明・同北村和宏が担当し、平成２年10月15日～11月６日に行なった。

4　調査に際しては、次の関係機関の御指導・協力を得た。
愛知県土木部・愛知県教育委員会文化財課・吉良町教育委員会・西尾市教育委員会

5　調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。

6　執筆は大橋・北村が協議したうえで分担し、編集は大橋が行なった。

7　調査資料は、㈶愛知県埋蔵文化財センターにて保管している。なお、土層剥取り資料については、吉良町歴史民俗資料館で保管・展示される。



1　黄金堤　2　華蔵寺（吉良氏菩提寺）　3　岡山陣屋（吉良氏）　4　小牧陣屋（松平氏）
5　雑田川　6　富好新田　7　姫山陣屋（吉良氏）

第１図　黄金堤位置図（1/75000）

I　調査の経緯

平成２年、主要地方道西尾吉良線の改築工事計画が具体化し、道路拡幅にともなって黄金堤（愛知県幡豆郡吉良町大字岡山字下り松、県遺跡番号29－59107(1)）の一部が削平されることが判明した。

そこで、愛知県土木部、愛知県教育委員会文化財課等で協議が重ねられた結果、事前発掘調査を行なうこととなり、県土木部より県教育委員会を通じて委託を受けた㈶愛知県埋蔵文化財センターが調査を担当することになった。

調査は、平成２年10月15日の測量調査および写真撮影に始まり、11月６日の断面土層剝取り(2)をもって現地での調査をおえた。調査面積は100㎡である。

II　位置と環境

黄金堤の所在する愛知県幡豆郡吉良町は、渥美・知多の両半島に抱かれた三河湾のほぼ中央沿岸部に位置している。その地勢は、東・北部丘陵と中・南部の沖積低地に分けることができ、矢崎川が南北に貫流するほか矢作古川と西で接し、南は三河湾に面している。

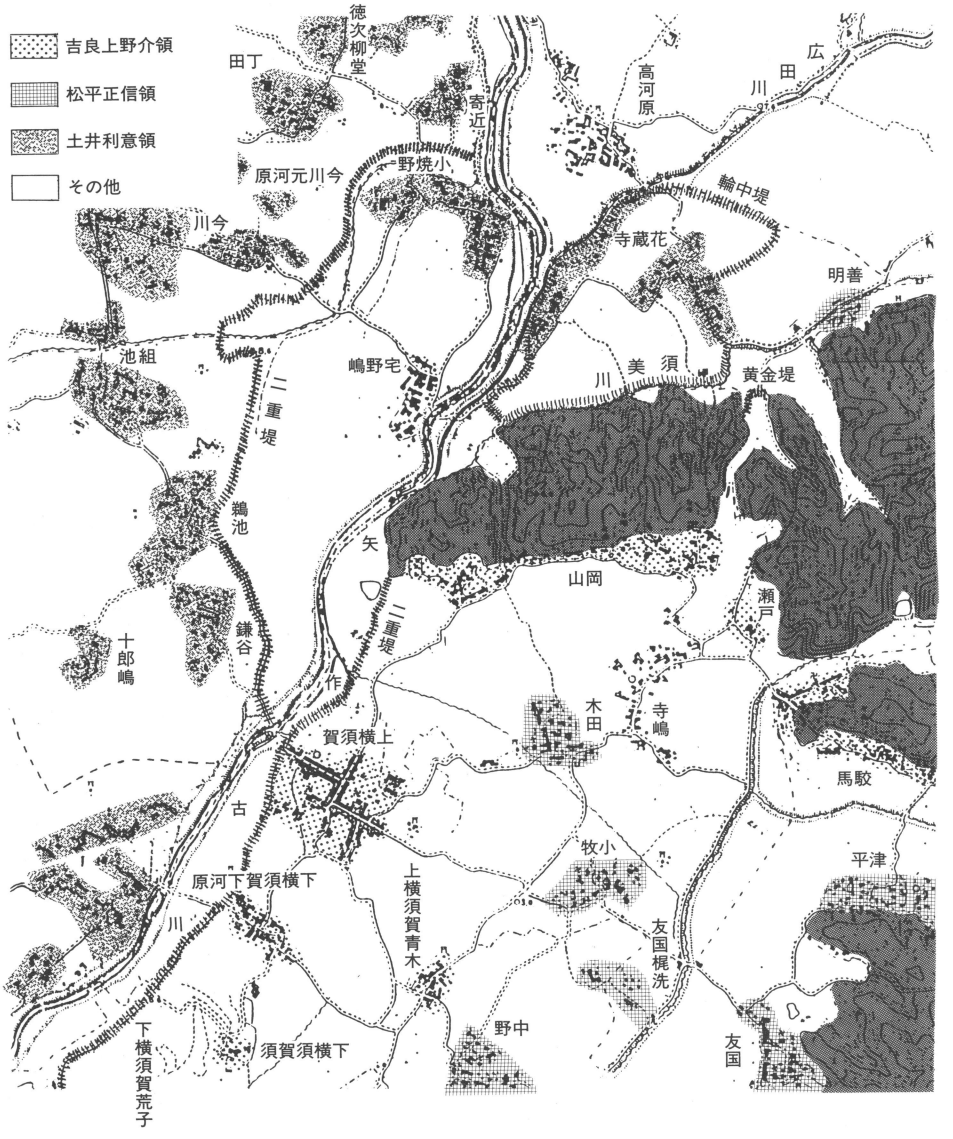
東・北部丘陵は三河山地の最南西端にあたり、東部丘陵が三ヶ根山（標高324.8m）から伸びる標高100m程度の丘陵地であるのに対して、北部丘陵は50m程度の低丘陵で茶臼山（標高290.7m）を主峰とする。丘陵の基盤は、石英片岩・珪線石黒雲母片麻岩・珪質片麻岩などの領家変成岩類が大部分であり、その上に母岩の風化土壌である褐色粘質土層が覆っている。南部の大字宮崎・乙川の一部には、斑れい岩類が確認されている。

黄金堤（第１図－１）は、北部丘陵の北麓－主要地方道西尾吉良線が西尾市との境をなす所に位置している。この地は、東の寄名山と西の背撫山に挟まれた狭長な谷底地形の端（谷口）にあたる（第３図）。永禄四（1561）年四月、東条城主吉良義昭を攻める松平元康方の武将、松平好景軍が全滅した善明堤の戦いはこの地が戦場となった。「谷フカク青浪ノ池藍ノ如クタタエタル」と江戸期の史書(3)が記しているように、また、土地の人々が「鎧ヶ淵」と呼んでいるように、かつてこの地は水をたたえていた。このことは明治四年の岡山村絵図面(4)によっても確認できる。

堤以北の地は、須美川・安藤川・広田川・矢作古川の諸川が収束する様な形で流れ（第２図）、近代に至ってもしばしば洪水に見まわれた地域である。黄金堤は、この洪水から吉良の地を守るために、領主吉良上野介義央が貞享３（1686）年に築いたものといわれ、義央の領国政策の一端を示すものと考えられている。義央の事跡は、この他にも雑田川の開

鑿（同年、１－５）や富好新田の開発（1688年、１－６）およびその地における製塩業の奨励等を挙げることができる(5)。

また、当時の所領関係を見ると（第２図）、吉良の地の大部分は吉良氏領（2700石）と上総国大多喜藩大河内松平氏領に二分され、東・北丘陵沿いの地域と横須賀が吉良氏領、中・南部の沖積低地の村々は松平氏領となっている。前者は岡山陣屋（１－３）と姫山陣屋（１－７）によって領国経営がなされ、後者は小牧陣屋（１－４）の手によって行なわれていた。岡山陣屋の西、指呼の距離ほどの所に近世吉良氏の菩堤寺、臨済宗妙心寺派の片岡山華蔵寺（１－２）が静かなたたずまいを見せている。



第２図　水防堤の分布（所領関係は1686年当時の様子）

大日本帝国陸地測量部
「西尾」明治26年
（S＝1/20000）

Ⅲ 沿 革

吉良上野介の黄金堤築堤

吉良上野介義央（1641～1702）は、義定にはじまる近世吉良氏４代、従四位下左少将高家筆頭の地位にあった4200石の旗本である。[6]知行地の多くは、現在の吉良町にあった。

伝承によれば、当時岡山以南は須美川・安藤川・広田川が矢作古川に合流する近接の地で、吉良の農民は毎年大水の害に苦しんでいた。そこで、義央は貞享３年９月に岡山陣屋代官斎藤金右衛門に命じ、西尾藩主土井利意等の反対をしずめて、瀬戸寄名山と岡山背撫山の間に堤防を築いた。以後、水害がなくなり良田となったことから、人々はこれを「黄金堤」と呼んだという。また、利意との約束で、一昼夜で築いたことから「一夜堤」ともいわれている[7]。

しかし、このことに関する同時代史料は、現在までのところ確認されていない。徴証としては、寛永５（1623）年岡山村検地水帳と宝永２（1705）年田畑水帳の比較[8]によって、前者に見られなかった「新堤」が後者に記載されていることである。しかし、堤の築造はここだけでは無く、「新堤」が黄金堤をさすのか否か確証は無い。

江戸期の水防堤の築堤

第２図は、黄金堤築堤当時の所領関係と江戸期に築かれた主な堤防を、明治26年の地図に示したものである。小規模なものは、岡山丘陵北麓の地にも築かれている。このうち築造年代の明らかなものは、西尾藩花蔵寺村の輪中堤で、寛文元年（1661）の成立である。また、小焼野から鎌谷に至る大二重堤は、黄金堤築堤に対して土井利意が築かせたものと考えられている[9]。さらに、岡山丘陵の西端から矢作古川沿いに伸びる二重堤は、文化９(1812)年以前の築堤である[10]。江戸期前半の築堤工事は、黄金堤だけではなかった。

明治期以後の黄金堤

黄金堤の名称の初現は、明治17年の瀬戸村整理図である。そこには、「番外三十二番黄金堤　長十七間四尺　幅平均九間」とある。長さ十七間とは瀬戸村内のみの数値であり、伝承では長100間３尺（182m）、高２間強（４m）といわれている。

明治30年代に至り、広田川・須美川を矢作古川から切り放し、黄金堤を取り壊して吉良地内を貫流する新水路の計画が立てられた。しかし、この計画が村人に知らされず測量が実施されるに及んで、村民の大反対に会い計画変更を余儀なくされた。請願書の文中に「誠に黄金堤は、其の名の如く我町村の為には金城鉄壁と称すべきなり[11]。」とある。

現在の黄金堤は、幅（北側の水路肩部までとして）14m、高さ（南の駐車場舗装面から）４mである（第４図）。

Ⅳ　調査結果

1　調査の経過

調査の対象となったのは、黄金堤の東端部で堤を東西に分断して走る主要地方道西尾吉良線の東側14m（A区）と、同西側４m（B区）の範囲である（第６図)。既述のようにこの黄金堤は吉良義央による築堤と伝えられるもので、今回の調査では黄金堤の構造（ひいては築堤技術）の解明とともに、所伝の検証も重要課題の一つであった。

調査は現況測量より行ない、それに基づいてトレンチの設定、縦横断面図をとる位置の策定を行なった。

A区の調査では黄金堤の東端部の様相、即ち堤と丘陵部との接点を捉えるべくトレンチを４本設けたが、堤の遺存部とみなされた高まりはいずれも二次堆積土ないし丘陵の残欠で、黄金堤関連の遺構は認められなかった。

B区の調査では、調査区の大半が以前の県道拡幅の際につくられた傾斜のきつい法面であり、堤を面的に掘り下げることは困難であった。そのため調査は、堤の縦・横断面の観察に主眼をおくこととした。まず縦断面を見るべく天端より道路面に向けてトレンチを入れた。その結果、盛土はいずれも現法面で寸断されており、黄金堤がこれより東方へ延長することが確認された。ついで横断面の観察のため重機を用いつつ堤の断ち割りを行なった。盛土の上部が脆弱で崩壊の恐れがあったため、作業の安全確保の見地から堤の基盤（地山）については充分な掘り下げを行なうことができなかったきらいがあるが、黄金堤の構造および築堤以後の状況を知ることができた。(12)

2　黄金堤の断面

第７図はB区で検出した黄金堤の横断面である。土層は土盛り法の相違等より大別して基盤および第Ⅰ～Ⅳ層にまとめられる。

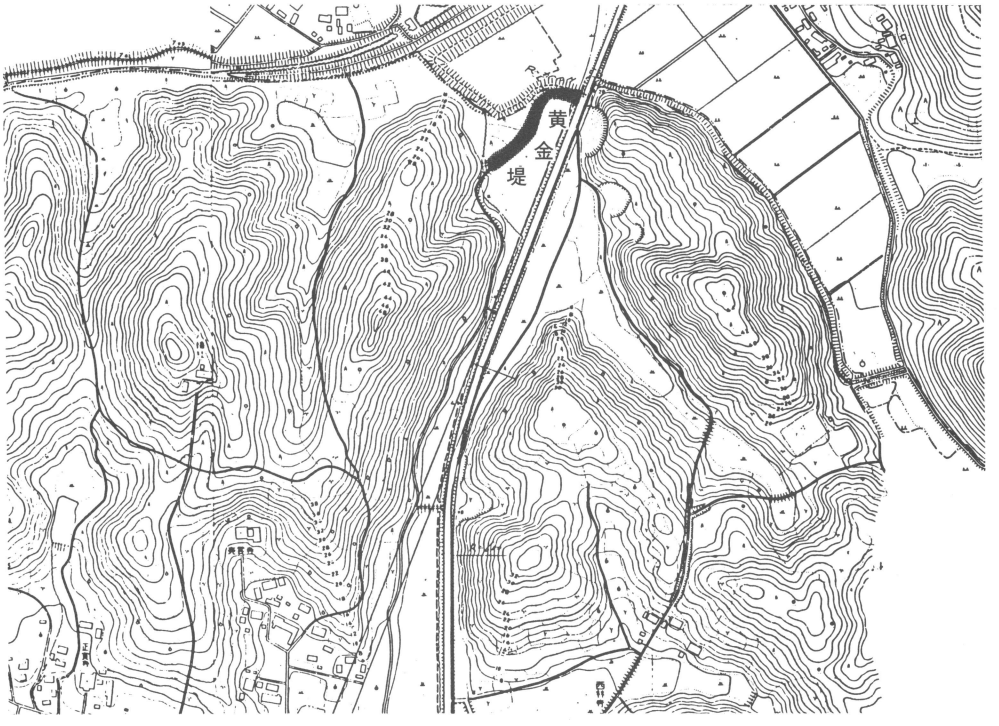
基盤（第７図　①～③層）

土層の広がり・厚さおよび均一性の強さからみて、①～③層は自然堆積土とみられる。ただ③層に関しては、堤状の高まりが認められ人為的作用が加わっている可能性があるが充分に究明するに至っていない。

第Ⅰ層（第７図　④・⑤層）

④・⑤層はともに粘質土で土層はブロック土の集積となっており、人為的な盛土とみられる。上面の凹凸が著しい点は注意される。

第Ⅱ層（第７図　⑥～⑳層）



第３図　昭和31年当時の黄金堤とその周辺（1/7500）



第４図　昭和63年当時の黄金堤とその周辺（1/7500）

第１層上にあり、土砂を水平に積み上げた土層を一括して第II層とする。頂部にあたる部分は粘質土と砂礫土を10～20cmの厚さで互層に積んでおり一種の版築工法と見られる。土質は砂礫土が主体で、粘質土主体の第Ｉ層とは明瞭に区別される。

第III層（第７図㉑～㉝層）

第II層上面に沿って、すなわち法面でその傾斜に並行し、頂部では水平に、若干質の異なる砂礫土を互層に積んだ土層を一括する。法面では土層は傾斜しておりいわゆる版築とは異なる工法とみられる。第III層を構成する土質そのものは第II層とほぼ同じである。

第Ⅳ層（第７図㉞層）

黄褐色土の一層で、厚さ1.0m以上をはかり、一息にかつ大規模に土盛りされたとみられる土層。土質および土盛り法とも上記の第Ｉ～III層とは大きく異なる。

3　黄金堤の築造と拡築

現在の黄金堤が、旧堤（第III層まで）に第Ⅳ層を付加する形で拡築[13]して形成されたものであることには異論はないが、第Ｉ～III層については様々な見方ができる。これは旧堤拡築の場合、築堤用土との密着を助けるために旧堤上の草木および根を除きかつ表面をかきおこすため、旧表土層の特定は困難となることに由来する。さらに付言するならば、拡築の契機についても、例えば(1)損壊したため補修をかねて拡築した。(2)何らかの理由で水量の増大が予測される状況となったため予防措置として堤の拡築を行なった等々これまた様々の要因が考えられる。殊に、損壊の位置が調査地以外の場合は、調査区での断面は(1)・(2)とも変わらないことになるなど問題は複雑である。ここでは、調査箇所が水害時に崩壊した可能性の存立する余地を残しつつ(2)の立場で考えることとする。

案の１　第Ｉ層を最初の築堤土とみて、第II～Ⅳ層を以後の拡築とみる考え方である。

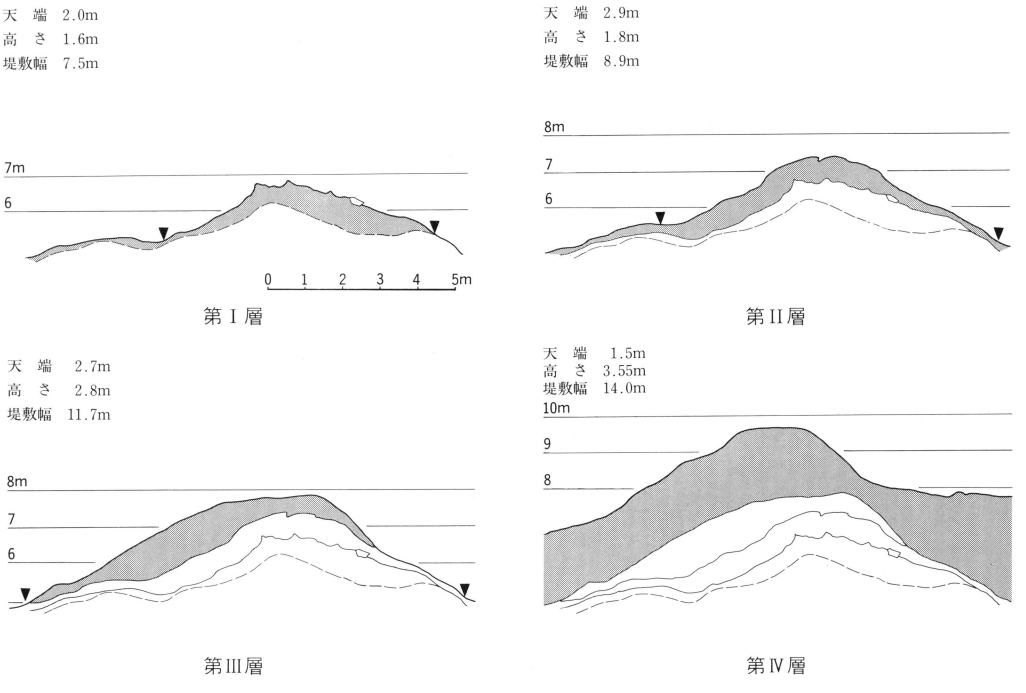
案の２　粘質土である第Ｉ層を堤の芯と考え、その上に砂礫土を版築（第II層）して築堤したとするもので、第III、Ⅳ層を以後の拡築とみなす。この場合、第III層の拡築は、天端が幾分堤内へ移ることから、旧堤拡築の際に一般的な「裏腹付け」工法を採ったものとみることができる。

案の３　第II・第III層は、土盛り法が異なるものの土質は酷似する点を重視し、両者を一連施業とみるもので、粘質土で芯をつくり（第Ｉ層）、さらに版築工法で芯を高めた後に土盛りして築堤したとみる考え方である。これは、第Ｉ～III層がそれぞれ異な

土層＼案	1	2	3
第Ｉ層	築堤	↑築堤↓	↑
第II層	拡築		築堤
第III層	拡築	拡築	↓
第Ⅳ層	拡築	拡築	拡築

第１表　黄金堤の築堤・拡築諸案

第５図　黄金堤の層序模式図

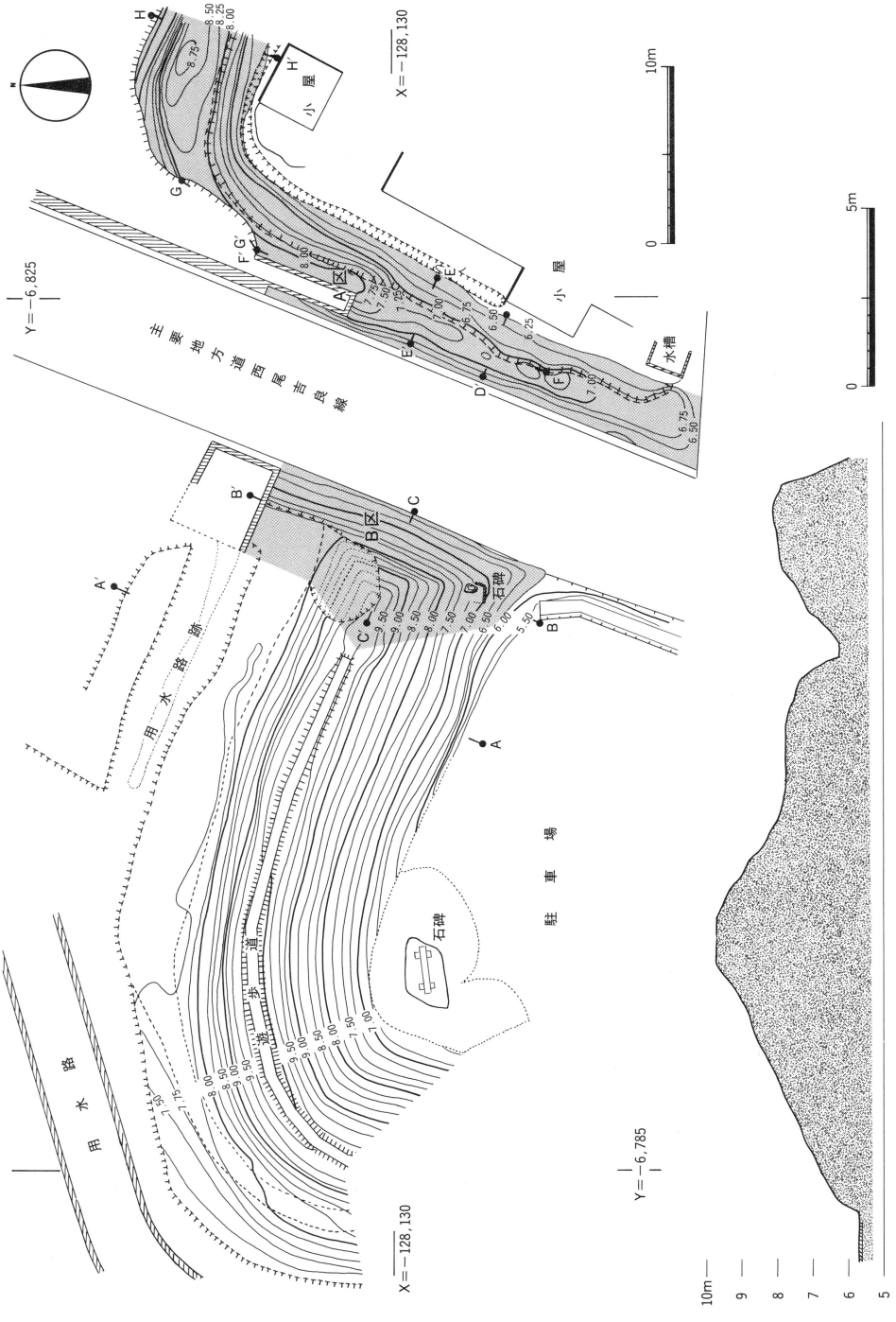


る土盛り方法をとっている点に注目し、これらを一連の工程とする見方である。

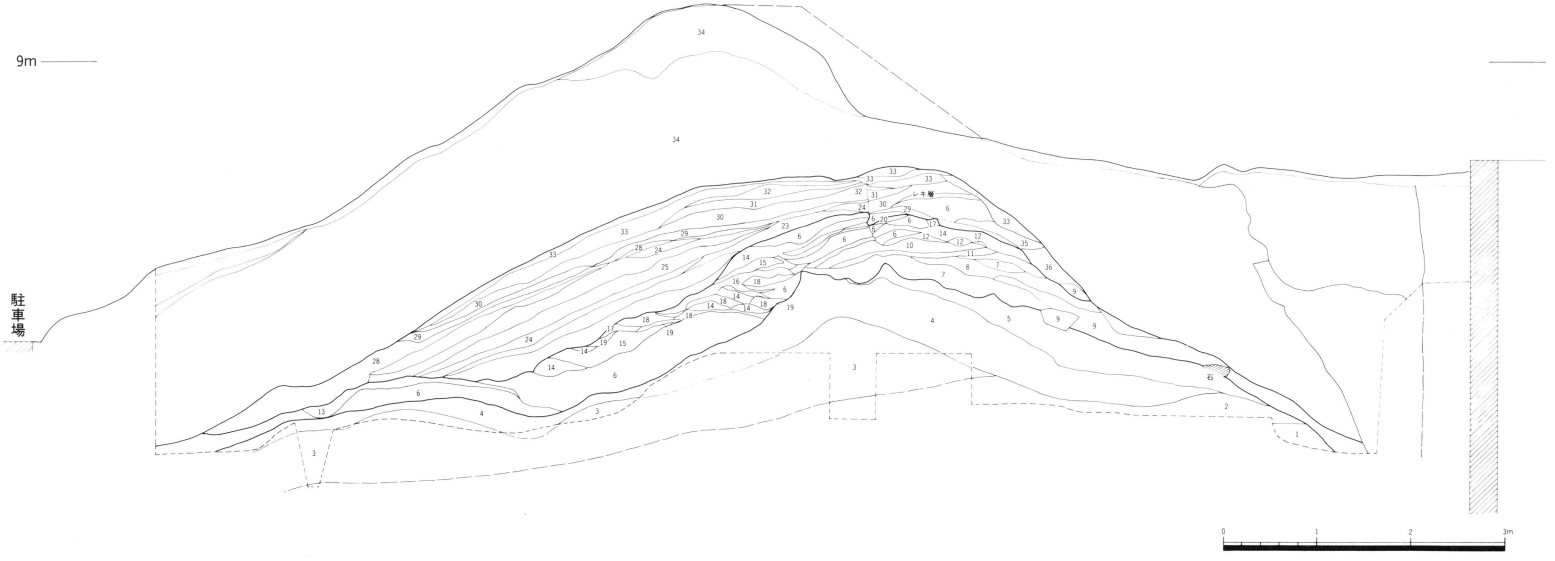
以上のいずれの案を妥当とするかは、担当者の間でも意見の分れるところである。本来ならば築堤技術の上から検討を加えるべき性格のものであろうが、現在のところ近隣では堤の調査例は皆無であり比較・検討の材料がない。いまは調査例の蓄積を待つべきであろう。強いて言うならば、築堤以後拡築は最大限３回（案の１）、最小限１回（案の３）とみておくことがもっとも穏当な見解といえようか。

4　築堤年代等

発掘調査によって出土した遺物は、唯一第Ⅳ層中より出土した６枚重ねの寛永通宝のみであり、それに伴う土坑等の遺構は認められなかった。寛永通宝の出土により、この第Ⅳ層が江戸～明治初期の拡築とも考えられるが、既述のごとく土質および土盛り法の点で他と大きく異なり、より後出的な様相を見せていることも考慮すべきであろう。(14)明治17年の整理図によれば、調査区に南接する５ｍ×10ｍの範囲は墓地である。納棺時に副葬した六文銭が、墓地の整理および黄金堤の拡築時に盛り土中に混入した可能性もまた否定できないところである。したがって、寛永通宝の出土は、時期決定の確たる証拠とするには危弱であると思われる。このほかには出土遺物はなく、年代を特定するにいたらなかった。



第6図　黄金堤測量図（1/400）　A－A断面図（1/200）



1 オリーブ褐色粘質土　2 褐色砂礫土　3 灰色粘質土　4 オリーブ色砂質・粘質混合土(混鉄)　5 青灰色砂礫混土
6 にぶい赤色砂礫土　7 暗赤灰色砂礫土　8 灰赤色砂礫土　9 青灰色砂礫混土　10 にぶい赤色砂礫土(6より礫少)
11 緑灰色土　12 緑灰色土　13 青灰色粘質土　14 小礫混じり暗褐色土　15 褐色砂質土　16 暗褐色砂礫混土
17 にぶい褐色土　18 小礫混じり黒褐色土　19 黒色土　20 黒色土　21 淡赤橙色砂礫土(白色石粒混じり)
22 にぶい赤色砂礫土(細かい)　23 淡赤橙色砂礫土(白色石粒混じり)　24 淡赤橙色砂礫土(細かい)　25 砕細礫土
26 にぶい赤色砂礫土(2と酷似)　27 にぶい赤色砂礫土(6より礫多い)　28 砕細礫土　29 腐養土　30 赤橙色砂礫土
31 褐色砂礫土(炭化物混じり)　32 明黄褐色砂質土　33 にぶい赤褐色砂礫土　34 浅黄橙色砂色シルト　35 緑灰色粘質土
36 橙色砂礫土

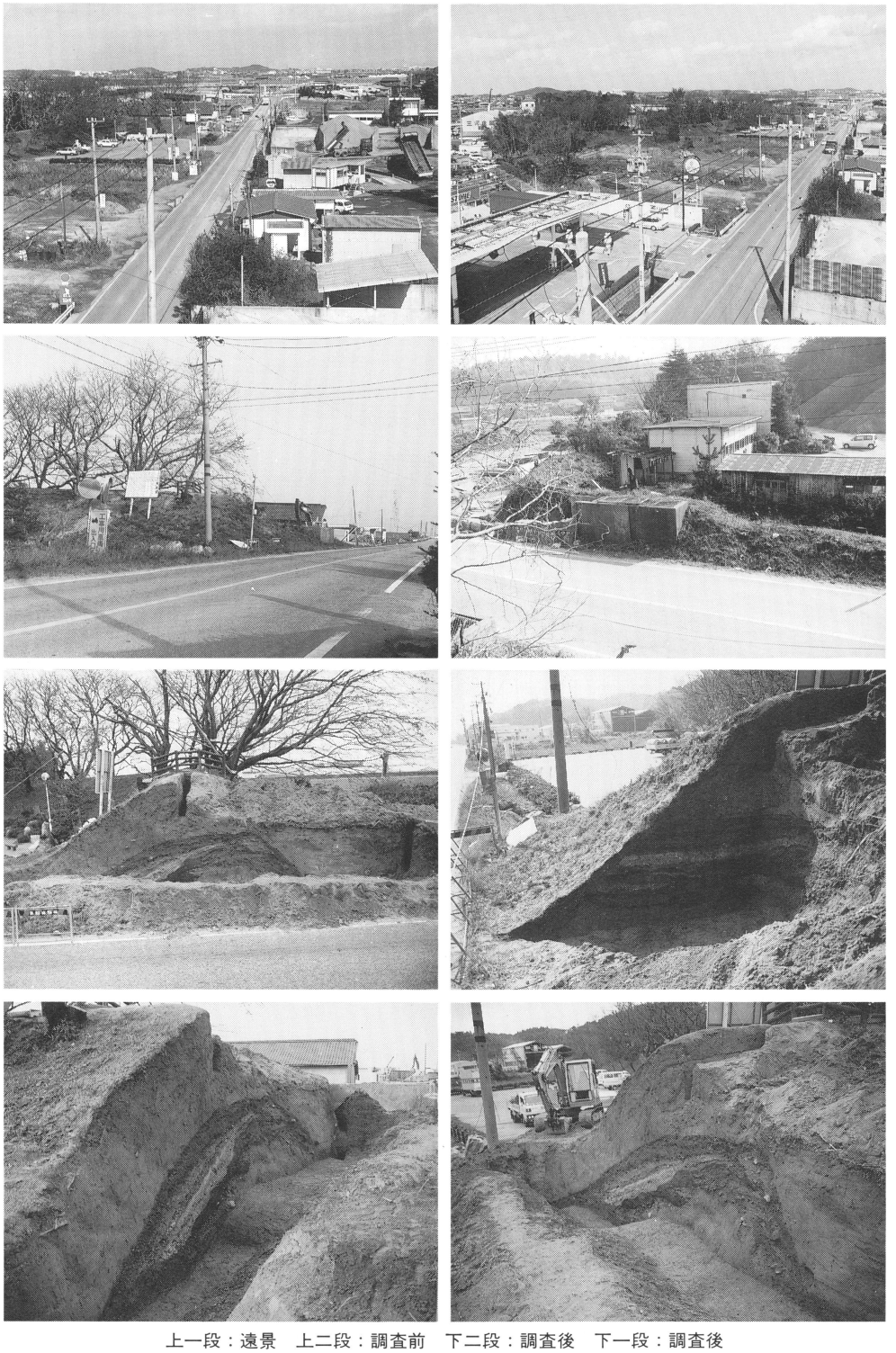
第7図　黄金堤B－B'断面図　(1/80)

図版 I



上：黄金堤近景（東から）　下：断面（東から）

図版 2



上一段：遠景　上二段：調査前　下二段：調査後　下一段：調査後

Ⅴ　まとめ

今回の調査結果について、以下箇条書きにして簡単にまとめておこう。

1　道路東側のA区に見られた堤状地形は、二次堆積土および丘陵残欠であり、黄金堤関連の遺構は認められなかった。

2　道路西側のB区は遺存状態が良好であり、以下の所見を得た。

①　堤の縦断面調査の結果、盛土は現法面で寸断されており、かつては更に東方に延長していた。昭和28年の道路拡幅との関連が想起される。

②　堤の横断面調査の結果、土層は土盛り法の相違等より大別して、基盤および第Ⅰ～Ⅳ層に分けることができる。

③　最初の築堤及び以後の拡築については三通りの案が考えられるが、遺物の出土も第Ⅳ層の寛永通宝以外皆無であり、近隣の調査例もなく結論を出すに至らなかった。

3　吉良義央の築堤という伝承を支持する年代観は、今回の調査では得られなかった。また、「一昼夜にして築堤し、以後一度の補修も加えられなかった」という伝承も、第Ⅰ～Ⅳ層の解釈をめぐり様々な見方がある現段階では、コメントを控えるべきであろう。

元禄事件及びそれ以後の「忠臣蔵伝説」[15]によってあまりにも有名な吉良上野介義央であるが、その領国政策については伝承のみが残る。同時代資料の発掘が求められている。

〔註〕

(1)　愛知県教育委員会『愛知県遺跡分布地図（II）　知多・西三河』　1988年

(2)　本センターの宮腰健司・中垣内薫・坪井知江子・古橋佳子の協力を得た。

(3)　岩瀬文庫蔵「三州西尾鶴ヶ城由来記」

(4)　岡山村区有文書「岡山村絵図面一枚」　1871年　吉良町史編纂委員会保管

(5)　吉良町『吉良町誌』　1965年　P71～2，482～4

(6)　『寛政重修諸家譜　巻92』

(7)　註(5)に同じ

(8)　岡山村区有文書「寛永五年戊辰九月吉日　畑方　三州幡豆郡吉良庄岡山村御検地水帳　三帖之内」「宝永二年　田畑水帳　岡山村　乙酉六月日」吉良町史編纂委員会『吉良町史　資料3』1990年所収

(9)　西尾市『西尾市史1』　1973年　P562、558

(10)　横須賀村区有文書「文政元寅年　三冊目　諸向之留控」『吉良町史　資料2』　1989年所収

(11)　岡山村区有文書「請願書」　1901年　吉良町史編纂委員会保管

(12)　調査中、吉良町史編纂委員会の鈴木悦道氏はじめ木部又介・鳥山　巌・船橋邦雄の各委員の皆さん、小島信久氏（当時吉良町立吉田小学校長）のご来訪、ご教示を得た。

(13)　堤防に関する用語等は次の文献を参照した。岡本芳美『河川工学解説』　工学出版株式会社　1968年

(14)　鳥山氏の話によれば、昭和初期の頃には現在よりも堤の高さが低かったという。これに従えば、第Ⅵ層はそれ以後の土盛りになる。また、現在堤上は桜並木になっているが、それも無かったという。

(15)　松島栄一『忠臣蔵』　岩波新書　1964年